
深き沈黙の娘

木綿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

深き沈黙の娘

【Zコード】

Z8772S

【作者名】

木綿

【あらすじ】

「インストス。

遠野ふきは、生き別れの父を尋ねてシチリアへ渡つた。だが自分が生まれたことさえ知らない父を前にすると、彼を苦しめた女の娘であるふきが名乗っても拒絶されるだけではないかという恐怖が先に立ち、ふきは沈黙したまま無為に年月を過ごす。

父の隣で笑う美しい妻と娘の存在。父への復讐心に燃え執拗に命を付け狙う女アビガとの戦い。心ときめかせた相手の冷たい態度。敵になり味方になりふきを翻弄する従兄弟。悪夢となつて甦る葬り去

つたはずの忌まわしい過去。現実はいつだつて残酷で、ふきは精神を磨り減らしていく。

愛と憎しみが同じコインの裏表なら、自分が宙に放り投げたコインはどうやら目を出すのだろう。

1・エンツオ・ナンニーの憂鬱

「シニヨール・ナンニー?」

エンツオ・ナンニーは顔を上げた。リストランテのテラス席でのひとり優雅なランチタイムを邪魔された不快感を隠そうとしたが、とつものことで完璧にはいかなかつた。

目の前に立つていたのは若い男だつた。ドルチェ&ガッバーナのシャツとパンツに身を包み、マルタ十字のシルバー・ネックレスを首から提げ、ブルガリの香水の匂いを纏つている。

エンツオが目を合わせると、男は笑つて挨拶した。訛りのない完璧な標準イタリア語だつた。エンツオはいつそう不快感を募らせた。シチリア訛りのかけらもない余所者。男の顔はどう見ても東洋系だつた。

無視を決め込んでいると、男は笑顔を少し歪めてなおも言葉を紡いだ。

「甥の顔もお忘れか、ズイーオ・エンツオ?」

一瞬、呼吸も忘れた。

「なんてね。20年近く会つてないから当たり前か。俺はタクミ、貴方の兄ロメオの息子です」

「……」

「日本語がお分かりにならないわけではないだろ?。 貴方に話があります」

「Non mi interessa. (興味はない)」

「そう言わずに。貴方の命に関わる話だ」

エンツオは店の者を呼ぶために手を挙げた。目の前の若者を追い出させるつもりだつた。

「新しい腎臓は要らないのか?」

打ち鳴らそうとした指は途中で動きを止めた。もう一度東洋系の男を見上げる。男は満足げに笑つた。

「とても蜂の巣にされた男とは思えない。一人で外食までこなすとはね。だけど無理はいけない、一番酷くぶち抜かれた腎臓は、もう両方ともものの役に立たないんだろう？ 人工透析が欠かせない体で、カポナータにピッソアにタリアテッレ、ドルチェはカンノーロ。死に急いでいるようなものだ」

「 黙れ」

やつぱり日本語喋れるんじゃないか、と笑う男が小憎たらしかった。

「何を藪から棒に。信用できると思つか？」

「そんなことを言つてられる余裕があるのかい？ 嫁の姓まで名乗つてファミリアから逃げたくせに、日本も日本人も大嫌いなくせに、祖母さんに泣きつく程切羽詰つてるんじゃないのかい？ しかもスカローネのコネでも適合者はまだ見つかっていないんだろう？」

スカローネ！

タクミの言う祖母さんというのは、エンツォの母ナオコのことだ。半世紀近く前、黒尾直子は日本からわざわざイタリア半島の長靴に蹴られる三角形の島へ渡つてきて、マフィアと癒着した真っ黒な商売人ルツィアスコ・スカローネと親しくなり、子供を二人生んだ。下の子がエンツォである。

「スカローネに泣きついた？ それは私への侮辱か」

エンツォはマフィアと癒着した実家の商売に嫌気がさして出奔した。まつとうな世界で職に就き、結婚し、家庭を設けた。今更、何があろうとルツィアスコを頼る気などない。今この命が危ぶまれているのだってマフィアのいざこざに巻き込まれたせいなのに、たとえ死んでもこの期に及んで関わりたくはなかつた。まして泣きつくなど、そこまでプライドを捨てられるものか。ただ母には知らせておくべきだと思つただけだ。

「さてね。ただ直子祖母さんが俺を呼んだのは確かだし、俺の渡航

費やら滞在費やらはスカローネとシニストラリの財布から出でる「
シニストラリ。シチリアに根を張るマフィアの一大ファミリア。
エンツォの実家スカローネの寄生先。

「成程、だから君が出張ってきたわけだ。かのアルエ・シニストラ
リの子」

エンツォの兄ロメオは、シニストラリの娘と結婚した。あからさ
ますぎる政略結婚だった。案の定というべきか結婚生活は惨憺たる
もので、ロメオは逃げるよう日本に移住しアルエは精神を病んで
一大スキヤンダルを巻き起こして死んだ。それで出来た溝を埋める
のにルツィアスコがどれだけ東奔西走したか、興味などなかつたがエ
ンツォの耳にも届いてきた。ビジネス上の取引こそ残つたものの、
スカローネとシニストラリの間にはしこりが生まれた。

おそらく母が、死なせた嫁の実家を頼つたのだろう。シニストラ
リが臓器売買に手を染めているのは周知の事実だ。だがアルエの一
件もありシニストラリに無償の善意は求めるべくもない。そこでア
ルエの血を引く、ロメオの息子を担ぎ出してきたというところか。
だが、タクミは首を横に振つた。

「俺とシニストラリに血縁関係はないよ。俺の母親は日本人で、こ
の体にシチリアの血は4分の1しか流れていない。スカローネもシ
ニストラリも、黒尾の姓さえ名乗れない。俺は貴方やファニアと同
じ愛人の子、だから今回のこととはシニストラリなりの謝意だよ。貴
方は彼らの抗争に巻き込まれただけだからね」

娘のことまで！

人のプライバシーにすかずかと踏み込んでくる男への怒りを、
プライドだけでどうにか押さえ込む。マフィアの世界は本当に虫睡
が走る。秘密など許されず、常に丸裸にされている気分だ。

「それなら君はスカローネにもシニストラリにも関わらず生きてい
けば良かつただろう。私に腎臓をくれるために、わざわざ首を突つ
込んできたのか？ 善きサマリア人というわけだ」

「残念ながら、型が一致しなかったので俺の腎臓は差し上げられな

い。ドナーは別の人間だ。このドナーこそが善きサマリア人でね、相手がマフィオソだろうと何だろうと人助けになるなら腎臓のひとつくらい喜んで差し出すような奴だ。その善きサマリア人をマフィアの世界に闇わらせたくないから、俺が窓口になっているタクミは懐から封筒を取り出し、テーブルの上に置いた。

「サマリア人からの手紙だ。顔も名前も知らない貴方のことをとても察じている。血液型やらH-L-A型やらの検査結果も同封してある。それとドナーは貴方の主治医のところへも検査に行かせた。そろそろ貴方にも連絡があるだろうね」

ウェイターがエスプレッソを運んできた。テーブルの前に立つたままのタクミを見て、席を用意しようかと訊ねてくる。

「No, grazie. Ora via. (結構

です、ありがとう。もう行くから)」

エンツォが何か言つ前に、にこやかにタクミが断つた。非の打ち所のない笑顔のまま、エンツォに向き直る。

「それじゃ俺はこれで失礼するよ。ズイーオ、余計なおせつかいかもしれないけどエスプレッソはやめたほうがいい。くれぐれもお大事に」

そのままタクミの姿はシチリアの陽光の中へ消えていく。後に残つたのは封筒とエスプレッソだけだった。

エンツォは熱い息を吐き、エスプレッソに砂糖をぶち込んでぐしゃぐしゃと力任せにかき混ぜた。

家に帰つても妻は挨拶ひとつせず、萎縮した様子でエンツォを窺い見るだけだった。溜め息を吐きたいのはこちらのほうだと思ったが、何も言わずまっすぐ自室に向かつた。

ジャケットを脱ぎ、タイを外し、一息ついたところで躊躇いながらも封筒を手に取る。結局、自分も命は惜しかった。

封を切つて手紙を取り出すと、石鹼のような清涼感とイチゴのよ

うな甘酸っぱい香りがほのかに立ち上った。

文章は、ところどころ不自然な感はあるが一応標準イタリア語で書かれていた。名はタクミに言われて明かせないと書いてあり、その非礼を詫びていた。ただ筆跡や文体から女性であろうことだけは察しがついた。あまり手紙を書くことに慣れていないようで、高い教育は受けていないかもしない。あるいはイタリア語が母語ではない可能性もある。

書き手の女はエンツオの腎不全が病によるものではないことは知っているようだった。流石にマファイアの銃撃戦に巻き込まれたことまでは知っている様子ではなく、何らかの事故に遭ったという程度の認識らしい。エンツオの身に降りかかった不幸に対し、真摯な気遣いの言葉が並んでいた。

自分が適合者であること、移植手術に喜んで協力する意思があることがはっきりと書かれており、最後はエンツオの快復を切に願う言葉で締めくくられていた。

手紙を持ってきたタクミの傍若無人な態度がなければ、涙が潤んだかもしれないというくらいの内容だった。少なくとも文面からは、混じり気なしの善意しか感じられない。

だが、シチリアの暗部を知らないではないエンツオは、尻尾を振つて飛びつく氣にはなれなかつた。善きサマリア人などエンツオは知らない。臓器移植はドナー側にも相当の負担だ。それを全くの善意から引き受けるような人間がいるなどとは、エンツオにはどうてい信じられなかつた。

だが忌々しいことに、エンツオの体にはもうあまり時間が残されていなことも確かだつた。週に数回の人工透析を受けてもなお、緩やかに悪化していく。

ベッドサイドの電話を見やると、エンツオ専用の番号にメッセージが残つてることを知らせるランプが光つていた。ナン二二二家では複数の番号を使つていて、プライベートや仕事用などで使い分けるためだ。エンツオ専用の番号はナンバー・ロック付きで、妻や娘

といえども暗証番号は教えていない。

ナンバーを入力しロックを解除して、留守録のメッセージを再生した。主治医のマツコラーリからだつた。弾む声で、ドナーが見つかつた、手術の日程を相談したいから折り返し連絡をくれ、と吹き込まれていた。秘書のクランキからも着信があつた。連絡が取れませんがどちらにいらっしゃるんですか、移植手術の件でマツコラーリ先生が連絡があるそうです、という内容のメッセージが残つていた。

タクミの、見下すような笑いが脳裏に浮かぶ。反吐が出そうだった。

それでもエンツオは、自分が受話器を取るしかないことも分かつていた。その前にどれだけ長く躊躇うか、早いか遅いかの違いしない。

2・緒貝巧の暗躍

夜、パレルモの街の片隅にあるバーで、緒貝巧はワインを飲んでいた。

イタリアワインは好きだ。エトナ・ロッソをボトルで注文した。日本でも手に入るワインだが、シチリアまで来て他の産地のものを飲む氣にもなれない。勿論現地だけあってご当地ワインの種類も豊富なのだが、種類が多いとはつまりピンキリということだ。

それに、活火山の名前は今晩会う相手に相応しい。さて、あの娘は今日は噴火するかしないか。

などと思つているとバーのドアが開き、女が入ってきた。待ち人来たり。

「チャオ、タクミ」

「チャオ、アビガ」

「クレード・ケ・トウ・スイア・コンテント」

不機嫌そうに紡がれた声に、巧は両手を挙げた。

「イタリア語はもう勘弁してくれ。日本語で話そう」

「あら、どうして？ 何の不自由もしないくせに」

「するさ。俺が勉強したのは標準イタリア語だよ。ここへ来てから朝から晩までシチリア訛りで、耳と口が疲れきってるんだ」

「喋れるくせに言われてもねえ」

女 アビガはプロセッコをグラスで注文した。泡が引くのを待たず、3分の1を流し込む。

「それで、進展は？」

「年内に手術だ」

アビガが一瞬動きを止めた。

「……もう連絡があつたの？」

「即決だつたね」

「意地汚いこと」

女は嗤つた。良い笑顔だと巧は思つた。

「それでもこれから検査の嵐で時間が掛かるさ。エンツォ・ナンニ

ーも命が掛かっているとなれば真剣にもなるだろう」

「それにしたつて、たかだか2年でしょ。心臓と違つて腎不全は透析である程度しのげるし、10年以上適合者を待つのだつてザラという状況で、降つて沸いた幸運にまあ恥ずかしげもなく飛びついちゃつて。H-L-A型が完全一致したわけじゃないんだから、見送つて完璧な適合者を待つたほうが良いんじゃないの」

「エンツォはハーフだから、もとから適合の可能性が低いんだよ。H-L-A型の分布は民族によつて偏りがあるからね。これ以上待つても、より良いドナーの出現はないと踏んだんだろう。直子祖母さんは致命的なところが不一致で、親父に至つては完全不一致だつたし」「普通兄弟つて25%の確率で完全一致なのねえ」

「それは同時に25%の確率で完全不一致つてことだよ。大体、そのパーセンテージは両親が同じだつた場合だろう」

「つまんない。もつともつと透析で苦しんで欲しかつたのに」「なら止めさせるかい？」

「出来ないわよ。この件に關してはふきが頑として譲らない。どうしたつて止められやしないわ」

「ふきちゃんがね」

遠野ふき。今回のドナーの名前だつた。

21歳の日本人の女で、高校卒業後すぐにイタリアへ渡り、語学学校に数ヶ月通つた後、レストランのウェイトレスやジエラテリアの売り子などの傍ら、日本人觀光客や留学生を相手に通訳やツアーガイドで小金を稼ぐ、その日暮らしのアルバイトだつた。

「名は体を表すつてほんとね。信じらんない、生まれる前に既に捨てられた身でさ。エンツォ・ナンニーはふきのことなんて知りもしないのに」

「君はエンツォを憎んでいるからね」

「ええ、勿論」

初めて会った時から、アビガはエンツォへの復讐のためだけに生きていた。生まれた時から、と彼女は言つ。

「アビガ。ふきちゃん。君も不思議だね。

ふきちゃんは誰よりもエンツォを慕つていてシチリアまで渡つてきたのに、拒絶されたらどうしようと疑心暗鬼になつて未だに名乗りを上げない。出さない手紙を書き綴るだけだ。

一方でアビガはエンツォへの憎しみに凝り固まつていて、彼をどう苦しめて殺すか、それだけしか考えてないよう見える。全く別の方向を向いている。

それでもつて、思考も行動も双方向へ筒抜けなのに、互いに互いをコントロール出来ていない

アビガは肩を竦めた。お前は分からぬで良い、とでも言いたげな表情だった。

巧は深追いせずに話題を少し戻すことにした。

「名は体を表すって？」

「知らないの？ ふきつて漢字でどう書くか」

「落？」

テーブルを指でなぞると、アビガは首を横に振つた。携帯を取り出し、プツシユする。『父嬉』と文字が出た。

「父の喜びの娘。ふきの母親もへんな女よね、普通女の子の名前に『父』なんて字使う？ そのせいなのかふきはやたらファザコン。名乗りり上げる勇気もないくせに、臓器をほいつと差し出すんだから、救いようのないバカ」

「はは。それは君だろ？、アビガ」

「どういう意味？」

「アビゲイル。ヘブライ語で、意味はやつぱり『父の喜び』君がエンツォを憎んでいるだつて？ とんでもない、君が望めば手術の中止は訳ないことなのに、ふきちゃんが、なんて持つて回つた言い方をして。エンツォに助かつて欲しいのは誰よりも君のくせに」

「……」

突如顔に冷たい感触が広がった。しゅわしゅわとはじける泡が滴り落ちる。

「プロセッ！」。良いね、美味しい」

「タクミ。一度と馬鹿を言わないで。アビガとこう名の意味は、エントソ・ナンニーへの復讐。それ以外の何物でもないわ。

「こうもすんなり移植手術が決まって私が嬉しいとでも思つてゐる？ ハラワタが煮えくり返るのをどうにか抑えてんのよ。止めたいに決まってるじゃない。それでも、結局ふきが主で私は従よ。あっちが本気になれば、こっちは逆らえない」

ドルチェ＆ガッバーナのハンカチでスパークリングワインを拭う。ブランド物は洗濯機にかけられないから厄介だ。放り投げておけば手洗いしてくれる妻は日本に置いてきた。

「まあでも、移植するならするで良いわ。トップが病んでるせいでナンニーの事業もそろそろ危ないし

「立て直して欲しいのかい？」

「勿論。今みたいにゆっくり衰退するなんて全然ドラマチックじゃないからね。ナンニーの事業は栄華を極めたところで真つ逆さまに転落してもらわないと、ショックが足りないじゃない」

「えげつないね」

「お褒めの言葉をどうも」

復讐しようと思つたら、相手を立てて得意の絶頂まで持つていて、それから叩き落さなきや意味がありません。

あれは誰の言葉だつたか。アビガはその教えを忠実に実行しようといつわけだ。

面白い。

巧は喉の奥で騒ぐ。嘲笑が口から零れ出す前に、ヒトナ・ロッシを流し込んで押し戻した。

「ところで、どうすんのよ。こんな人目のあるところではもうなんて。

私の復讐のためには、どんな些細なミスだつて避けなきゃいけない

いのよ。もし後々になつてあんたがしたことや、私とあんたの繋がりとかバレたら全部水の泡よ」

「おや。君はここに来ている。それはふきちゃんの意思だらう? どんなに消極的でも、知つていてあえて君の足を此処へ運ばせた運ばせるのを止められなかつたのはふきちゃんだ。なら今更だろ

う」

「ふきだけが知つてゐるのと、周りのどこかから漏れる可能性があるのど、じゃ大違ひよ。どうするのよ」

「心配要らないさ おいで」

タクミはバールに会計を済ませると、アビガを伴つて店を出た。何が心配要らないのよ、と文句を言つアビガに、口を閉じるように言つ。此処から先は、迂闊に日本語で喋つて注意を引くわけにいかない。

15分ほど歩いてバールから離れたところで、アビガを抱き寄せる。耳元に口を近づけ囁いた。人目には男女がいちゃついているようにならぬ見えなはずだ。

「家までは送らない。そのほうが良いだらう」

アビガは訝しげに、それでも頷く。巧は言葉を続けた。

「今夜のことは心配要らないよ、本当に。何なら明日の新聞を見れば良い。それじゃ、おやすみ」

頬にキスをして、巧はアビガから離れた。そのまま振り返らず自分のホテルに向かつ。

アビガはヒールを履かない。背後から彼女の足音は聞こえなかつた。

翌朝、巧はエスプレッソを飲みながら普段は読まないローカル新聞に目を通した。

昨夜とあるバールが放火されて全焼したらしい。そのバールの店主はマフィア反対運動に精力的で、ピツツオ、すなわちマフィアへ

のみがじめ料を頑なに拒み続けてきた。その事に対するマフィアの報復だろうと書かれていた。シニストラリという名こそ書かれてはなかつたが、その地区がシニストラリの縄張りであることは周知の事実だつた。

巧の渡航費、滞在費、手数料その他は前払いでの口座に振り込まれている。やりとりは全てシチリアに来る前にメールで済ませ、直接の接触は一切ない。ホテルだつてシニストラリと対抗する勢力の息のかかつたところを選んだ。

たとえスカローネの直系でも、巧は非嫡出子だ。スカローネと、ましてシニストラリとの繋がりなど、警察が辿れる筈はない。

そもそも、観光客にしか見えない日本人など、誰も疑いもしないだろう。

巧は無造作に新聞をラックに戻した。

心配ご無用、アビガ。

昨夜の全ては黒い灰の中だ。

3・遠野ふきの回想

その朝、遠野ふきは雨の中で田を覚ました。

疲れが取れない。3日前から楽しみにしていたオフの日なのに、昨日まで計画していた買い物も掃除もする気になれなかつた。

朝食を作る氣にもなれない。カップ入りのプラキヤミソールの上にシャツを羽織り、カプリパンツを履いて、化粧もしないで外に出る。数十歩歩いたところにバールがあつた。夜になれば酒を出すような洒落たところではなく、コーヒーとパンくらいしか出してくれない。それでも近くて安いから文句は言えなかつた。

ブリオッシュとカプチーノを注文し、頬張りながら新聞に目を通す。“fuoco”という文字が目に飛び込んできた。「火」という意味だ。

ボヤでもあつたのかと思つて記事を読んでみると、どうやらマフィア絡みの放火事件らしい。ここから少し離れたエノテカ・バールが焼き打ちされたらしい。

いつぺんに食欲がなくなつて、ブリオッシュを半分残してふきは席を立つた。休日の朝にバールで朝食を摂るときは、帰りに少し近所を散歩するのが習慣なのだが、今日はとてもそんな気になれなかつた。雨も降つていることだし、まっすぐ家に帰る。

家に戻ると、ルームメイトのガイアはまだ起きていないようだつた。ふきは自室に戻つてベッドに倒れ込む。

何とはなしに、サイドテーブルの一番下の引き出しを引いた。日記帳が数冊。そのどれもに、未投函の手紙が溢れんばかりに挟まつてある。宛先は全て同じだ。もう2年半にもなる。何度も父親に連絡を取ろうと手紙を書いては、出せず終わる。そのくせもう出さないと分かつている手紙でも捨てきれないのは、未練なのか何なのか。

記憶を手繕る。初めて書いた手紙はどんな内容だったつか

はじめてお手紙します。突然で驚かせてしまつたら本当にすみません。

私は遠野ふきといいます。先々月から、あなたの経営するリストランテ、Bella Cristaで働かせてもらっています。お店で何度もお見かけしたことがあります、おわかりでしょうか？私はまだ新米の下っ端ですから、「こ存じないかもしません。でも、今のスタッフでアジア系は私だけですから、リストランテにまた来てくださいたらすぐにわかると思います。

でも、今回お手紙を書いているのは、お仕事の話ではありません。どうしてもおたずねしたいことがあるのですが、とてもプライベートなことで、まずそのことをおわびします。ろくに面識もない私が、いきなりプライバシーに踏み入るようなお手紙をさしあげて、本当に申しわけありません。

突然ですが、私はあなたの娘かもしれないのです。

本当に、本当に失礼な手紙かもしれません。それでもどうかお許しください。どうか不快にならないで、できれば最後まで読んでください。

遠野陽子を覚えてらっしゃいますか？私の母です。私の生年月日はXXXX5年2月16日です。私が生まれる前の年、XXXX4年の夏ごろまで、あなたと私の母は男女の関係にあつたと聞いています。

もちろん、だからといって確証があるわけじゃありません。おふたりは結婚もしていなかつたし、母は私が生まれてからも結婚してからも、恋愛関係ではかなり自由な人でした。なんにしても私の生まれる前のことなので、私にはよくわかりません。母があなたに妊娠

娠を告げたかどりかも、私は知りません。

母は、私の父親はあなただと言つていました。私の顔は、イタリアの人にはアジア系にしか見えないみたいですが、日本では逆に混血児にしか見えなかつたようで、いつもどこでも何かしら言われました。母の話では外国の血が入つた人とつきあつたのはあなただけしかいないそうです。つきあつた期間からいつても、たぶん私の父親はあなただろうと。

あなたとはケンカ別れで、連絡先も知らないと母は言つていました。

私は18歳です。日本ならともかく、ここイタリアではもう成人です。だから今さら何かしてもらおうとは思つていません。本當です。

ただ、私は自分が誰だか知りたいんです。自分が誰の血をひいているのか、それを知りたい。

身勝手ですね。あなたにはもう家族がいて、私にそれをひつかきまわす権利なんてないのに。

それでも、私は確かめたいんです。会つていただけないでしかか。会つて、お話しして、事実を明らかにするのに協力していただけないでしようか。

もし私があなたの娘でも、だからといってあなたに迷惑をかけることはしません。ご家族に不愉快な思いをさせるようなら、あなたとのつながりは秘密にして一生誰にも言いません。

そして、もし事実無根の言いがかりだつたら、本当に本当にごめんなさい。

ここまで読んでくださつてありがとうございました。心から、連絡をお待ちしています。

1月26日

遠野ふき

封筒にはイタリア語で宛て先と宛名も書いてある。住所は会社のものが宛名は個人名で、S・P・M（親展）と明記した。切手まで貼つてある。

それでも、出せなかつた。拒絶されたらどうしようと、そんなことばかり怖がつて何も行動を起こせなかつた。

手紙を挟んだまま、日記帳をめくる。毎日欠かさずとはいかないものの、平均して二日に一度は書いていた。ふきにとつて日記は普段言えない愚痴を書きつけて不満やストレスを吐き出す場だから、読み返してあまり楽しいものではなく、普段は手に取ることもしない。今日に限つてなぜ昔の日記帳を開く気になつたのか自分でも分からなかつた。

一昨年の1月末から2月初めまでの日記は、出せない手紙のことばかりだ。今日も出せなかつた、明日こそ、とこうよつた文章が並んでいる。2月9日の日記になつて、ようやく諦めたようなことが書いてあつた。

lunedì 9 febbraio

やつぱり、結局出せなかつた。本当は私、出す気なんてないんだる。だって怖い。この日記の中であえ、あの人の本当の名前も書けない。

手紙を出すことば、じばりへあきらめよつ。私には耳すがる。手紙を書くまでは勢いだつたけど、出すのは……とてもじゃないけどそんな心の準備ができない。

それより…… 日記だけでも、お父さんって呼んでいいかな？
大丈夫だよね。誰にも見せるつもりないし、どうせ日本語で書く
し。

の人…… お父さんだけは日本語わかるだろうけど、悲しいかな
今は部屋の外にも持ち出さない日記を見られるような関係じゃない。

まずはそこから、始めよう。

s a b a t o 1 4 f e b b r a i o

自己嫌悪。何てことしちゃったんだろう。

お父さんにチョコを送りつけてしまった。B u o n S a n V
a l e n t i n o とだけ書いたカードを同封して。
差出入人の名前も住所も書かなかつた。なんて失礼なことしちゃつ
たんだるつ。

でも、名乗り上げる勇気なんてなかつた。親子かもしれないって
ことを言つ必要はないけど、名前だけを書くのも怖かつた。だって、
「遠野ふき」がそれだけで拒絶されたら、きっと私は立ち直れない。
娘としてじゃなく、人間としてすら、いらないとか迷惑とか思われ
たらどうしよう？

でもそれなら、出さなきやよかつたのに。結局一番お父さんに迷
惑なことしちゃつたのかもしれない。

それに、出してから気づいたけど、バレンタインにチョコなんて
日本人の発想だ。私だってばれたらどうしよう。どうしよう。どう
しよう！

19歳になつた。ケーキ買って食べた。

ふきの手はページを繰るのをやめない。日は一昨年の3月を追う。

lunedì 8 marzo

今日はイタリアでは女性の日。身近な女性にモザの花をおくる日らしい。イタリアに来てはじめて知った。

誰も私にはくれなかつたけど、ね。モザの黄色がやたら日についた以外は、ふつうに忙しいいつもどおりの日。今日も疲れた。

martedì 9 marzo

今日がお父さんの誕生日なんて知らなかつた。

仕事先のリストランテにお父さんが來た。オーナーなんだから、來ること自体はめずらしくない。

ただふつうはランチにくるけど、今日はディナーだつた。何より、貸切パーティーだつた。

奥さんと娘さん、会社のえらい人たち、友達らしい人たち、大人數ですごくにぎわつた。

ウェイトレスの仕事は忙しかつた。同じタイミングで料理出さなきやいけないし、苦手なスパークリングワインのサーブも逃げきれなかつた。

私より3つか4つ年下らしい娘さん フニア・ナンニーエ

んは、「パパ！」って呼びかけてお父さんにキスしてた。何度も何度も。

私が仕事、ちゃんとできたのかな。

mercoledì 10 marzo

お父さんにバースデーカードを出した。

Tantissimi cari auguri di buon compleanno

お決まりの文句を書いただけ。また差出人の名前は書かなかつた。出した後に自己嫌悪になるつてわかつて、どうしてやるんだろう。

1日遅れの、無記名のカードなんて、いやがらせでしかないんじやないかつて出してからどんどん思えてきて、ひとつぼにはまつてる。お父さん、いくつになつたんだね。

今にして思えば、と21歳のふきは思つ。

可愛らしい悩みでしかなかつた。書いた当時はこの世が終わるかもしれないくらいの悲愴な気分だつたが、それでもこの時が人生で一番穏やかで、幸せな時間だつた。

誰もまだふきへの敵意を露わにしていなかつたし、知りたくないなかつた事実もこの時はまだ知らなかつた。

シチリアの太陽が苛烈さを増すにつれて、ふきを取り囲む現実もどんどん厳しくなつていつた。

4・遠野ふきの追想

boiled? 22 aprile

お父さんがまたベラ・クリスタに来た。奥様のクリスタベラさんと、娘さんのファニアさん、それから秘書のレオ・クランキさん。

今日はファニアさんの誕生日だつたらしい。もうそく16本立てたケーキを運んで、4人だし16本なら分けるのにちょうどいいな、という考えになるあたり私もウェイトレスの職業に染まつてゐる。ツアーガイドや通訳だけじゃオフシーズンまで食べていけないから、副業のつもりで始めたウェイトレスなのに、すっかりこっちが本業みたくなつてゐる。

……違うな。何で自分の日記で言いわけしてゐるんだね?

ほんとはテーブルに行くのもつらかった。だけど仕事だから、そんなことも言つてられない。一生懸命別のことを考えて、感情にふたをしてた。

ウェイトレスが副業とか。確かに私の就労ビザは観光会社の書類で下りたけど、ベラ・クリスタで働きはじめたのは理由なんて、お父さんの経営するリストランテだから、それだけだ。ベラ・クリスタグループはバールとかジエラテリアとか菓子店とか幅広く経営しているのに、その中でリストランテを選んだのは、お父さんがしおちゅうっこでランチするからだ。

まあもちろん、菓子店やバールよりはリストランテのほうが外国人観光客が多くて、だから私を雇つてもらえたというのもあるんだろうけど。

……ああ、ひとつだけいいことはあった。私が経験を積んだおかげで、お父さんの注文を取りに行かせてもらえるようになつたこと。これまでオーナーの接客なんて私みたいな下っ端には任せられなかつたんだけど。

でもお父さんは事務的な話しかしない。他の人とは多少世間話もするのに。

ひょっとして、私のイタリア語まだまだなんだろうか。だから最低限しか会話しないよう、気をつかってくれてるのかも。いや、でも、期待は禁物。私より他のスタッフのほうがつきあい長くて気心が知れてるつてだけかもしれないし。

あれ、そういうえば、お父さんはお母さんとつきあってたときは日本語しゃべってたんだよね。けつこう難しい漢字使って手紙とかも書いてたつて言うし。……私、中国人だと思われてるのかな？

lunedì 26 aprile

お父さんがまたランチに来た。今日は秘書のクランキさんと一緒にだった。

サーブは私がさせてもらった。注文を取るのは支配人がやつたけど、料理を運ぶのは任せてもられた。

クランキさんは、近くで見ると意外に若かった。25にもなつてなさそう。

会話の内容からも、秘書つて言つよつて学生のインターーンで仕事を教わってる、つて感じだった。難しいビジネス用語はほとんどわかんなかつたけど。

でも、まあ、かつこいい人だった。スタイルいいし、顔もいいし、おしゃれだし。頭もよさそうだし。いいなあ。

嵐の前の静けさ、とは正にこの頃のことだった。

父との距離が近づいたようで嬉しかったし、ハンサムなレオ・クランキに深い恋心を抱いて浮き立っていた。19歳にもなつて、ま

るで中学生の恋愛のような他愛もないことが書き連ねられている。

父のテーブルには積極的に自分が行き、支配人にまで頼み込んで出来るだけ関わせてもらつた等。レオとはやたら視線が合つよう気がするだとか、父と一緒にでも単独でリストランテに来るようになつたのを嬉しがつていたり等々。

けれども幸福なんて、次に深い不幸へ叩き落すために存在するものだ。

運命はターゲットを手中におさめると、奈落の底まで勢い良く投げ落とすためには腕を高く振り上げる。幸運とは、落下の前のほんの束の間の時間に過ぎない。

それをちゃんと知つていた筈なのに、ビリじてこの時に限つて勘違いしてしまつたのだろう。

父に厭われていることを、レオ・クランキに疎まれていることを、どうして気づかなかつたのだろう。

早く気づけば、まだ修復のしようはあつたかもしれないのに

d o m e n i c a 1 3 g e l u g n o

バカだバカだ。私はバカだ。

何をカン違いして、ひとりで舞いあがつて。

どうしよう。どうしたらいいんだらう。

クランキさんと会つた。話があるつて言われて、まさか生まれてはじめてのデートかと、浮かれてた私はどれだけバカなんだろう。クランキさんはまだ大学に籍はあるけど、ベラ・クリスタグループの経営にもうかなり深く関わつてゐる。仕事の話だった。こんなことを言われた。

「君の勤務態度についてだが、問題なくやつてこなとは思つ。支配

人の評価でも、特にトラブルなく勤めていると聞いた。

だが　僕にはひとつ気になることがある。単刀直入に言おう、君はエンツォに個人的な感情を抱いているんじゃないか

血の気が引くって、ああいうことだ。

仕事はちゃんとやつてきたはずだった。お父さんの前でも、クランキさんの前でも、いろいろ内心で動搖することはあつたけど、できるだけ表に出さないようにして、仕事はおろそかにしてないつもりだった。

だけど、クランキさんにはバレバレだったみたいだ。

「正直、この手のトラブルはよくあることなんだ。君が初めてではない。あけすけに言って、エンツォは見た目も良いし、ビジネスも成功していく、社会的地位もある。エンツォ曰当てにベラ・クリステに通り詰めたり、ウェイトレスのアルバイトに入つて事あるごとにエンツォに話しかけようとする女性は後を絶たないんだ。

ストーカーになつたり、奥さん　クリスタベラに執拗な嫌がらせをした輩もいた。君はまだそこまでではないようだが、いつエスカレートするとも分からぬ

「私　私、そんなことしません！」

「結構。だが、口では何とでも言える。

客やオーナーに接する際に相応しいものだとは思えない君の態度は、働き始めた当初から変わっていない。以前に比べて最近はかなり分かりやすいが、働き出してからエンツォに好意を抱いたわけではないだろう。初めから、エンツォ曰当てでベラ・クリスタを選んだんだろう？」

それは事実だつたから、何も言えなかつた。

「正直、そんな浮ついた考えの従業員は必要ない

「……クビ、ということですか？」

「解雇もやむなし、と僕は思つてゐる」

「待つてください！　たしかに、オーナーがいらっしゃるから入店を決意したことは否定できません。だけど、私はこれまで何か具体

的に行動を起こしたわけじゃないし、仕事もちゃんとやつてきたつもりです。それに、クビにされたら私は生活していけません。イタリアで外国人が職を見つけるのがどれだけ難しいか、ご存じでしょう？」「う？」

「確かに、君のサービスはちゃんとしたものだし、エンツォが来ても業務に支障をきたすほど我を忘れてはいないようだ。

そこで提案だ。君の仕事振りを評価して、解雇の提言はひとまず保留する。だが、もうリストランテでは働かないで欲しい。仕事が必要で辞められないなら、ベラ・クリスタグループのジエラテリアに移つてもらいたい。ちょうどこれから暑くなる、ジエラテリアには人手が必要だ。ジエラテリアに異動し、極力エンツォとの接触を持たず、出来る限り速やかにエンツォへの気持ちを忘れ去ること。それを誓つてくれるなら、この件に関しては不問にする」

生活費が必要ならアイスクリーミングスタンドの売り子でもして、一度とお父さんの前には顔を見せるな。そういうことなんだろう。

私はうなづくしかなかった。お父さんと離れたいわけがない。名乗れなくても、名乗れないからこそ、唯一の接点を失いたくなかつた。

だけど実際問題、クビにされたらお父さんに会うことが、食べることにも困る。

「……私の態度は、そんなにひどいものでしたか？　あなたには見破られてしまつたけど、できるだけ表に出さないようにしてきましたつもりです。オーナーやご家族に迷惑をかけるつもりもありませんでした。それでも異動しなきやならないんでしょうか。

リストランテの仕事は時間をかけてやつと覚えられたんです。メニューの種類とかワインの名前とか、いろいろ勉強したことをムダにしたくありません。これからオーナーの対応は他のスタッフに任せることにして、私は他の仕事をやります。それでもダメですか？」

「駄目だ」

「どうしてですか」

「これについては、君だけの責任ではない。他言無用にしてくれ。エンツォはそもそも、日本人が嫌いなんだ」

「え？ ご自分のお母さまが日本人なのに？」

「流石に良く知っているな。調べたのか？ そういうストーカーのような真似も今後一切しないでくれ。言うまでもないが、エンツォの個人情報を他人に話すのも絶対に駄目だ。

エンツォは昔、日本で酷い人間関係のトラブルに巻き込まれたことがあるらしい。そのせいで日本人、特に若い女性が好きではないんだ。

勿論これはエンツォの個人的な事情に過ぎず、それは本人が一番良く理解している。だから彼は自分の好みを他人に押し付けたりはしないし、過去のトラブルと無関係な日本人に対しても感情を抑えて不当な差別などをしないように気を遣っている。君が日本人だと知つても彼が解雇しようとしたくなかったのも、サービスに文句を言わなかつたのもその為だ。

だがベラ・クリスタはエンツォのリストランテだ。君が来るまでは、彼はあそこでランチを心底楽しんでいた。エンツォの仕事は常に忙しい。その中で、数少ないリラックスの時間だつたんだ。

それを奪つたのはフキ、君だ。一介の従業員である君のことなどオーナーであるエンツォはどうとでも出来る筈なのに、自分の個人的な事情で君に不当な不利益を被らせるべきではないと、耐えているんだ。半年も遠慮を重ねさせておいて、まさかその気持ちを汲めないとは言わないだろう？」

もちろん、言えるはずがなかつた。

お父さん

ずっと、迷惑だった？ ずっと、いやな思いさせてた？ どうしよう。どうしたらいいんだろう！

そのページには、やはり出せなかつた手紙が挟まつてゐる。

名乗るためのものではない。昂つた精神状態のままに書き殴つた
よつた手紙は、内容にも筆跡にもその跡が如実に残つていた。

黒尾燕二也

Sing · Enzo Nannini

はじめてお手紙します。突然の失礼、申しわけありません。
私は遠野ふきと申します。Ristorante Bella
Crista で働かせていただいている日本人です。

先日 Sing · Leo Cranchi からお聞きしました
が、今まで私の外見と生まれのせいでの迷惑をおかけしていたよう
で、本当に申しわけありません。これからそんなことはないよう
気をつけます。

Sing · Cranchi は親切にジエラテリア部門への異
動を提案してくださいました。心からありがとうございます。
でも、私にはそんなご親切を受けとる資格はないかもしません。
あまり日本人がお好きではない理由もお聞きしました。昔の、日本
での人間関係のトラブルだとおっしゃつてました。

あなたが日本にいたのは20年以上前のことで、しかも2、3年
もありませんでしたよね？

「ご不快にしてしまつたらすみません。もしかしてそれは、私の母
のせいですか？」

母の名前は Yoko です。私は、遠野陽子の娘です。

我が親ながら、母はお世辞にも人格者ではありません。お恥ずか
しいことに、人様に迷惑をかけることは少しつづでした。

日本にいらっしゃった頃、あなたと母はつきあいがあつたと聞い
ています。もしかして、その時に母が何かとんでもない失礼をした

のではないでしょうか。それで、日本人がお嫌いなんでしょうか？もしそなうなら、私は異動どころの話ではありません。ベラ・クリ

スタで働かせていただくなんて、とんでもないことでした。

どうおわびすればいいでしょうか。何かつぐないができるなら、何でもします。どんなことでも言つてください。

もう私の顔も見たくないとおっしゃるなら、私はシチリアを離れます。一度と会いに来ません。

どうしたらいいんでしよう。

6月1-3日

遠野ふき

当人が今では全く使わない日本名で宛名を書いて、それではまずいかもしれないと思い立つて慌てて線を引き、後から修正液で消すつもりでその時はとりあえず下にイタリア名を書き直して逸る筆を進めた。

けれども書き終えてみると、投函ビニールを清書する気にすらなれなかつた。

自分があの母の娘だとばれたら、本当に拒絶されてしまつかもしれない。ふきの母親は凄まじい人間だった。実の娘のふきですら、もう一度と顔も見たくないし、思い出すだけで鳥肌が立つ。母の夢を見て飛び起き、トイレに駆け込んで吐くのもよつちゅうだった。父を日本人嫌いにした原因は十中八九ふきの母親だ。何ひとつ確証はないが、恐ろしくて確かめてみる気にもなれない。

自分の卑怯さに死にたいくらいの嫌悪を感じながら、それでもふきは何も言わず、仕事場をジェラテリアに移した。それから今に至るまでのうのうとベラ・クリスターの、つまりは父からの給金で暮ら

している。

以来、天地がひっくり返るうつとも名乗る気は失せた。こんな卑しい人間を、誰が娘として愛してくれるというのか。母だって散々にふきを忌み嫌っていたのに。名乗れるわけがなかつた。

5・遠野ふきの追憶

事態は思わぬ方向へ向かう。悪い方であればあるほど、驚くばかりのスピードで進行する。

父に名乗れないとか、母の罪の責任だとか、そんなことを言つている余裕はすぐになくなつた。それどころではなくなつたのだ。

ふきがジエラテリアに移りアイスを売るようになつてから1週間も経たないうちに、エンツォ・ナンニーニスマフィアの銃撃に遭い病院に担ぎ込まれた。

元々出す勇気が湧かなかつた手紙は、完全にタイミングを失してしまつた。何せ相手が意識不明の重体で、全くもつてそんな場合ではなかつた。

s a b a t o 19 あべやこ

お父さんが、銃で撃たれて、重体。

どうして? どういうこと? 何で、お父さんがこんな目に! - 神様、もういいです。娘として認めてもらえないのも、嫌われても、何とも思われなくても、もういいです!

だからお願ひします、お父さんを助けてください! - 助けてください!

d o m e n i c a 20 あべやこ

お父さんはまだ意識不明。

病院に行つたけど、クランキさんに追いつき返されてしまった。関わ

るな！ つて。

お父さん。お父さん。お父さん。

luned? 21 ろーねだ

私は、心配もしちゃいけないのか！

病院でまたクランキさんに追い返され、でも今日はひなり返した。仕事のことで脅しみたいなことも言われたけど、そんなのもうこの期に及んではどうでもいい。

そばにいるのは家族の役田だと言われた。クリスタベウセとアニアさんの役田だつて。

本当にお父さんを思うなら、私はしっかりアイスを売つて、お父さんが復帰するまでの間少しでも商売を守れって言われた。

お父さんが命の危機なのに、私にはジョンラートを売るしかできないなんて。

marted? 22 ろーねだ

何をしてても、お父さんのことしか考えられない。

それでも笑顔を作つてジョンラートを売つて。気が狂ひやう。

仕事の後で病院に行つたけど、やっぱりクランキさんに追い返された。今日は突き飛ばされて、こめかみを角にぶつけて血が少し出た。

mercoled? 23 ろーねだ

私は、お父さんのために祈ることも許されないの？

ba-ru-ved? 24 ショーヴィド

お父さんはまだ田を覚まさない。病院では追い返される。私にで
きるのはジョラートを売るだけ。気が狂いそう。
せめて教会で祈る。昨日ナンニー二家が所属する教区の教会に行
つたら、不謹慎な気持ちに入るなつて言われた。ショックで倒れそ
うだった。

今日はちゃんと十字架を持つていて、確かに私は日本人だけど
日本で洗礼を受けてます、アビゲイルっていう洗礼名もありますっ
て説明して、何とか入れてもらつた。
ずつと祈つた。

神様、あそこであれだけ願つたけど、もう一回この日記でもお願
いします。
お父さんを助けてください。

venerdì 25 ショーブイド

ジエラード 教会 お父さん

sabato 26 ショーブイド

お父さんがあんなことになつてゐるの?、どうして皆笑つてジョラ
ートなんか買つてられるの?、もう一週間になるのに!、
売るほうはもうギリギリ。

病院にも近よらせてもられないし、教会がなければ死にそう。
死んでもいい。だから神様、お父さんを助けてください。

d o m e n i c a 2 7 g e r u g a n o

お父さんがまだ田を覚まないのに、びりして神父さんはあんな
冷静にミサをあげられるの？

病院でつきつきりでいられるはずのクリスチヤンさんとファニア
さん。教会に来てる場合じゃないでしょ！ なら代わってよ、代わ
つてよ……

ミサが終わったらみんなすぐさま出でこぐ。笑いながら。
どうして、笑えるの？

お父さんがあんなことになつてゐるのに、びりして?
一日中祈つてた。ずっと教会で祈つてた。

l u n e d ? 2 8 g e r u g a n o

死にそう。

私が死んだら、お父さん助かるかな。

m a r t e d ? 2 9 g e r u g a n o

お父さんが田を覚ました。

よかつた。よかつた。本当によかつた。

こんなにほつとしたこと、これまで生きててはじめて。

よかつた。神様、ありがとうございます。ありがとうございます！

m e r c o l e d ? 3 0 g e r u g a n o

「のとこの朝は毎日バールへ行く。私は病室には入れてもらえないし、連絡ももらえないから、お父さんのことは新聞で読むしかない。

ここ数日は注文はずつとコーヒーだけで、しかもろくに口をつけなかつたから、店に入つたとたんバリスタにはいやな顔をされた。だけど今日は久しぶりにおなかがへつてたから、ブリオッシュとカプチーノを注文して完食。

出るとき、ちゃんとゼンぶ飲んでいくなりつでも来てくれって言われた。うれしい。

神様、ありがとうございます。お父さんが田を見ましてから、いいことばっかり。ジョラートも今日はたくさん売れた。私があんまりうれしそうだからって理由になつてない理由でおかわりしてくれる人もいた。ちゃんと神様に感謝を伝えなきゃいけないと思つて、まだ教会でのお祈りは続けてる。

お父さんを助けてつて祈つてたときはただもう必死だつたけど、今日、お父さんを助けてくれてありがとうございますつて教会で祈つたら涙があふれてきた。

glove? 1 lung

7月。なんか実感ない。といつが、6月がもう現実感なさすぎで。お父さんはまだ入院中。まだ寝たり起きたりつていう状況で、ベッドから離れられないらしい。でも意識があるときに話しかけてみると、話の内容はすぐしつかりしてゐから、いざれ仕事にも復帰できるだらうつて。

ジエラテリアの支配人のフランカから聞いた。クランキさんからメールがあつたらしい。
ほんとに、よかつた。

venerdì 2 luglio

あいかわらず、クランキさんは私を病室に入ってくれる気はないらしい。

つらいけど、でもお父さんの命が助かつたんだから、たいしたことじゃない。

だけどやっぱりちょっとくやしいので、お花とカードを買って送るくらいはさせてもうことにした。

小さなカードにイタリア語で典型的なお見舞い文書いて、花屋に頼んだ。名前は書かなかつた。だって、私だと知つたらクランキさん絶対に捨てちゃうもん。

sabato 3 luglio

ジエラードがよく売れる。フランカが親切に仕事を教えてくれるから。そのことでお礼を言つたら、フキが笑顔で接客するからだよ、つて言われた。フランカは名前通りフランクな人で、ファーストネームで呼ばせるのはまあシチリアなら一般的としても、あんまり厳しいことは言わないでほめて伸ばすタイプだ。だから調子に乗っちゃいけないんだけど、でもやっぱりうれしいものはうれしい。お父さんの会社に貢献できる！ って気になれる。

お父さん、早くよくなつてください。

domenica 4 luglio

つまみ出された。

クランキさんに。
教会を。

「ストーカー行為はするなと言つたはずだが?」って。

私は祈つてもいけないの?

反論も許されずに追い出された。

先週のミサにはいなかつたけど、クランキさんもあそこの教区だつたんだ。

ひどい。
すごい。

クランキさんだつて他人のくせに、なんで私を公共の場から追い出すようなことができるの?

なんで私は教会からさえ追い出されて、

クランキさんは病室に入りびたれるの?

お父さん、無事ですか? 体調はどうですか?
私はこんなことも、口に出して言えない。

エンツォ・ナンニーニの快復とともに、ふきの日常も戻ってきた。父が生きているだけでいいと思っていたのに、見舞いに行けないことに次第に苛立ちが募る。

そしてまた、レオ・クランキもふきの行動に苛立ちを募らせていたようで、エンツォの容態が落ち着いてくるとやたらとふきに厳しくなった。

ジエラテリア・ベラ・クリスターの従業員の指導に俄に口を挟むようになつたのだ。支配人のフランカ・モンターニャも困惑していたが、オーナーのエンツォがいまだ入院中で采配を揮えない以上誰か

が何とかするしかなく、フランカが代理でグループ全体の統括を行い、手薄になつたジエラテリアを良い機会だから試しにレオにやらせてみたい、とエンツォ直々に言われては拒む術も無い。レオ・クランキはまだ23歳でいまだ学生の身ではあるが、エンツォが彼を高く買い、ゆくゆくは後継者にと考えているのは周知の事実だつた。とはいへふきはレオがジエラテリアの支配人代理におさまつて初めて知つたが。

お局様のいびりかと思われるような、重箱の隅をつつくかのような指導に、ただでさえまだ慣れない仕事であるというのにふきは根を上げそうになつた。朝から晩までこき使われて、相手が相手だけに常に気を張らねばならず、一日の終わりには心身ともにくたくただつた。それだけならともかく、レオは勤務時間外のふきの行動もしつこく訊いてきた。病院や教会、エンツォの家に立ち寄つていなかの確認は勿論のこと、ふきがクリスタベラやファニアと接触しないように細心の注意を払つていた。

自分はどんな危険人物だと思われているのか、まず傷つき、次に憤り、最後は呆れを通り越してどうでもよくなつた。

そうやって心に蓋をして、自分を守つていたのだろうと思つ。負荷が一定値を超えると、感情という感情をシャットダウンしてひたすら無感動になるのが、ふきの編み出した自己防衛策だつた。

面白くないことにレオ・クランキはどんなに憎々しくても男前で、ふきの心に芽吹いたときめきは完全に枯れ果てるまでには中々至らなかつた。もう関わらないようにして、距離を置こう、と思つても、ほんの時折ジエラートカップが詰められた段ボール箱を運ぶのを手伝つてもらつたりすると、マイナスの感情が萎えそうになる。誰かをずっと憎んで、赦しきれず忘れられないのは辛い。ふきは母と義父のことでそれを嫌と直つほど思い知つた。疲れるのだ、生きる気力も失くすほど。

だが流されて好意を持つてしまえば、今度はふきのプライドが痛む。流石に踏みつけにされて喜ぶ趣味は……あつたとしても、限度

ところものがある。ふきはもう一生分味わつた。

だから全てを感じないようにした。マイナスもプラスも、感情なんて忘れ去ることだ。父や母に對してはもう遅すぎるけれども、レオ・クランキが相手ならまだ感情を葬り去るのは可能な筈。

可能な筈だったのだ。あの悪魔が過去を携えてやって来なければ。

ふきは日記帳を開いた。此処から先は、書いた本人が言うのも何だが、それこそ被虐嗜好でもなければ到底読みたいものではなかつた。

雨は止まない。常夏の島シチリアに降りつける水の音を、ふきはひどく無感動に聴いていた。

6・三極霧依の傾聴

「Kyrie, you've got a postcard.
(キリエ、君に絵葉書)」

「From where? (どこから?)」

「Sicily. (シチリア)」

あまり心当たりはない。三極霧依は首を傾げながら、恋人の手から絵葉書を受け取った。

落陽のパレルモの写真を引っ繰り返し、そこに懐かしい名前を見つけて思わず口元が上がる。

「From who? (誰から?)」

「Gaia. Do you remember I went to Naples for a vocal master class? She was there too. (ガイア。私が声楽のマスタークラスのためにナポリに行つたの覚えてる？そこで一緒だったの)」

去年の夏のことだ。マスタークラスの主催者が宿泊先も手配してくれていて、霧依と同室だったのがガイアだ。コンクールではなくマスタークラスだし、霧依がソプラノでガイアはメゾソプラノという声種の違いもあり、この世界ではありがちなピリピリした関係にはならず仲良く過ごせた。

ガイアはお喋りな女の子で、色々と話し掛けてきた。どちらかといふと口数は少なく聞き役のほうが得意な霧依には有難い相手だった。

絵葉書には挨拶と簡単な近況の他に、一際大きく書かれていた一文があつた。恋人がそれを音読する。

「La mia coinqüillina ha finalmente lasciato quell'figlio di puttana! ...?」

あたしのルームメイト、とうとうあのゲス野郎と別れたよ！
整った顔立ちを見事に歪めた恋人を見て、霧依は噴き出した。そ
ういえば、ガイアとそんな話をした。

ガイアは、シチリアで日本人のルームメイトと暮らしていると言
つていた。積極的に霧依に話しかけてきたのはそのせいもあるのだ
ろう。

ルームメイトとは気も合つしトラブルもあまりなく、良い相手を
見つけられたと嬉しそうに言っていたのだが、ただひとつ、ルーム
メイトのボーイフレンドに関しては非常に心配していた。何でもそ
のボーイフレンドは札付きの不良らしく、悪い噂が絶えない。その
日本人のルームメイトも言い寄られて最初は困惑しており、怖がる
様子さえ見せていたらしいのだが、どうしてかある日いきなり彼と
付き合いだした。やめたほうがいいと何回忠告しても聞かない。付
き合いだしてから体のあちこちに痣を作るし金はせびられるし、絶
対に口クな男じゃないのに、いくら言つても無駄だった。でもよく
見るルームメイトのほうは彼に恋しているというよりは怯えてい
るようで、ひょっとしたら何か弱みでも握られて脅されているんじ
やないか？ だったら自分にくらい言つてくれればいいのに と
いうような愚痴に一晩中付き合わされた。それで話の流れで、何か
進展したら教えてねと軽く言つたのだが、1年近く経つてガイアは
それを律儀に実行してくれたらしい。携帯の番号も交換したのに絵
葉書というまたレトロな手法で。

「Christer. Can I use computer
this evening?」（クリステール。今晚私がパソコン
使つても良い？）

「Sure. But why?」（いいけど。何で？）
「I want to talk with her on skype.」（スカイプでガイアと話したいの）
クリステールは笑つてOKを出してくれた。

「チャオ、ガイア」

『Kyrrie! Ciao!! Come stai? Cosa
canti questi giorni? Aspetta, fa
mi indovinare - -』

相変わらずのマシンガントークで、こちらは口を差し挟む隙もない。霧依はただ相槌を打ちながら聞いていた。シチリアは今日朝から雨だつたけどそつちはどうだつた？などという質問も実は質問ではなく、あ、そういえば天気予報では北のほうは降らないって言つてたつけ、ねえそれよりさ というような流れで、一音節以上の単語が入り込むような余裕は逆立ちしたつてなさそうだった。

絵葉書の礼を言うと、ガイアは噛み付くように一瞬でルームメイトの話題に移つた。

そうそう、フキがね。あ、あたしのルームメイトの名前だけど、前言つたっけ？ ほんと、1年以上もイッポみたいなバカと付き合うなんて信じらんない！ そー、そのバカ男イッポーリト・クランキつていうんだけど、あたしなんかずつとイッポ（カバ）つて呼んでる。だってカバで充分じゃん、あんなヤツ。なんかさー、3つ上の兄貴がやたら優秀でさ、それでグレちゃつたのはわかんないでもないけど、でも他人を巻き込むなつてのよね。イッポにはレオつていう男前で頭も良くて大きな会社の社長に気に入られて秘書やつてる兄貴がいるんだけど、イッポのほうは昔から成績も悪かつたし性格悪いから女の子にもモテなかつたし、顔も身長もレオには一歩及ばなかつたからいじけちゃつたんだよね。で、絵に描いたような転落人生。未成年のうちから酒、タバコは当たり前だつたし、クスリとかもやってたらしいよ。あたし親からあいつにだけは近づくなつて言われたもん。

フキもはつきりいやつて言えばいいのに、大人しいから。キリエもあんましゃべんないよね、日本人つてみんなそうなの？ 明らか

迷惑してんのに言い出せなくてずるずる流れちゃって。ジョラテリアの売り子なんてかつかつなのに何回もお金取られてたし、暴力振るわれても呼び出されたら断らないで行ってたし。それDVだよ、訴えてもいいんだよ、てか訴えるべき！ つて何回も言ったのに、逆に誰にも言わないでつてあたしが口止めされる感じでさ。おかげよ。でもさ、イッポのこと好きなの？ つて訊いたら全然、つて言つんだよね。じゃー何で付き合つてんの、早く別れなよ、つて言つても何か泣きそうな顔で笑うだけでき。ホント謎だつた。

ひょっとしたら兄貴のレオのほうに問題があつたのかもね。フキの働いてるジョラテリア経営してる会社に、レオも勤めてんの。つまりレオはフキの上司。クランキ家はさ、何ていうか、ダメな子ほど可愛い？ みたいな。ウチならイッポの十分の一でも悪さしたら即勘当だけどね、実際声楽勉強してオペラ歌手になるつて言つたら縁切られたし。まあウチの話はともかく、イッポの両親も兄貴のレオも、結構イッポに甘いんだよねー。色々見て見ぬ振りしたり、警察に捕まりそうになつたら庇つたり。バツカじやないの、だからイッポがいつまでたつても悪さやめないと、1回くらいブタ箱ぶち込めばいつぺんで目が覚めると思わない？ だからさつまり、レオの機嫌損ねたらフキはクビだし、それで何も言えなかつたんじやないかな。だとすると、脅されてたかもつてあたしの推理、当たらずとも遠からず？ 僕の言つこと聞かないと兄貴にあることないこと吹き込んでお前クビにしてやるぞ、とか言われてたりして。うわ、ほんとゲス野郎！

でもね、そう！ ついに別れたんだよ！ メデタイ！

何かねー、フキほんとにホツとした顔してた！ もうホント良かつたよ。心配かけてごめんね、とか言つし。水臭いんだよ！ 結局あたしにほとんど何も相談してくれなかつたし、ちょっとさみしい。でもフキがあいつから解放されてよかつた！

何で別れられることになつたかっていうとね、先月からフキの従兄弟が日本から來てるんだよね。いや、最初従兄弟つて知らなくて、

恋人だと思つてたの。あたし日本語わかんないし。何か突然訪ねてきてさ、フキすつごく驚いてた。まるで初対面みたいに。

格好良かつたよー。あたしあんまアジア系の男つてかつこいいと思わないんだけど、彼はかつこよかつた。名前なんていつたつけな、タク……マ？ タク、ミ？ そんな感じ。顔立ちはそんな好みじやなかつたんだけど、センス良かつた。しかもお金持ちっぽい！ ドルチエ・エ・ガッバーナの服にブルガリの香水だつたよ。

何回かフラットに来て、日本語でフキと話してたんだけど、ある日フキの目盗んであたしに話しかけてきてさ。キリエと同じくらいイタリア語上手かつたよ。フキがどうしても話してくれないんだけど、どう見ても殴られた痕がある。理由を知らないかつて。

だーかーら話してやつたの、イッポのこと洗いざらい。

そしたらありがとうつて言つて出かけて行つてさ。で、その日からいつもかかつてくるイッポからフキへの呼び出しがぴたつと止んだの。で、数日してから街中で偶然イッポを見かけたんだけどさ、すつごいの、笑っちゃうー。まるでミイラ！ 包帯とガーゼと絆創膏の山盛り！ 正直ザマー＝ミロだよ、フキだつていっぱい傷ついてきたんだから。

もうさー、あたし感動しちゃつてさ。フキに、いい彼氏じゃん大切にしなよ、つて言つたの。そしたらフキ笑つてさ、彼氏じゃなくて従兄弟だつて。それでフキとの関係初めて知つて驚いたんだよね。だって普通親戚ならあたしたちのフラットに泊めればいいじゃん？ わざわざホテル取らせるなんて、従兄弟にしてはよそよそしい感じだから他人だと思つたんだよね。男の従兄弟泊めたつてあたしなら別に気にしないのに。

で、しかも向こうは結婚してるよ、左手の薬指見なかつた？ つて言われちゃつた。残念、フキの彼じゃないならあたしが狙いたかつたのに。

まあでも、何にせよフキがイッポのカバ野郎と別れられてよかつた。あ、でもさ、まだちょっと心配なことあるんだよね。この頃フ

キ、週に2回も3回も病院に通つてるんだ。どこかが悪いわけじゃなくてただ色々検査してるだけだつて言つけど、そもそも検査が必要なのつて普通病気の疑いあるからじゃない？ 心配！ だつて、人間ドックだつて2、3日もかかるないよね？ 何の検査なんだろ、ひどい病気とかじやないといいけど

その後もガイアの一方的な話は延々と続いた。

ネイティヴの早口で、しかもシチリア訛り。正直霧依は半分も理解できたかどうか怪しい。それでもこの情報量。

たつぱり4時間は話してやつとスカイプを切つたところ、クリステールが苦笑いとしか言えない表情を浮かべていた。

「Enough? (もついいのか?)」

「Almost too much. (お腹いっぱい!)」

ガイアと話すのは と言つより、ガイアの話を聞くのは楽しい。ただ、1回の量があれなので、どうしても頻度は低くなるだけだ。霧依はパソコンをシャットダウンする。またしばらくいたら連絡しよう。懐かしいひと時だった。

7・繕貝巧の脅迫

「もしもし、ふきちゃん？ おはよう。今日また検査だから、忘れずにおいでよ。

ちゃんと脱ぎやすい格好して来るんだよ。金属物は避けてな。ボタンのないシャツにカプリパンツくらいなら良いだろう。確かストライプのノースリーブ持つてたよね、あれが良いんじゃないかな。寒かったらパークーでも羽織つといで。靴も尖ったヒールは駄目。脱ぎやすいペタンコ靴でおいで。

ああ、ちゃんと化粧しておいでよ？ 目立ちたくないんだりつ。ファンデーション厚塗りしたりチーク濃くしたりする必要はないけど、目まわりと鼻筋だけはしつかり作つて彫りは深めにな。

3時には検査終わるだろうけど、何せここはシチリアだし、今日は全休取つてね。病院の後、一緒に服買いに行こう。

半休しか取つてないなら朝のうちに店に連絡しておくこと、いいね？ 言つておくが、映像は俺の手元なんだからね。

なお、このメッセージは自動的に消滅する わけないから、消したいなら自分で消すんだね。言わなくてもアビガが消すか？

じゃあ後で」

それだけ吹き込むと、巧は携帯を切つた。TVのリモコンを取つて、抑えていた音量を再び上げる。

TVでは『スパイ大作戦』のリバイバル放送をやつていた。勿論イタリア語吹き替え版だ。ジム・フェルプスがイタリア語を喋つているのが中々面白い。ふきの留守電に残したメッセージは、もろにこれの影響だつた。

タクミは着替えた。今日は楽しい日になりそうだった。

病院に着くと、ふきは顔色を変えた。

「巧さん、ナンシー・氏が来るなんて言わなかつたぢやないですか

！」

「言つてないな。それが？」

「無理です。帰りましょーつ。検査は他の日だつてできるでしょーつ？」

「駄・皿」

「どうして……」

「見つからなこよつに上手くやつなよ？」

ふきは泣きそつになつながら、エンシオ・ナンシーの視界に入らぬよう移動する。柱と観葉植物の陰に隠れて、何とかやり過ごそうとしている姿が滑稽だつた。

「ほらほら、そんな拳動不審じやかえつて皿立つよ・リラックス、リラックス。

それと、パークーのジッパーは上げないほうが良い。折角中のストライプが可愛いんだから見せなよ、別に寒くないだりつ

「巧さん、そんな場合じや」

「例の映像、まだ俺のCCTVの中に入つてるみ」

「……つ！」

ふきは唇を噛み締めて屈辱に身を震わせる。感情に任せゐようつこ一気にジッパーを引いた。

「それでいい。

ドットーレ・マッシオラーリだつて暇な身じやないんだ。今日の検査は君からエンシオへの腎移植のためなんだから、エンシオだつてここに呼ばれて別に不思議なことじやないだりうへ。心配しなくても同じ診察室で顔合わせつてことにほならなによ、ドナーとレシピションのプライバシーは尊重される

「……はなれてください」

「ン？」

「甥だつて名乗つたんでしょうへ。なら、私と巧さんが一緒にいるといひ見られたら、ばれるかもしねい。

向こうはドナーが巧さんの知り合いだつて思つてゐんでしょう。

「ここは病院です。こんな場所で一緒にいるところを見られて、もしドナーかもしないなんて思われたらどうするんですか。まして私の雇用契約書調べられて、遠野って姓がばれたら。移植手術と私の関係は、誰にも知られるわけにいかないんです。

私ひとりならまだ何とでも言いわけしますから、はなれてください

巧は肩を竦めた。

「結構。でもね、気をつけなきゃいけないのはエンツォだけじゃないと思うよ?」

巧は入り口を指差す。入つて来たのは、クランキ兄弟だった。これ以上ないほど顔を蒼白にした従姉妹に巧の心は浮き立つ。こんなにワクワクするようなことはそうそうない。

「さあ、上手く立ち回つてみせるんだ。俺を楽しませてくれよ?」

巧は少し距離を取つてロビーのソファに座り、体を明後日の方向に向けてふきと無関係な風を装つた。

元々予約の時間にはまだ早い。加えてロビーにエンツォの姿があるということは、マッシオラーリ医師の手が空いてふきの検査が行われるのはしばらく先だ。わざわざ今受付に行つて、それこそふきの言うようにばれる危険を犯す必要はなかつた。大病院のロビーなど広さもあれば人の姿も多いから周りが話している内容など聞こえないかと思いきや、これが結構良く通るのである。イタリア人は大概声が大きくお喋りだからして。

レオ・クランキは最初はふきに気づかず、受付で何やら話しているエンツォを見つけると真っ直ぐに向かつて行つた。そのまま何やら2人で雑談を始める。

イッポーリト・クランキのほうはひとり入り口近くで取り残されたように突つ立つてゐる。巧はごく自然にイッポーリトから視線を外し、顔を隠した。薄汚れたギプス。鼻のガーゼ。解け掛けた包帯。俯くと忍び笑いが漏れた。

やがてエンツォが看護師に案内されて病院の奥へ消え、レオも受付から戻つて来ようとした時、巧の背後からリノリウムの床にスニーカーが擦れる足音が近づいてきた。

「フキ！」

横目でふきの様子を窺うと、硬直したまま動かない。彼女に猛然と近寄つたイッポーリトは、挨拶もなしにふきを怒鳴りつけた。

「Puttanna！」

娼婦を意味する、女性へ言つてはいけない言葉ナンバーワンだ。ふきの顔色は今や蒼白どころか土氣色で、腕を小刻みに震わせていた。

顔を向けずに田だけでそれを見ていると、異常を察したらしいレオが駆け寄ってきた。だが自分の弟が詰め寄つている相手がふきだと気づくと、途端に眉を顰めた。レオは取り敢えずイッポーリトを宥め口を噤む様に言つてから、ふきに向き直る。

「Perch? sei qui? Che cosa stai facendo? (何故君がここにいる。何をしている?)」

「レオ……」

震える声に、おや、と思つた。ふきはレオ・クランキを名前で呼ぶような間柄だつたか？

だが一瞬の後に巧は思い直した。ここにはイタリアの、しかもシチリアだ。かなりの年配に対しても名前で呼ぶほうが普通だった。

「Sei venuta a vedere Enzo? Tu ancora - - (エンツォに会いに来たのか？ 真はまだ)」

「」

「No! Enzo? Signor Nannini sta qua? Non lo sapevo. (違うー。エンツォ？ シニョール・ナンニーがここにいるの？ 知りませんでした)」

「Davvero? (本当に？)」

「Veramente! (誓つて！)」

嘘をつけ、と巧は喉の奥で笑う。確かに来るまでは知らなかつた

かもしだれないが、つい先程エンツォがいると巧に詰め寄つたその舌の根も乾かぬうちに。

「A11or a perch? sei qui? (ならなぜ君がここにいる?)」

ふきはつつかえながら、検査のためだと答えた。レオは信用していない様子で、何の検査かと訊ねる。ふきがしばらく黙つた後プライベートなことだと言つと、従業員の健康状態の把握は自分の役目だとレオは言い放ち、高圧的な態度で詰問した。

明らかにレオはふきがエンツォ由当で病院に来たと思い込んでいた。雇用主の立場を振りかざし、プライバシーの盾を奪い取つて、病院に来た理由をはつきり言わないならエンツォへのストーカー行為とみなすと、処分をチラつかせて脅しにかかっていた。

「E un' altra cosa . Cos' ? successo tra Ippolito e te? Devi sapere perch? ? cosi ferito . (話は他にある。イッポーリトと君の間に何があつた? イッポーリトがこんな怪我をした理由を、君は知つていてははずだ)」
「L' ho lasciato . (別れました)」

「Cosa? (何だつて?)」

「Non siamo pi? una coppia . Bastata . (もうつきあつてしません。それだけです)
「. . . . Non ci credo . (……信じられない)」

「Perch? A te non piaceva mai la nostra relazione . Credo che tu sia contento . (どうして? 私たちの関係を快く思つていなかつたのはあなたですよ。これで僕満足でしょう)」

レオは田を見開く。

おやおや。これはこれは。

ふきはレオに嫌われているとばかり思つてゐるようだが、これは中々どうして。ひょっとするとひょっととするかも知れない。だが、それはひとまず置いておいた。これ以上余計なことを知られて計画がおじやんになるのは巧も望むところではない。

充分とは言えないが、そこにはふきを慮めて楽しむことが出来た。そろそろ頃合だ。

巧は立ち上がり、三人へ向かつて歩きながら声を発した。

「Perch? , hai domandato? Tu o fratello capisce me meglio perch? . (なぜかって？ 君の弟のほうがそれはよく知ってるや)」

視線が集中する。

イッポーリトは巧を見て明らかに怯えたように後ずさった。ふきは不安げに巧を見上げてくる。

「Chi sei? (誰だ?)」

「Sono cuorino di Fukui . Leo Cranchi , ti conosco . (俺はふきの従兄弟だよ。レオ・クランキ、君のことも知つてゐる)」

「Lui! (こいつだ!)」

イッポーリトが叫ぶ。レオが訝しげに弟を振り返つた。

「Ippolito? (イッポーリト?)」

「Leo , lui! Lui mi ha fattò - - (兄貴、こいつだ！ こいつが俺を)」

「Stai zitto . (黙れ)」

巧はイッポーリトを一睨みする。

小物だった。どれだけふきを脅かしても、巧には暇潰しの相手にもならない。

取り合はず、巧はレオに向き直つた。

「Leo . Tu non sai niente . Non sa cosa tuo fratello ha fattò

a m i a c u g i n a . (レオ。君は何も知らない。君の弟
が俺の従姉妹に何をしたか知りもしない)」

言つが早いか巧はふきのパーカーを剥ぎ取つた。ふきが小さく悲鳴を上げる。

ふきの腕には、真新しい赤黒い痣がいくつも浮かび上がっていた。巧はふきの左腕を捻り上げ、手首の内側をレオに向ける。そこに残る傷痕は今も生々しい。

レオが絶句した。

「La colpa di tuo fratello. Perché? Fukি? venuta a quest'ospe dale? Bisogna spiegarre? (君の弟のせいだよ。ふきがどうしてこの病院に来たか、だつて? 説明する必要があるのかい?)」

「Ippolito ha fatto violenza a Fukি! (イッポーリトがフキに暴力を振るつていたと!?)」

「Da morire. Mia cugina? abbastanza spaventata. (死ぬほどね。俺の従姉妹は本当に怖がつている)」

ふきはあるあるとレオ、イッポーリト、巧の間で視線を彷徨わせる。その頭の中に今何があるのだろう。レオへの怯えか、イッポーリトへの嫌悪か、巧が何を言い出すのかという不安か、あるいはそのどれもか。

巧は、イッポーリトを蹴り上げた。

派手な音を立てて彼は病院の床に転がる。ふきが悲鳴を上げた。

「巧さん!」

「Cosa fai! (何をする!)」

痛みに涙を滲ませて巧を見上げるイッポーリトと、弟に駆け寄り非難の声を上げるレオに、巧は冷笑をくれてやつた。

「Chiamate la polizia? Ricorret

e alla giustizia? Fate come vi pare. Ma quando tutto viene chiaro, ? Ippolito chi deve andare in prigione. (警察を呼ぶかい? 訴えるかい? お好きにどうぞ。だが全てが明るみに出れば、牢屋に入るのはイッポーリトのほうだよ)「No! (駄目!)」

叫んだのはイッポーリトでなくふきだった。

巧はしゃがみ込み、床に転がったイッポーリトの胸倉を掴み上げる。恐怖に満ちた瞳で見上げられ、たまらなく氣分が高揚した。ふきを虐めるよりずつと愉しい。

「Nessun contatti. Non vedere più mia cugina, neanche per sogno. Quindi ionon dico niente. (関わるな。もう金輪際俺の従姉妹と会うな。そしたら、俺は何も言わない)」

ざわざわと、周りが騒がしくなってきた。巧は立ち上がり、ふきの腰に手を回して踵を返す。

「巧さん……」

「そろそろエントオが戻ってくる時間だよ」

それだけで、ふきの歩を進めさせるには充分だった。ふきはクランキ兄弟を気遣わしげに振り返ったが、結局何を言つてもなく巧に従つてその場を離れる。

ロビーの総合受付を素通りして、巧はふきを伴い別の病棟へ向かつた。総合受付は案内カウンターだ。初めから病院のどこの誰に何時に用があると決まっている人間は、直接目当ての病棟へ赴いてそこで受付と診察を済ませれば良い。

マッシオラーリ医師の豪快な笑顔を思い出しながら、巧はエレベーターのボタンを押した。

ふきの血液検査等は既に済んでいて、移植には問題ないとされている。

ただひとつ、ネックなのが健康状態だった。ドナーは心身ともに健康でなければならない。移植手術はドナー側にもかなりの負担なので、移植する臓器だけでなく他の部位も良好な状態を保つていなければいけないのだ。

幸いふきは何の病氣にもかかっていない。イッポーリトの相手をさせられていた時はかなり乱暴な扱いをされていたが、幸運なことに性病にも罹患していなかつた。ただふきの体重が、医師に「ゴーサイン」を出させないでいた。日本人女性の感覚で見てもふきは太っているほうではないが、イタリアの、しかも医師の目で見ると明らかに痩せ過ぎであるらしい。

パークーを脱ぎ、痣や傷痕をいやでも晒しながら、ふきは検査室に入る。

そして、体に残る傷痕だ。表皮の外傷は臓器の機能とは関係ないが、精神的に問題ありと見なされたか精神神経科を受診させられ、カウンセリングや心理テストの嵐を受けた。

マツツォラーリ医師は前回からふきの傷痕が増えていることを確認して笑顔になつていて。イッポーリトと別れてから新しい痣は作っていないし、リストカットの欲求もおさまつた。

体重や血圧などをチェックしたマツツォラーリ医師は笑顔で大きく頷いた。

「Benefit or a nessun problema・（よし！ これならもう問題なしだ）」

ふきはほつとして息を吐く。何とかの値がどうの、といつ話になつたが医学的知識のないふきにはついていけない。医学部出身の巧は面白そうに聞いていて、たちまち当人であるはずのふきは置いて

けぼりを食らつた。

2年も暮らしてシチリア詫りにはもう慣れたが、医学の専門用語などは勉強する機会もなかつたからさつぱりである。巧に通訳してもらつて何とか聞いていた。

「ドナーになることが決定したから、検査費用はほとんど全部レシピエントの保険で賄えるつて。良かつたね、3000ユーロ払わず

に済んで」

それもほつとした。ドナーになれない場合、検査費用はこちら持ちになる。ドナー適性検査は保険の対象外だから、自腹で数十万円に相当する金を支払う羽目になるのだ。だが移植手術が決定すれば、ドナーの検査費用もレシピエントの治療費に勘定され、レシピエント側が保険で支払ってくれる。

「で、ふきちゃん、生理つていつ？」

「はい！？」

巧からの思わぬ質問にカツと頬が発熱した。分かつていてやつているのだろうと思つ。ルームメイトのガイアなどは巧のことを好青年だと思つてゐるらしいが、巧の意地悪さをふきはここ数ヶ月で嫌というほど知つた。

「手術日決めるからつて。別に生理中でもいいけどさ、気分的にそ
うじゃない日のほうが良いだろう

自分の顔が熟したトマトになつてゐることを自覚しながら、ふきは確実に周期から外れる期間を告げた。併せて、こちらの希望日を伝える。流石に2、3日は仕事を休むことになるだろから、寒くなつてからのほうがいい。ジエラテリアなので、良く晴れた暑い日の日中などに抜けると同僚にえらく恨まれるのだ。流石にもう夏は終わりだが何せここは10月まで海水浴が可能な常夏の島シチリアである。とはいへ12月後半になると冬休みを利用した日本人観光客相手の仕事も舞い込んでくるので、出来るなら11月か12月の頭が良い。

そう伝えるとマッシオラーリ医師は大きな体を揺らして頷いた。

他に何か質問はあるかと聞かれたので、ふきは口を開いた。

「Rispetti la mia privacy. Non dica niente di me al destinatario, per favore. Non c'è nessuno bisogno di far glielo sapere. Non voglio fargli sapere come mi chiamo, dove abito, da dove sono, quanti anni ho - - niente. E neanche ionon mi interessa solo al destinatario. (私のプライバシーを尊重してください。レシピエントに私のことは何も言わないでください、お願いします。知らせる必要はありません。名前、住所、出身、年齢、何も知られたくないありません。私もレシピエントに興味はありません)」

「D'accordo. (了解した)」
本来ならこちらから頼まなくてはいけないことだ、と言われた。ドナーとレシピエントは、移植後に金銭トラブルが起るのを危惧して、互いに個人情報を知らせないのが原則なのだそうだ。他に質問はないかと訊かれ、ないとふきが答えると、手術日は追つて連絡するとのことだった。

これ以上は痩せないように、出来ればもう2、3キロ太るようと言われて、ふきと巧は診察室を後にした。

出口へ向かいながら、巧がくつくつと人の悪い笑みで話しかけてくる。

「嘘つきだね。『レシピエントに興味はない』？」

「……」

「相手がエンドオだから一も二もなくOKしたんだろうつづいて」

「……言わないでくださいよ？」

「まあ」

「巧さん！」

「冗談だよ。しゃべりくは言わないでおいてあげる。しゃべりくはね」

「……」

「心配しないでいい。物事にはタイミングがある。俺がこの事を他言するつもりでも、そのタイミングは遠そうだ。一生来ないかもしれないね」

出口近くで、またクランキ兄弟と鉢合せた。

近寄らないように出来るだけ距離を取つて自動ドアをぐぐる。ちらりと視界の端に入つたイッポーリトの腕からギブスが取れていた。もう？

そう思つて、巧がイッポーリトとやり合つたのはいつだつたらうかと考え、既にひと月が経過してこことに気づいた。

あの日、巧がフラットまで押しかけてふきの怪我の理由を訊いてきて、辟易してトイレに逃げたら出てきた時にはもついなかつた。すぐにガイアがあらいざらい喋つたと知つた。

巧の凶暴すぎる説得のせいでのイッポーリトに付き纏われることはなくなつたが、イッポーリトはイッポーリトで巧にあらいざらい話してしまつたらしく、問題の映像ファイルは巧の手に渡つてしまつた。あれを隠したかつたからどんなDVを受けても、金をせびられても、レオに憎まれても耐えてきたのに。エンツォに付き纏うのを止めたと思ったら弟にちよつかいを出し始めたと、レオは最初から2人の関係を快く思つていなかつた。好き好んで付き合つているわけじやないと言えたらどんなに楽だつたか。言えないから、あんなにも苦しんだというのに。

ひと月。イッポーリトと一緒にいた時はあんなに時間が経つのが遅かったのに、殴られないというだけで時間の歩みが速まるものなのか。あるいは、エンツォの手術のことに集中し過ぎていたか。

だけど状況は好転したわけではない。巧は暴力こそ振るわないし、セックスの強要や金の要求もしないが、やつてしていることの本質はイ

イッポーリトと変わらなかつた。映像ファイルでふきを脅し、自分の思い通りに操るうとする。結局、ふきの弱みを握る人間が増えただけだつた。イッポーリトには巧が強く口止めしたらしく、彼のあの怯えようからすると、そなう口を滑らしたりはしないだろうが。彼らとすれ違ひ際、レオの怒りのこもつた視線がこれでもかと突き刺さつた。

イッポーリトは自分に都合の悪いことは言つまい。が、巧に暴行を受けたことはレオに言つだらう。イッポーリトの怪我を見た時はふきも驚いた。巧がイッポーリトに具体的に何をして何を聞いたか、ふきはその場にいなかつたから知らない。だが、もともとイッポーリトに良い感情などなかつたふきが、いい気味だと思つよりやりすぎだと感じた。しかもその理由は自分なのである。

ただでさえイッポーリト寄りのレオが、何を吹き込まれてふきをどう思つうか、想像するまでもなかつた。ふきは溜め息を吐く。そもそも最初からレオはふきを良く思つていない。エンツォの一件があつてから、何でもかんでもふきを疑つて、それは色眼鏡というものではないかと思つくらい頑なにふきを信用しない。

イッポーリトと付き合つていた時は、外国人のアルバイト風情が弟を詛かしたと思われていたよう、実際そのようなことを何度も言われた。弟と違つてレオは育ちが良く汚い言葉を投げつけられたりはしなかつたが、嫌味は山のように聞いたし職場での待遇も悪くなつた。

今回もイッポーリトは自分の都合の良いように話を作り替えて話すのだろう。もともとふきに対するマイナスの評価は鵜呑みにするレオだ。今度は心変わりしたふきが従兄弟に頼んでイッポーリトを襲わせたとでも思うだろうか。ふきは巧の前でイッポーリトのエの字さえ出さなかつたといつのに。

ふきは巧を見上げる。イッポーリトのロボから解放してくれたのはありがたいが、如何せんやり方が過激すぎるし、イッポーリトとそつくり同じ方法でふきを脅迫するし、加えてレオの恨みまで買つ

てしまふのでは感謝の念も薄れようといつものだ。しかもおそらく、巧はわざとだ。レオのふきに対する嫌悪をさらに増長させて楽しんでいる。先程のロビーでの挑発 フォローを入れるどころか怪我人のイッポーリトをさらに蹴つ飛ばしたのがその最たる証拠だろう。しかも、一応はイッポーリトと別れさせてやつたという恩を売りつけてふきが文句を言いにくい状況を作り、加えて駄目押しのように映像データで退路を塞ぐ。

数ヶ月前は存在すら知らなかつた従兄弟の性格を、ふきは今嫌といふほど思い知つていた。出来れば知りたくないかった。巧は、「人の不幸は蜜の味」を地で往く人間なのだ。勿論それは人間なら大なり小なり持つてゐる感情だし、巧にも善意や憐れみの気持ちはある。だが、人はどれだけ大義名分があつても他者を傷つける時にいくらか良心の呵責を感じるものだとふきは思うが、巧にはそれが一切ない。思い切つたらとことん残虐になれるし、暴力や脅迫も厭わない。今は彼が味方なのだけが救いだ。味方というより、エンツォやレオよりはふきにやや傾いているという、それだけのことでしかないが。それもふきへの好意からではなく、おそらくはアビガへの肩入れなのだろう。

アビガ。

エンツォを憎んでいた彼女。エンツォを殺そうとした彼女。

腎臓が適合して良かつた。エンツォの腎臓を駄目にした、2年前の銃撃事件。あれはおそらくアビガの
「ふきちゃん、着いたよ」

はつとして、意識を戻す。いつの間にかアウトレットモールに連れてこられていた。

「巧さん……ここは？」

「服、買いに行こうって言つただろ？ ワードローブ全取つ替えするつもりでやるよ、資金援助するから。

ふきちゃん、スカート穿いてるの見たことないよ。色の好みも地味だよね、紺とか茶とか灰色とか。

今日はボトムスはスカート限定。トップスも色は……んー、赤とか紫とかは似合わないだろうから、……白! 白と水色、あとパステル系でいいや。下着も上下セットのいくつか買つよ。上から下まで一ヶ月分買つまで帰さないから

「ええええええええ

巧が何を考えているのか、まったく分からぬ。けれども一言田には「USB」と脅されではふきは従つ他ない。

今日何度もかの溜め息を吐く。巧の考えは読めないけれど、憶測でもひとつだけ分かつたことはある。

日本に残つた奥さん、解放されてほつとしてるだらうな。顔も名前も知らない女性は、年中、一生これに付き合はれるのだろう。

そんな筋合はないし、そんな場合でもないのだが、ふきは心から見知らぬ巧の妻に同情した。

9・緒貝枝実の調査

束縛の激しい夫がイタリアへ旅立つて早1ヶ月。

久々の自由を満喫していた緒貝枝実の精神的バカンスは、昨晩届いた一通のメールで終わりを告げた。

Subject：シチリアから愛する枝実へ

From：巧

Ciao!

滞在が思つたより長引いて悪いね。元気にしてるか？

こちらの生活は思つたより楽しい。初めて会つ従姉妹は中々面白い子で、毎日飽きない。

大学はどう？ 演劇サークルの次の公演の演目は決まつた？ 分かつてるだろ？ けど、キスシーンとか演る時は必ず俺に一言言つよう。

さて、悪いけどひとつ頼み事だ。

新聞記事を集めて欲しい。6年前に、W県で母親が娘に売春を強要したつていう事件があつたろう？ その記事が欲しいんだ。ネットに上がつてゐる分のアーカイブはアドレス書いておくから、どの事件のことかそれで確認してくれ。

<http://wshimpo.example.co.jp/news/20xx/11/post-407.html>

ハードのデータが欲しいんだ。だから悪いけど図書館でも行つて昔

の新聞漁つて、コピー取つたのを家のスキャナーでスキャンしてメール添付して送つてくれ。

逮捕から裁判まで、経緯全部ね。

出来れば外国語版もあると嬉しい。英字新聞もチェックしてみてくれ。イタリア語版があればベスト。無いとは思うけどな。

それじゃよろしく。

T · V · T · B
巧

さよなら平穏。

T · V · T · B とは Ti voglio tanto bene の頭文字で、大好きだとかすじく愛してるとか確かにそんな意味だ。げんなりした。

メールには写真が添付されていた。イタリアの街角を背景に、巧

と女性のツーショット。

女性は枝実より2つか3つ年長に見えた。生粋の西洋人には見えないが、純日本人にも見えない。巧の従姉妹だというから混血なのだろう。

枝実が言うのも何だが、幸薄そうな顔の女だった。対して巧の顔は輝いている。

この人、巧に目をつけられたんだ。

日本から遠くシチリアまで行つたのに巧に出会つてしまつた彼女の不幸に、枝実は心から同情した。しかも血が繋がつているとは、運命は時に酷い悪戯をするものだ。

巧と同一戸籍に入つてしまつた自分のことは、敢えて考えないことにした。

そんなわけで、枝実は休日にも拘らず図書館で古新聞を捲つては「ピュー」を繰り返していくのであった。

20XX年11月14日

娘に売春強要、両親起訴 「体売つてでもパチンコ代稼げ」

中学生だった娘（15）に売春させ稼ぎを受け取っていたなどとして、W地検は14日までに、売春防止法違反と児童福祉法違反の罪で、和歌山市に住む実母（36）と義父（47）＝いずれも覚せい剤取締法違反罪で起訴＝を追起訴した。

起訴状などによると、実母と義父は一昨年1月ごろから、当時中学生1年だった娘に対し「パチンコ代がない。体売つてでもつくつてこい」などと売春を強要。今年2月23日深夜から24日未明にかけ、W市内のラブホテルで売春させ、相手の男から受け取った3万5000円を義父名義の銀行口座に入金させたとされる。

20XX年11月16日

中学生の娘に売春強要 母親と義父を起訴

中学生だった娘（15）に売春させ稼がせていたとして、W地検は14日までにW市内の母親（36）と義父（47）を児童福祉法違反と売春防止法違反の罪で起訴していたことがわかつた。起訴状などによると、母親と義父は共謀し、2月23日深夜か

ら翌日未明までの間に、市内のホテルで男と売春させ、受け取った現金3万5000円を義父の銀行口座に振り込ませたとされる。母親らは、去年3月「（私は）昔、援助交際をしていた。おまえだって稼いで家に金を入れろ」などと迫り、繰り返し少女に売春させていたという。母親と義父は、9月に覚せい剤取締法違反（使用）の罪でも起訴されている。

20XX年12月4日

裁判官、娘に売春の母親に激怒 母親は無言

中学生だった娘に売春を強要したとして、児童福祉法違反と売春防止法違反の罪に問われた山上陽子被告（36）の公判が4日、W家裁であり、町内鎮右裁判官が「娘にしたことの重さを考えなさい」と厳しい声で被告を叱りつける一幕があった。

被告人質問で弁護人から今後の生活を尋ねられた山上被告は「（共に逮捕された）夫と一緒に出直したい」と答えた。

この言葉に町内裁判官は「愛人をつくっていた夫に愛を感じるのか。どうやってやり直すのか」と詰問。被告が「感じません」と話すと「それで彼女（娘）が新しい一步を踏み出せると思いますか」と強い口調で諭した。

さらに「彼女にできることがあるでしょう。あなたたちが遊びに行っている間、売春させられ、家事も一手に引き受けている。彼女に言つことはないのですか。娘にしたことの重さを考えなさい」と叱りつけた。

山上被告はそれには答えず無言だった。

検察側は懲役7年を求刑、弁護側は執行猶予付きの判決を求め、結審した。

論告によると、山上被告は夫克彦被告（47）と共に謀。2月23日未明、当時15歳の娘に、W市のホテルでわいせつな行為をさせ、3万5000円を受け取らせたとされる。

20XX年12月6日

「子ではなく収入源」娘に売春強要の実母初公判

実の母親が中学生だった娘に売春をさせ、その金をパチンコや生活費にあてていた。全国的にも波紋をよんだ少女売春事件。W市の母親（36）の初公判が4日、W家裁（町内鎮右裁判官）で開かれた。検察側の論告によると、XXXXX年1月ごろからことし3月までの間に売春で200万円以上を稼がされていた少女は、「お母さんやお父さんのせいでの私の体は汚れてしまった。今でも夢を見る」と話しているとし、少女に与えた影響の大きさを浮き彫りにした。

起訴状によると、母親は少女の義父と共に謀し、「パチンコ代が払えない。私も昔援助交際をしていたからおまえだって稼いで家に金を入れる」と売春を強要。起訴事実に対し母親は「間違いありません」と事実を認めた。

検察側は、売春のため出会い系サイトに名前を出させ、段々と生活費もあてにするようになるなどの母親の行為に対し「少女が自分たちを恐れていることを利用し、子どもとしてではなく、収入源として見ていた」と主張。被告人質問で町内裁判官は「夫と一緒に直したい」と答えた母親に対し、「少女（娘）にできることがあるだろう。その言葉を聞いて少女が出直せると思うか。娘にしたことの重さを考えなさい」と叱りつける場面も。母親は無言だった。

検察側は、「人道上許されず、卑劣で悪質な行為」として懲役7年、罰金15万円を求刑。弁護側は、「十分反省しており、償う機会を与えてほしい」と執行猶予付きの判決を求め結審した。判決は

25日。少女の売春を母親と共に謀していた少女の義父（47）の初公判は18日に行われる。

20XXXX年12月19日

売春：「嫌がつてていると思わず」 少女に強要の義父、起訴事実認める

当時中学生だったW市の少女（15）に売春させたとして、児童福祉法違反と売春防止法違反の罪に問われている義父（47）の初公判が18日、W家裁（町内鎮右裁判官）であった。義父は「間違ありません」と起訴事実を認めたうえで、「（少女が帰宅後に）笑っている時もあったので売春を嫌がつてているとは思わなかつた」などと話した。

起訴状によると、義父は少女の母親（36）＝両罪で公判中＝と「パチンコ代がない」などと書いて、一昨年1月ごろから売春して金を稼ぐよう迫り、今年2月23日深夜から24日未明、少女にW市のラブホテルで男性を相手にわいせつな行為をさせた。受け取った3万5000円全額を、義父の預金口座にATM（現金自動受払機）から入金させるなどした。

20XXXX年12月25日

娘に売春強要、母実刑「人間性踏みにじる」

W市で当時中学生の娘に売春をさせていたとして児童福祉法違反罪などに問われた母親（37）の判決公判が25日、W家裁で開かれ、懲役5年6か月の実刑判決が言い渡された。

判決によると、母親は夫と共に謀り、2年にわたって当時中学生の実の娘に無理やり売春させていた。母親は、娘が受け取った金を自分たちの口座に振り込ませ、パチンコなどの遊興費に充てていた。

20XX年12月26日

中学生娘に売春強要の母親に懲役5年6月
「許し難い犯行」と裁判官・W家裁

中学生だった娘に売春させたとして、児童福祉法違反と売春防止法違反の罪に問われたW市の母親（37）の判決公判が25日、W家裁で開かれた。町内鎮右裁判官は「あまりに卑劣で非人道的」として懲役5年6月、罰金15万円（求刑懲役7年、罰金15万円）を言い渡した。

判決理由で町内裁判官は「自分たちの遊興費のために娘の気持ちを踏みにじつた許し難い犯行」と指弾。そのうえで「彼女にとつて、あなたは世界でたつた1人の母親だ。何ができるのかよく考えなさい」と説諭した。

判決によると、母親は夫（47）と共に謀り、当時中学生の娘に「体売つてでも金をつくつてこい」などと繰り返し売春を強要。W市のホテルで今年2月下旬、男性客相手にみだらな行為をさせ、現金3万5000円を受け取らせた。

20XY年2月5日

「体売つて金つくれ」…中学生娘に売春強要の義父に懲役8年

中学生だった娘に売春を強要し、娘にみだらな行為を繰り返した

として、児童福祉法違反と売春防止法違反の罪に問われたW市の義父（47）の判決公判が5日、W家裁で開かれた。町内鎮右裁判官は「卑劣で非人道的」として懲役8年、罰金15万円（求刑懲役10年、罰金15万円）を言い渡した。

判決などによると、義父は娘の母親である妻（37）＝同罪で懲役5年6月、罰金15万円の実刑判決確定＝と共に謀し、「体売つても金をつくりこい」などと娘に言って、繰り返し売春を強要。XXXX年1月から20XX年3月ごろまで売春をさせた。またYYYY年10月から20XX年3月ごろの間、自宅でみだらな行為を繰り返した。

判決理由で、町内裁判官は「被害者が拒絶しているにもかかわらず、長期間にわたり深い影響を与えたことは人格を根本から破壊しその精神的苦痛は筆舌に尽くしがたい」と指摘した。

20XY年2月6日

中学生の娘に売春強要などの父親に懲役8年

中学生だった娘に売春を強要したとして、児童福祉法違反と売春防止法違反の罪に問われた義理の父親に対し、W家庭裁判所はきのう（5日）、懲役8年の実刑判決を言い渡した。

この事件は、W市に住む47才の男が、中学生の義理の娘の母親と共に謀し、去年2月にW市内のホテルで娘に売春させ、受け取らせた現金3万5000円を自分名義の口座に振り込ませたとされるもの。義理の父親は娘の母親と共に「パチンコ代がない。体売つても金をつくつてこい」と繰り返し売春を強要したとされ、W家庭裁判所は懲役10年の求刑に対して懲役8年、罰金15万円の判決を言い渡した。町内鎮右裁判官は判決理由で、被告が娘に性的虐待を繰り替えしてきたことに触れ、「被害者の人間性を完全に無視し、

金づるや性欲のはけ口として扱つた」と指摘し、「犯行はまさに鬼畜の所業と言うほかなり言語道断」と厳しく非難した。そして「裁判の中で話がいろいろ変わり、反省の態度ではない。自分の都合ではなく、過去の自分と向き合い、それを変えるのが反省。刑務所で傷つけた娘に何が出来るのか考え方にして欲しい」と、厳しい口調でさとした。

枝実は溜め息を吐く。

こんな記事ばかり相手にしていたら気が滅入るというものだ。しかも、ひとつふたつ被告人の実名が出ている記事があつたが良いのだろうか。確かに性的虐待等に関しては、被害者のプライバシーのために容疑者や被告人の氏名は明らかにしないものではなかつただろうか。

そして思考は計算を始める。添付ファイルの写真に巧と一緒に写つていた女性は二十歳そこそこに見えた。そうすると6年前は中学を卒業したかしていないかという頃。

絶対に、名は聞くまい。

巧と深く関わってしまったというだけで、枝実の人生に厄介事はもう充分だった。君子危うきに近寄らず。何も知らなければ、余計な良心の呵責を感じることもない。

シチリアの海も、流石にそろそろクラゲが出てきた。

ジェラテリア・ベラ・クリスターの客足も落ち着いてふきの多忙さは軽減され、ここ数日は業務が楽だった。

そんな折に、珍しく旅行会社のほうから仕事が入った。日本人旅行客のガイドだという。ふきはジェラテリアのほうのシフトを調整してもらい、都合をつけた。

名前だけ教わって、フェリーの船着場で待機することになった。

S i g . T o k u s h i H i n a s e と書いた画用紙を抱えて待つ。一応時間通りに行つたのだが、例の如くナポリからシチリアへの便は遅れていた。暇なので、画用紙の裏側に『ヒナセ トクシ様』と書いてみる。ガイドを頼むような客は通常イタリア語が出来ない。それはまあいいとしよう。シチリア訛りはネイティヴのイタリア人だつて分かりにくい。ミラノやヴェネツィアの言葉と比べるともう異国語だ。だが、英語も出来ないケースが多い。英語を喋るイタリア人は少ないので話せたところであまり意味はないのだが、アルファベットすら読めないでシチリアに渡つてくる旅行客もいる。でかでかと名前を掲げていても気付かないで素通りされた経験は何回もある。

まあ、たとえどれだけ英語やイタリア語が流暢でも、やはり日本人相手だと日本語の文字のほうが注意を引きやすい。シーズン外とはいえ、ツアーの出迎えはふきだけではない。ずらつと並ぶアルファベットの中から自分の名前を探し当てるのと、異国の地で片仮名とはいえ日本語を見つけるのとでは大分違う。

片仮名を掲げて待つていると、2時間遅れでフェリーが到着した。思つたより早かつた。

アジア系の旅客が降りてくるたび「ヒナセ様ー」と声を張り上げる。それにしても、ヒナセトクシ。聞いたことがあるような気がする。

る。久しく日本に帰つていなければ、そんな名前のタレントでもいたつけか。

やがて、バックパックを背負いキャリーケースを引き摺つた若い男が姿を現した。ふきと同い年くらいだろうか。日に焼けた健康的な外見をしている。彼はきょろきょろとあたりを見廻してふきの手の画用紙に目を留め、笑顔になつた。だが次の瞬間、視線を上に移動させて驚愕の表情を作る。

「山上!？」

「え?」

「山上、山上ふきだろ! ほら俺、日生徳志! 中学の時一緒に

た

「あ! 徳ちゃん?」

「スイ! うわー久しぶり、元気? 何してんのこんなところで」

日生徳志。中学校の頃の同級生だった。特に親しいわけではなかったが彼は気さくな性格で、クラス全員からあだ名で呼ばれていた。ムードメーカーで男女クラス学年部活を問わず友人が多く、顔も広かつた。中学生の頃家庭の事情でいつも死にそうなほど暗い顔をしていたふきでも、彼は気味悪がることもなく話しかけてくれていた。そうか、それで見覚えがある名前だと思ったんだ。

「私、ここで暮らしてるの。ガイドを勤めさせて頂きます、遠野ふきです。よろしくお願いします」

「タメ語でいいって、徳ちゃんって呼んで。 遠野? そういう

旅行会社からの連絡でも、ガイドの名前山上じゃなかつたけど」

「まあ、ちょっと家庭の事情でいろいろあってね。数年前に苗字が変わりました」

山上というのは、母の結婚相手、ふきにとつては義父の姓だ。あの事件が発覚してから、ふきは義父の籍から抜いてもらい、母の旧姓に戻つた。義父の姓にも嫌気がさしていたし、どこかの新聞社がボクをやつたせいで事件がふきの周りの人間にバレ、わずか数ヶ月で高校を転校する破目にまでなつた。転校先で同じことにならない

よう、弁護士に相談して苗字を変えた。

だがそれは高校進学後のことと、中学卒業時に別れた徳志が何も知らないのは当然だつた。

「お連れ様はいないの？ ひとり？」

「うん、ひとり」

「珍しいね、若い男の子の一人旅でガイド頼むなんて。あ、行こう。

キャリー持つよ」

「いいつていいつて」

「でも私ほとんど手ぶらだし、私の仕事だし」

「いやほんと、いいつて。女の子に持たせられない」

「そう？ ……じゃあ、お言葉に甘えて。ありがとう」

「それにしても、ほんとイタリアつて電車とかフェリーとか遅れるんだな。えらい時間食った」

「徳ちゃんはましなほうだよ。1、2時間の遅れで済むなんて、北ならともかく南イタリアじゃなかなかないよ。リアルに日数単位で遅れるから」

「うわー……」

素直に表情を歪めた徳志に、ふきは笑つた。

「徳ちゃん、今大学生？」

「そ、4年生。今回は卒業旅行の下見。だからガイドよりしく、友達とどこ行つたらいいか相談させて」

「あ、なるほど。了解。……徳ちゃん、学校は？」

「単位は4年の前期までで充分足りてるし。あと卒論だけ」

「そつか」

「山上……あー、遠野？ 呼びづらい、下の名前でいい？ ふきは何してんの、留学中？」

いきなり呼び捨てにされたことに少し驚く。シチリアでは名前で呼ばれることが当然で苗字で呼ばれることなど滅多にないのに、やはり日本人に呼ばれるのは感覚が全然違つ。

「ううん。私高校卒業してすぐこっちに来たの。いろいろ仕事して

働いてる

「大学行つてないんだ?」

「うん」

そんな金はなかつた。それに、母と義父が出所する前に、あの2人の手の届かない所へ逃げたかつた。

イタリアの成人が18歳だつたことも幸運だつた。こちらに来れば保護者の許可がどうのとうるさく言わることはなかつた。ちなみにアルコールは16歳からOKなので、ふきはイタリアに来てすぐワインデビューした。合法なんだからいいじゃない。

さて、どうしようか。荷物邪魔だよね。どこかに置いてこれればいいんだけど、ホテルはチェックインの時間まだだよね?」

「そうなんだよー。盲点だつた。フィレンツェとかナポリとかも行つたけどさ、移動日が辛くて……」

「旅慣れない人はよくやるよね。移動はさ、午後とか夕方にして、移動日の午前中は駅に荷物預けて出発地の観光するほうがいいよ。大荷物持つて日中に着いちゃうと、ホテルの位置によつては駅に預けるのも不便だつたりするし」

「ああ、春の卒旅の時はそうする」

「とりあえず今日はパレルモ・チエントラーレの手荷物預かりに預けようか」

「チエントラーレ?」

「あ、ごめん。中央駅」

「OK」

フュリーは遅れたとはいえ、夜行だつたのでまだ午前中である。中央駅で荷物を預けても昼といつにはまだ早かつた。

「で、今日どうする?」

「ごめん、その前にメシ……フュリー降りてから何も食べてないし、腹減つた」

「わかつたけど……んー、まだリストランテは開いてないなあ。切り売りのピザとか、バールでパニーとコーヒーとかになつち

やうけど

「何でもいい！ つていうかさ、春の時は素泊まりのコースになる可能性もあるんだ。だから外で朝飯食う方法教えて」

「じゃあ、バールだね」

駅近くの適当なバールに入つて注文する。練習のためにも注文は自分でしたいと徳志が言うので、ふきは彼の分までは注文しなかった。

「コーヒーの種類が多すぎてわからんねえ……」

「なら朝はカプチーノかカフェラテにしつけば？」

「何で？」

「イタリア人は基本エスプレッソで、正午過ぎるとエスプレッソ以外を頼むと馬鹿にされるの」

「えー！ 苦いの嫌いな女の子とかどうすんの？」

「マッキアートならOKだから、私はマッキアートにしてる」

「違いがわかんないんだけど」

「えーと、エスプレッソは専用のマシンで抽出した濃いコーヒー。イタリアの基本。砂糖入れて飲む。

それにミルクを一滴たらしたのがマッキアート。やつぱり濃い。カフェラテはカフェオレみたいなもので、半分くらい牛乳。入れる牛乳を泡立てたらカプチーノ」

「普通の濃くないコーヒーは？」

「アメリカーノって言わないと出て来ないかな。エスプレッソのお湯割り」

「へえ。カフェラテとカプチーノは朝しか駄目なんだな？」

「カフェラテなら何とか午後でも許されるけど、カプチーノはきついね」

「じゃ、カプチーノ。あとこのパニーノ。何て言えばいい？」

「Un cappuccino e un panino」

「ウン・カッパッチーノ・エ・ウン・パニーノ！」

「S？」

バリスタが答え、用意してくれる。値段をイタリア語で告げられたが徳志は分からぬようで、紙に書いてもらっていた。

カプチーノとパニーが乗ったトレイを持って、徳志がテーブルに戻ってくる。

「いやー、ナポリとかでも思つたけど、数字わからんねえときついな」「そうだね。英語話せる人はバリスタとかやらないし。

時間とかお金とかで数字はけつこう使うから、挨拶より数字覚えたほうが便利かも。挨拶なんて会う時も別れるときもチャオでいいんだから」

「勉強になります」

徳志はパニーにかぶりつく。割合気に入つたようだつた。

「ん、うまい。正直財布の事情でレストランばかり行くわけにもいかないしさ、だけど安いの食つにしてもイタリア来てまでマクドナルドとか入るのもどうかと思つて、安いメシでなおかつイタリアっぽいの探してたんだよ」

「ならバールはおすすめ。日本人のコンビニみたいな感じで、イタリア人にはすぐ身近なものだし。

あと、やっぱり切り売りのピッツアかな。スタンドで買つて食べ歩きするの」

「でもあれ、名前書いてなかつたりするじゃん。イタリア語でのピザの種類とかわからんなくてさ」

「指差して Quesito! って言えばいいよ」

「え、何、メモる。『クエスト』?」

「そう」

その場で旅行に役立つフレーズをいくつか教え、カプチーノを飲み干したので席を立つた。

チョックしたい観光名所を聞き出し、今日と明日のプランを立てる。明後日には徳志は別の場所へ移動してしまう。旅行客の移動はいつも慌しい。

その日は街の中心部に近い歴史的建造物などの観光名所をいくつかと、中心部のアウトレットモールを案内し、夕方駅で荷物を取つてホテルまで送り届けて別れた。

翌日は朝から少し遠出するような観光名所を巡り、色々と案内する。

「春休みの旅行なら海水浴は出来ないし、来年の復活祭は4月だから遅すぎるよねえ。いつそ2月くらいに来たほうが空いてていいかも。ゆっくり観光スポット巡つてみれば？」

「うん。まあシチリアだけ見るわけじゃないし、色々考えとくよ。それより、今日はレストランで食べたい。シチリアっぽい料理教えてよ。毎食とはいきないけど1回くらいはちゃんとしたモノ食わないよ。最低英語メニューがあるところ、出来れば英語通じるスタッフがいるところ」

そう言われて、ふきは考え込む。エンツォは手術を控えて絶対安静、ふきよりずっと食生活に注意が必要なはずだ。ならばまさかリストランテに来たりはしないだろう。

「……いいよ。じゃ、私がバイトしてた所案内する。英語メニューも英語話せるスタッフもいるし、もし何だつたら次来るとき言つてくれれば、私が臨時で入らせてもらつてサーブできるかも」

実際、日本人の団体客の予約が入つたときなどは、ふきがジエラテリアの業務を休んでリストランテに駆り出されたこともある。

徳志を連れて行つて問題はないだろう。

「リストランテ・ベラ・クリスタ？　どういう意味？」

「字面だけなら『麗しのクリスタ』って意味だけど、オーナーの奥さんがクリスタベラって名前で、それをもじつてるんだと思つ」

胸に刺すような痛みを覚えたのはもう昔のことだった。

入つた途端しまつたと思った。エンツォはいなかつたがレオがいた。しかも他のスタッフの顔ぶれを見ると、今日のメンバーで英語が話せるのはレオだけだ。マンマ・ミーア。

「Buonanera . Good evening Mr . (

ブオナセーラ。こんばんは)」

「あ、グッド・イヴニング」

徳志がほつとした表情でレオに英語で挨拶する。

ふきは口早に、観光旅行の下見客だと告げた。レオはちらりとふきに冷たい視線を寄せたが、表面上はにこやかに上席へ案内してくれた。

「……ふき？ 頬色悪いけど大丈夫？ 疲れた？」

「ううん、何でもない。心配してくれてありがと、徳ちゃん」

「そうか？ ならいいけど……なあ、イタリア料理つてどう食べるんだ？」

「えーとね。フルコースなら、冷たい前菜、温かい前菜、ピッツァ、パスタ、肉、魚、デザート、カフェ、リモンチエッロ。飲み物はワインかミネラルウォーター、シチリアならマンダリンジュースもおすすすめ」

「ちょ、ちょっと待って、量多すぎねえ？」

「だから、多いと思つたら全部じゃなくてひとつふたつ外すの。前菜ひとつピッツァだけどか、女の子はよくやるね。団体で来るんなら、全部ひとつずつにして皆で一口ずつ分け合うとか。流石にドルチェとコーヒーは人数分いるけど、料理をシェアする分には何も問題ないよ」

「そつか、びっくりした。シチリアならではのおすすめ料理つてある？」

「前菜はカポナータだね。プリモは、うーん……ウーニのパスタとかどう？ イタリアで唯一ウニ料理出すのがシチリアだよ。『ウニの美味さがわかるのは日本人とシチリア人だけ』とか言われるし。あとは折角海に囲まれてるんだから魚料理。デザートはカンノーロがシチリアの定番だよ。焼いたパスタ生地の中に、リコッタチーズとドライフルーツ詰めてるの」

「お、いいな。じゃそれで行こう。ピザはシチリアじゃなくてもイ

タリアならどこにでも食えるし、今回はバス。注文は俺にさせてな

「OK」

徳志が手を上げると、レオが近付いてきた。私がいるんだから英語話せないスタッフでもいいのに、とふきは思う。大体彼の仕事はもつとグループ全体の根幹に関わる経営・マネジメントといったことではなかつたか。

英語のメニューを見ながら徳志が注文し、レオは懇懃にそれを承る。

食事は美味しかつたが、レオの冷たい視線が背中に突き刺さるようで、ふきはとても寛いだ気分にはなれなかつた。それでもムードメーカーの徳志の持ち前の明るさが場を盛り上げてくれて、テープルでの会話はまあまあ楽しめた。

会計の際、徳志は奢ってくれようとしたが、ふきの飲食分は観光会社の経費で落ちるからと断つた。ホテルまで送つていこうかと言つたら断られた。もう暗い時間だし女の子を付き合わせられない、道は覚えたから大丈夫だと言われ、リストランテで別れることになつた。

最悪だ。

明日の移動に備えて早く帰るという徳志を見送ると、ふきはレオに呼び止められた。

まったく、最悪だ。

さて、ジエラテリアの仕事を休んでデータのようなことをしていったと非難されるか、それともイッポーリトのことか、一体何を言われるのだろう。

11・遠野ふきの錯乱

逃げ帰るわけにはいかなかつた。

今日の食事代の領収書を貰わなければ、観光会社に経費として請求することが出来ない。50ユーロの食事代は、自腹を切るには痛すぎた。

レオに説明を求められ、リストランテの奥の休憩室に連れ込まれた。

「Chi ?? (誰だ?)」

「Un vecchio amico, con cui ho frequentato la stessa scuola in Giappone. (旧友です。日本で学校が一緒だつたんですね)」

「Non sei venuta al lavoro per uscire con il tuo amico? (男友達とデートするために仕事を休んだのか?)」
「? il lavoro mio! L'ho fatto per il mio visto. Se voi potete darmi il visto, non dovrevo farlo. (仕事です！ビザのためです。あなた方がビザをくれるなら、しなくていい仕事だつたのに)」

イタリアの就労条件は厳しい。もともとイタリア人の失業率も高いため、外国人が就労ビザで正規に雇用されるのは極めて難しいのだ。雇主が、どうしても従業員が外国人でなければならぬ理由を書面にして申請し、それが認可されなければビザは降りない。加えて税金もかかるため、大抵の雇主は許可が下りるかどうかを分からぬ外国人労働者のために、書類を作成して国に問い合わせる手間をかけたがらない。比較的ビザが降りやすいのは観光業であり、ふきも一応観光会社と正規の契約を結んでいる。ベラ・クリスタで

の扱いはアルバイトだつた。

「OK、capisco. Ma un'altra cosa
da chiederti. Che cos' successe
sso a Ippolito? (OK、分かつた。だがもうひ
とつ質問がある。イッポーリトに何があつた?)」

兄弟思いで結構なことだ。自分にも愛情溢れる兄がいてくれれば、人生は少しは違つていただろうか。巧の顔を思い出して少し憂鬱になりながらも、ふきは慎重に言葉を選んだ。

「Non hai sentito niente da tuo
fratello? (弟さんから何も聞いてないんですか?)」

「Ha detto che tuo cugino gli ha
affatto la violenza. (君の従兄弟に暴力
を振るわれたと言つていた)」

「Non ha detto per ch'? (理由は言つてま
せんでしたか?)」

「Senza ragione ha detto. (理由もな
く、と言つていた)」

センツア・ラジヨーネ。理由もなく。あるいは分別なく。
イッポーリトのほうがよつほどセンツア・ラジヨーネだ。
だが、どうしよう。巧が勝手にやつたことだと言つて、レオが信
じるだろうが。

それは疑問でも不安でもなく、单なる反語だつた。レオがどう考
えるかなど、ふきは充分に分かつっていた。今のようにふきから話を
聞こうとするだけで、レオにしてみたら有り得ないほどに譲歩して
いるのだろうから。

しかしながら、上手い言い訳も思いつかなかつた。

「Non lo so. Non c'ero l'. Non
ho mai parlato niente di Ippol
ito a Tak... amico cugino. Pe
ro... io non l'ammavo, e la mi

a coinquilina lo sapeva molto
bene. Lei mi voleva lasciare I
ppolito e un mese fa ha detto
qualcosa di lui a mio cugino,
e lui? uscito. Dopo ho niente
contatti con Ippolito. Nessun
ssun email. La nostra relazion
e? finita. (知りません。私はその場にいませんで
したから。イッポーリトのことをタク……従兄弟に言つたこともあります
りません。けど……私は彼を愛していなかつたし、ルームメイトは
そのことをよく知つていました。私とイッポーリトを別れさせたが
つていて、ひと月前彼について何か私の従兄弟に言つたみたいで、
従兄弟は出かけて行きました。それからイッポーリトから何の連絡
もありません。デートも電話もメールもなしです。私たちの関係は
終わりました)「

「Non sapeviniente?」(何も知らなかつた
と!?)

「Non lo sapevo . . al primo .

知りませんでした……はじめは)「

「Quando e che cosa hai saputo?

(いつ、何を知つた?)「

「Quella notte, quando mio cugi
no? tornato al nostro appartamento, mi ha detto di non preo
ccuparmi più. In quel momento
non lo capivo. Ma qualche gior
no dopo ho visto Ippolito tutt

「…………（あの夜、従兄弟が私たちのアパートに帰ってきて、もう何も心配するなと言つたんです。その時は何のことだか分かりませんでした。でも数日たつて、全身に包帯を巻いたイッポーリトを見かけて。向こうは私に気づきませんでしたけど。それでもしかしたら……従兄弟が…………）」

「Perch? non mi ha i detto a que

l momento! （なぜその時僕に言わなかつた！）」

「Non volevo pensarci! （考えたくなかつたんです！）」

レオは憎々しげな視線をふきに向ける。

けれど、ふきは眞実イッポーリトに関わりたくなかった。巧がやつたのならやりすぎだとは思つたが、だからといって1年以上DVを繰り返された相手を心配できるほどの優しさは持ち合わせていかつた。

だがそんなふきの事情など知つたことではないレオは、吐き捨てるように言ひ出す。

「Che fredda. （冷たい女だな）」

もうそれでいい。今更レオにどう思われようと構わない。

「Se non l' amavi, perche stava con Ippolito? （イッポーリトを愛していないのなら、どうして付き合つたんだ）」

「Chiedi Ippolito. Lo voglio sa per e anche io. Mi intimidava. （イッポーリトにきいてください。私だけ知りたい。私は脅迫されていました）」

「Come ti intimidava? （どんな脅迫だ？）」

それを言えたらそもそも脅されていたりしない。イッポーリトはどうやってか、ふきが最も知られたくない秘密を握っていた。そのせいで、彼の言いなりになるしかなかつた。

ふきがイッポーリトとのことで一番恐れているのは、彼が自棄に

なつて秘密をばらしたりしないかということだつた。証拠は巧が奪つたらしい。オンラインに上がつていたものはふきが消したし、巧はUSBを奪つた上パソコンのローカルディスクに残つているデータも本体ごと壊したと言つていた。けれども、イッポーリトが秘密を知つてることには変わりない。ばらせばイッポーリトは脅迫罪に問われるが、それも厭わずふきを破滅させようとすれば彼には出来るのである。

「Senon dici niente non posso crederti.（何も言わないのなら信用できるはずがないだろう）」

「Allora non devi credermi. Dam mila ricevuta e vado via.（だつたら信用してくれなくていいです。領収書をください、帰ります）」

「. . . . Letue contusioni（. . . .）

（君の痣）

「Che?（え？）」

「Ha fatto davvero Ippolito?（本当に、イッポーリトがやつたのか？）」

「Ci credi?（信じてくれるんですか？）」

「そんなことはないだろ。レオがどれだけ弟に甘くてふきには厳しいが、そんなことはどうの昔に思い知つた。

「Non mi pare che ci creda. Ami tuo fratello tanto tanto più? dime. Ma non mi riguarda. Dam mila ricevu - -（まさかですよね。あなたは弟さんのほうがずっとずっとお大事ですもん。でも私にはどうでもいいです。領収書をくださ）」

瞬間、顎を掴まれ、何をと思った時には唇が塞がれていた。口の中にレオの舌が侵入して、ふきはたちまちパニックを起こす。

「ん

つ！」

声を上げようとしても呑み込まれた唇のせいで悲鳴はぐもり、暴れようともレオに押さえ込まれてびくともしない。

いや！ 誰か、誰か助けて！

脳裏に忌まわしい記憶がフラッシュバックする。義父。イッポーリト。そして金を置いて通り過ぎていった数多の

ふきは相手の舌を思い切り噛んだ。力が緩んだ隙に突き飛ばす。そのまま一目散に逃げ出した。

「フキ！」

後ろで我に返つたらしいレオが叫ぶが構つていられない。リストランテをそのまま飛び出した。

「Aspectta! Scusa, Fuk-i! （待ってくれ！

悪かった、フキ！）」

道路に出ても彼は追いかけてきた。

「いや！ 来ないで！」

リストランテ・ベラ・クリスタからふきのアパートまでは歩いて30分以上かかるが、ふきは全力疾走で駆け抜けた。普段運動もしていらないのによくもまあこれほど走れる、と思うような余裕もあらばこそ。

走つても走つてもレオは追いかけてきて、ふきは気が狂いそうだった。アパートに着くと震える手で何度も失敗しながら鍵を開け、部屋に飛び込む。

「ガイア！ ガイア！」

半狂乱になつてルームメイトの名前を呼ぶ。奥の部屋から訝しげな様子のルームメイトが姿を現した。

「Fuk-i? Che cos-?? （フキ？ 何、どうしたの

?）」

「ガイア！」

ふきは年下のルームメイトに抱きついた。

「フキ！？」

「Gaia . . . aiutami . . . aiutami . . .

・・・（ガイア……助けて……助けて……！）「

「F u k i - c a l m a t i - c o s - ? s u c c e s s o

? （フキ、落ち着いて。何があつたの？）」

ふきの答えは言葉にならず、ただガイアに抱きつく。ガイアは背中に手を回し、なだめるように抱き締め返してくれた。

ノックの音が響く。それと同時に、男のものらしい荒い息遣いが後ろから聞こえて、ふきは身を竦ませた。このフラットのドアは、飛び込んでそのまま、開け放しだった。

「レオ・クランキ？」

戸惑うようなガイアの声が耳元で上がる。

「S e i . . . （君は……）」

「S ono G aia , l a c o i n q u i l i n a d i F u k i . C o s a l e h a i f a t t o ? （あたしは

ガイア、フキのルームメイト。この子に何したの？）」

「N o n v e n i r e ! （来ないで！）」

ふきはガイアに抱きついたまま叫んだ。ガイアは訳が分からぬ様子で、それでもふきの背を優しく撫でながら、レオに向かつて険のある声を出す。

「L eo , n o n t i a b b i a m o i n v i t a t o .
N o n s o c h - ? s u c c e s s o t r a F u k i
e t e , m a c h i a r a m e n t e l a s t a i
s p a v e n t a n d o . V a i v i a , n o n t i v
u o l e s t a r e q u a . （レオ、招待した覚えはないん
だけど。フキと何があつたか知らないけど、明らかに怖がらせてる。
出てつて、フキはあんたにここにいてほしくないみたいだから）」
「A s p e t t a , f a m m i s p i e g a r e - - （待
つてくれ、説明させてくれ）」

「N o ! （いや！）」

「- - C o s ? d i c e . A l m e n o o r a n o .

V a t t e n e , ? l a n o s t r a c a m e r a . （

つて言つてる。少なくとも今はダメ。出でけ、ここにあたしたち

の部屋だよ）」

「Ma - - (しかし)」

「Vattene! (出でけ!)」

ガイアが何やら振りかぶるモーションが、ふきにも伝わった。どうやらテーブルの上のトマトを投げつけたらしい。当たつてぐしゃりと潰れる音がした。

躊躇いがちな足音が数歩遠ざかると、ガイアは片腕でふきを抱き締めたまま半ば引き摺るようにドアまで移動し、勢いよく閉めて鍵を下ろした。

ドアの前の足音が階段を降りていくと、ふきは全身から力が抜けたその場にへたりこんだ。

「Stai bene? (大丈夫?)」

柔らかく微笑みかけてくれるガイアに、涙がぽろぽろと零れ落ちた。

11・遠野ふきの錯乱（後書き）

や、やつと恋愛要素……
ハーレクイン風味の傲慢だけがつっこいヒーローが書かたいのに、
気づけば単に嫌な奴（汗）。

その夜は、体内の水分を全て絞り出すように泣いて泣いて泣いた。ガイアはバスタブに湯を張り、ホットミルクを作ってくれ、中々泣き止まないふきに嫌な顔ひとつせずに付き合つてくれた。結局ふきは泣き疲れてガイアに抱きついたまま彼女のベッドで眠ってしまった。

翌朝、まどろみの中で何となく意識が浮上し、ぼうっとした頭で時計を見やつて悲鳴を上げた。9時30分。ジエラテリア・ベラ・クリスタのオープンは午前10時。完璧に遅刻だった。

朝食も化粧もすっ飛ばして、心配するガイアをよそに家を飛び出す。走りながら電話して平謝りし、遅れそうだと伝えた。そのついでに徳志からメールが入っているのに気づいた。昨日、一昨日の案内の礼と、今朝早くパレルモを発つたことが書かれてあり、ふきは見送れなかつたことを心底心苦しく思った。

開店ぎりぎりに店に飛び込むと、同僚が皆ぎょっとした顔でふきを見た。ふきは口早に謝つてすぐ制服に着替えようとしたが、アシstant・マネージャーのマリーナ・ヴィニヤレッリに呼び止められる。まだ30代半ばのマリーナは普段から笑顔を絶やさない優しい物腰の女性だったが、今日ばかりは顔を顰めてふきを奥の事務室に呼んだ。

「Marina, scusami.（マリーナ、ごめんなさい）

「Fukি, oggi non devi lavorare
come consista.（フキ、今日は接客しなくていいわ

「...cosa vuoi dire?（.....どういう意味

ですか？」

「Guardati nello specchio. Hai una brutta faccia.（鏡を見なさい。酷い顔よ）」

マリーナがトイレを指差すので、ふきはトイレの鏡で自分の顔を見た。

あらり……。

確かに酷い顔だった。すっぴんの上に泣き腫らした顔で、人生最悪に不細工だった。

特に目まわりが酷い。ふきは元々隈が出易いほうでファンデーションが欠かせないのだが、今日はそんな時間もなかつたし、あまり眠れてもいいないので見事に真っ黒である。加えて大泣きしたおかげで目蓋は腫れぼつたいし目は充血している。ついでに朝何も食べていないこともあってか顔色も悪い。

トイレから戻ると、今日は客の前に出すわけにいかないと言われた。事務室やトイレの掃除と電話番、それでも暇ならマリーナの仕事である帳簿の整理を手伝えということだった。

2日も休んだ上に肉体労働から解放されるのは同僚に対しても申し訳なかつたが、かといって化粧道具は家に置いてきたし今更どうも出来ない。ふきは敏感肌で、普通の化粧品だと酷い肌荒れを起こるのでマリーナか誰かの化粧品を借りるわけにもいかなかつた。

というわけで、ふきは俄かに大掃除する羽目になった。開店前にある程度の掃除は済ませてあるので、仕事をしようと思えば普段手をつけないところまでやるしかなかつたのだ。トイレは便器は勿論、洗面台から床から棚から換気扇まで全て磨いてピカピカにして、事務所も散らかつたものを片付けた後幕で丁寧に掃き濡れ雑巾で拭き、窓を磨き、エアコンのフィルターを掃除し、ついでにテーブルや花瓶も水拭きした。

それが一段落すると、手を入念に洗つてからエスプレッソを入れた。スタッフの誰かが休憩する時間だった。

はじめに休憩に入つたのはふきよりひとつ上の大学生アルバイト、ベルナルディーノ・ラディカーティだつた。

「Bernardino, scusa. (ベルナルディーノ、

「ごめん)」

「Non preoccuparti. Ma che hai? (気にすんなって。でもどうしたんだ?)」

エスプレッソを差し出しながら、ふきは曖昧に微笑んだ。

「I l s o r r i s o a r c a i c o? C o m e a l s o l i t o. (アルカイック・スマイル? いつもそうだな)」

確かにふきが何かを話したくない時や言葉が分からぬ時、曖昧に笑つて誤魔化すのはしそつちゅうだった。それに慣れているベルナルディーノは特段気を悪くした様子もなく、事務室を見渡す。

「Hai pulito tutto? vero che i ggi apponesi sono il pi? pulit i n nel mondo. Grazie. (全部完つ壁に掃除したな。日本人が世界で一番綺麗好きつてのは本当なんだ。ありがとう)」

「Prego. (どういたしまして)」

ベルナルディーノが飲み終わつたエスプレッソのカップをふきに差し出し、ふきは笑つてそれを受け取ろうとした。

ガシャン!

だがソーサーの下でふたりの指先が触れ合つた瞬間、ふきはカップを取り落とした。

「Oh! Scusa, scusami! (ああ! 『ごめん、ごめんなさい!』)

慌てて割れたカップの破片を拾おうとする。だが同じよつに破片に手を伸ばしたベルナルディーノの腕にふきの手が当たり、ふきは小さく悲鳴を上げて飛びのいた。身体が小刻みに震える。

「フキ?」

「S - - scusami. Io . . . (『ごめんなさ

い。私……」

自分で自分の反応が分からなかつた。ベルナルディーノに触れられると、無意識に体のほつが拒絶してしまつ。「こんなことは今までになかつた。ベルナルディーノは好青年でずっとふきに良くしてくれたし、ふきは彼に悪感情を持つたことはない。それでも、体は法えるのをやめない。

気まずい沈黙が流れる。何を言つていいか分からず数秒間固まつている。ノックの音が響いた。救われた気分で「A v a n t i . (ビラギ)」と言つ。だが次の瞬間、気分は地獄に突き落とされた。

ドアを開けてそこに立つていたのは、眉間に皺を寄せたレオ・クランキだつた。

世界が色を失くす。濁る視界の中で床がぐつとせり上がり、ふきは肩をしたたか打ちつけた。

耳元で潮騒の音がする。他の音はかき消されて何も聞こえない。

無音の砂嵐。

目の前は白黒で何も見えない。耳が機能をほとんど失つたかのように静かだつた。頭が痛い。腕を掴まれ揺すられる感覚が酷く遠かつた。

遠くから潮騒の音が聞こえる。その更に遠くで、誰かが何か叫んでいる。

「 、 」

ぴしゃりと、頬を軽く張られる感触があつた。だがその感覚が遠い。自分の皮膚が脳から10メートルくらい離れているような気分だつた。

「 あちやん、ふきちゃん」

名前を呼ばれているのだと思うが、誰の声か分からぬ。答えようにも舌が鉛のように重くて動かせない。ただ聴覚だけは、ゆるゆ

ると戻ってきた。

「とつとと氣分を立て直せ。あまり情けないことやつてると眉を見限るよ」

耳元でドスの利いた低い声が響き、瞬間、五官が一瞬で機能を回復する。田の前に、巧の顔があつた。

「巧……さん……？」

頭痛と吐き気が酷い。目の奥がずきずきと痛んで眩暈がした。「立てるかい？」

差し出された手に掴まろうと自分の手を重ねた瞬間、体中に戦慄が走り一瞬にして手を引いた。まるで静電気でもあつたかのようだ。体ががくがくと震え出す。

「ん？　ああ　成程。もしかしてそういう事？　なら……スクーザ、マリーナ？」

巧がイタリア語でマリーナに何か話しつけ、マリーナは訝しげにふきの傍にやつてきた。ふきの手を掴んで引く。マリーナ相手だと震えはおさまり、ふきはスマーズに立ち上がった。

「やつぱりか」

「巧さん……あの、どうしてここに？」

「どうしても何も。ランチに誘おうと思つて来たら、奥で倒れてるつて言つじ。びっくりしたよ、大丈夫？」

そう言つて巧はふきの腕に触れる。再び体が震え出した。巧はふきの耳元に口を近づけ、またもや低い声で凄むように囁いた。

「死に物狂いでその震えを止めろ。でないと本当に殺す」

ふきが一瞬呼吸すら止めると、巧はふきの背に腕を回してぽんぽんと軽く叩く。労わるような響きの声で、優しく語りかけた。

「Non preoccuparti. Va bene, va tutto bene. Nessun problema, Sono qui. (怖がらないで。大丈夫、もう大丈夫。何も心配要らない、俺はここにいるよ)」

猫なで声に全身がぞわっと総毛だった。だが、何とか取り繕わな

いと後で巧に何をされるか。震える体を意志の力で無理やり押さえつける。全身が強張った。

「朝ごはん食べた?」

巧の意図も分からぬまま、ふきは首を横に振る。

「Marina, vorrei pranzare con mia cugina, posso? Pare che lei abbia un'anemia. Non ha mangiato niente questa mattina, forse? La carezza di ferro. Pensoché debba mangiare qualcosa.」
(マリーナ、従姉妹と一緒に昼を食べたいんだけど、構わないかな? 彼女、貧血みたいだ。今朝何も食べてないそうだから、多分鉄分が足りない。何か食べないと駄目だ)「OK. Va, Fuki. (いいわ。行きなさい、フキ)」「Per? Marina - - (でも、マリーナ)」「Non puoi lavorare in quelle condizioni. (その体調じゃ働けないでしょ)」「... Grazie. Scusate tutti. (...ありがとう。みんな、ごめんなさい)」

巧に半ば担がれるようにして連れ出される。店を出る直前、複雑な表情のベルナルディーノとすれ違う一瞬、「Scussa. (ごめん)」と詫びの言葉が口をついて出た。口を引き結んで沈痛な面持ちのレオとは、目を合わせられなかつた。

「で、何食べる?」

「シチリアの太陽が眩しい。頭がくらくらした。

「あんまり、食欲が……」

「何言つてる。手術に向けて体調整えろつて言われたんだろ? エンツォが死んでも良いつてわけじゃないだろ」

「……じゃ、ピツツア」

「OK。そこのピツツエリアに入る?」

切り売りのピツツアがガラスカウンターの中に所狭しと並べられている。チーズの匂いが鼻をくすぐると、現金なもので一気に体が空腹を訴えた。

「俺はサラミ。ふきちゃんは?」

「ヴェジエタリアーナ」

「野菜? 何、ダイエット? 体重増やさないといけないんじゃないのか?」

「かと言つて、脂肪でぶくぶくになるわけにも……ピツツアは小麦粉で炭水化物は十分ですし、タンパク質はチーズでたっぷりだし、栄養バランス考えないと」

「ま、いいけど。飲み物は?」

「オレンジジュースで」

「了解」

イタリアでは、少し歩けば広場に突き当たる。広場のベンチにふたりで腰掛け、ピツツアを頬張った。

「で、昨日何があった?」

「……知つてたから、今日店に来たんじゃないですか?」

「君は俺を何だ思つてるんだろうね。俺がいなかつた場所でのこと、何で俺が何もかも把握してゐるわけがあるんだ。しかも昨晩だよ、情報を集めるには時間がなさ過ぎる。せいぜい昨夜君が、レオ

とふたりで休憩室に入ったと思つたら血相変えて飛び出してきて、ボロアパートまでレオと盛大なうふふあはは待てよ～チエイスを繰り広げ、レオはガイアちゃんにやれストーカーだのキモいウザい死ねだの言われて追つ払われて、その後君はガイアちゃんとそこはかとなく百合な雰囲気になり、今朝はいかにも泣き腫らしましたつて顔で出勤して、何故か男に触られたら拒絶反応を出してることくらいしか知らないよ

「全部知ってるじゃないですか………」といふか、「何ですかその形容」うふふあははって。百合って何だろう。

ガイアが喋つたのだろうか。でもリストランテでのことは彼女は知らないはずだ。巧はどうやって……いや、話術に長けた彼のことだ、聞き出すのは多分それほど難しくない。

「休憩室で何があつたかまでは知らないよ？」何があつた、もしかしてレオに襲われたとか？」

「襲われたつて……まさか、そんな」

「えー。未遂でもなく？ 胸触られたり服破られたりとかは？」

「ないです！」

「何だ、つまらん」

面白がられてたまるか、とふきは思つ。そんな洒落にならないことが起こつたら笑い事ではない。

「じゃ、何されたんだ。何もされてないにしちゃ今日の反応、異常過ぎない？」

「わかりません。キスされただけです

「それだけ？」

「それだけです」

今思い起こせば何だかんだで領収書を踏み倒された氣もする。だがそれは別問題で今は関係ないだろう。改めて取りに行く氣にもなれなかつたし、もういい、泣き寝入りしよう。

「キス程度でうろたえるほど初心でもないだろ？ 何なんだい」「自分でも、わかんないんですよ……」

レオはともかく、ベルナルディーノその他の同僚に対しても失礼な態度を取りたいわけではない。なのに相手の気分を害するようなことばかり繰り返して、ひたすらに自己嫌悪である。

「……アビガル」

「はい？」

「いや、何でもない。それよりふきちゃん」「はい」

「俺、アビガルと会うよ。また」「はい」

「！ な、んで……」

「話したいことがあるんだ。明日の夜9時、俺のホテルで。邪魔はしないだろ？ U.S.Bも俺のところにあるし。それに」

巧は懐から新聞記事のコピーを差し出した。

「こ、れ……！ 何で！」

「個人がインターネットというメディアを手にしてから、何も秘密になんて出来なくなつたんだよ。たとえイタリアまで逃げてもね。山上陽子被告の刑は懲役5年6ヶ月。もう出所したんじゃないかい？ お母さんに連絡は取つたの？」

「関係ありません！」

「無いことはないだらう。ふきちゃんの母親なら、俺にとつては叔母つて言つてもいいくらいだし」「なんど……どうして……」

「アビガル会うよ。邪魔しなければしばらくは口外しない。ま、この記事持つて行つたところで読めるのはエンツォくらいのものだろうけど」

それが一番困る。巧は分かつて言つているのだらう。

「残念ながらね、ふきちゃん。エンツォが日本にいた頃、一番親しくしていたのは俺の親父だ。兄弟だしね。

親父は君の事なんて知らないけど、遠野陽子の事は良く覚えていた。エンツォ関連でシチリアに呼び出されて、俺が何も下調べしてこなかつたと思うかい？ エンツォが日本にいた時の交友関係を調

べて、そいつらが今どこで何をしているのかちゃんと調査してから来ただよ。でなきや何で先々月、俺が君のフラットのドアを叩いたと思うんだい。『こんばんは、俺は緒貝巧。遠野ふきちゃん、君の従兄弟です』

「…………」

「君とエンツォの関係は誰にも言つていない。親父にも、遠野陽子山上陽子がエンツォと別れてからどうしたかなんて一言も言つてない。だからふきちゃん、俺の言うことは聞いておくんだ。

いいね？ 明日の晩、アビガに会う。邪魔はするな。協力しろ」
ふきは押し黙り、頷くしかなかつた。血の流れる音が聞こえない。巧は晴天の下で晴れやかに笑つた。

「ほらほら、そんな顔で仕事するつもり？ ただでさえ今日は酷い顔なのに、仮頂面したら見るに耐えないじゃないか。

笑つてしつかり働いておいで。エンツォの手術まで、君も波風立てたくないだろ？」
カッターナイフが無性に恋しい。

店に戻ると、ベルナルディーノは制服から私服に着替えていた。
彼はもうあがりだ。

同じアルバイト仲間とはいえ彼は学生の小遣い稼ぎ程度なので、週に何回か授業のない時間帯に働くだけだ。今日も多分本が詰まっている重そうなバッグをぶら下げているから、これから大学へ行くのだろう。

「Ciao - Fuk i - Ci possiamo bac i a

re? (じゃあな、フキ。バーチできる?)

おどけた口調を装つていたが、戸惑いや不安感が透けて見えた。バーチとはイタリア式の挨拶で、出会い頭や別れる際に軽く頬と頬を触れ合わせる。何も恋人同士に限らず、家族、友人、初対面の相手とも珍しくない。ふきもガイアやベルナルディーノと挨拶する

際はたいていバーチをしていた。

「Certo.（もちろん）」

軽く頬が触れ合う際に、いつものようにリップ音を立てる。ベルナルディーノは笑顔になつて手を振り、自転車で駆けていった。
事務室に戻ると、マリーナがいた。

「Ora stai bene?（もう大丈夫?）」「S? . Scusa.（はい。ごめんなさい）」

大丈夫。

巧相手には（脅されてとはいえ）震えは止まつたし、ベルナルディーノとも少し体は強張つたけれどもバーチ出来た。もう、何とかやれるだろう。自分は意外にタフだと思う。でなければ、15年もあんな毒親に付き合つて狂わずにいられた筈がない。

だが、レオが話があるそุดからとマリーナが出て行き、レオが入つてくると、たちまちにふきは硬直した。

やっぱりタフだつてのはなし。タフじゃなくていい。なくていいから誰かこの人何とかして！

というか、レオは今までどこにいたのだろう。店頭にいたようにも見えなかつたのだが。

かたかたと、体が震え出す。カチカチといつ音が近くで響いて、何の音だろうと疑問に思つ。ふいに自分の歯が打ち合わさる音だと気づいて気が遠くなつた。

「Hai dimenticato questo.（忘れ物だ）

「そう言つてレオがテーブルの上に置いたのは、昨夜の領収書だつた。

「. . . Grazie.（……ありがとうございます）」

手に取ろうとしたが、指先が震えて上手く掴めない。ふきは舌打ちしたい気分で領収書に手を叩きつけ、そのまま引つたくつた。バン！ と大きな音がした。掌が痛い。

「. . . Come male educata.（無作法だな）」

「 Scusami . (失礼しました) 」

わざとではない、念のため。レオを不愉快にしようと思つたわけでもない。

だが、それを言つても詮無いことだと思われた。そもそもふきの行動がレオを愉快にしたためしがないので。

領収書を折りたたんでポケットに入れる。震える手で折った領収書はぐしゃぐしゃになった。

「 . . . Hai freddo? (……寒いのか?) 」

がくがくと震えるふきの腕に、レオの両腕が伸びる。

「いやっ! 」

ふきは思わず振り払おうとした。ぱしん、と思つたより大きな音が出た。

レオは一瞬呆けたような顔をして、きつく口を引き結び、眉根を寄せた。

ぐい、と両手で両一の腕を掴まれ、押さえ込まれる。

「 Lasciami ! (放して!) 」

「 Comportati bene . Non si agi sc

e cos? con il tuo superiore . (行儀良くしろ。上司の前で取る態度じゃない) 」

「 Non tocarmi ! Non tocarmi , per favore ! (やわないで! やわないで、お願い!) 」

「 Che fai? Non credo che c'abbia
al androfobia . (どうしたんだ? まさか男性恐怖症つてわけじゃないだろ?) 」

「 Pu? darsi ! Non voglio nessuno
uomo toccarmi ! (かもしれません! 男の人には
わられたくないんですね!) 」

レオの瞳の中にカツと何かが燃え上がった、よう見えた。次の瞬間、ふきは彼の腕の中にいた。身動きが取れないよう抱きすくめ

られ、耳元で低い声が響く。

「L - androfobia? Tu , che facevi
lo stalkin g ad Enzo , (男性恐怖症? エ
ンツオをストーキングしていた君が)」
「！」

耳朵を軽く舐められ、甘噛みされる。シチリアではこれは決闘の
合図だつたか?

「Che era la ragazza d' Ippolito ,
(イッポーリトの恋人だつた君が)」

「ひつ」

前を留めていなかつた上着を下ろされ、首筋を吸われる。痛みと、
気持ち悪さが同時に襲つてきた。

「E che hai fatto quest o con me
ieri , hai l' androfobia? ! (僕と昨
日こんな事をした君が、男性恐怖症だつて!?)」

唇に噛み付くようにキスされた。

「い、やだ……いやだいやだいやだ!
恐怖しか感じなかつた。どうして。何で。なぜ、私が

そのまま、ふつりと意識は途切れた。

目を開けると、見覚えのない天井が目に飛び込んできた。

シンプルなデザインとはいえないシャンデリアがぶら下がっている時点で別のお宅だ。

だけど何だかデザイナ・ヴがあつた。見たことはないが、このシャンデリアや染みひとつない天井が醸し出す雰囲気に、何か覚えがある。

はて、と首を捻りながら起き上ると、そこには見慣れないベッドだった。二人くらい寝れそうな。

シルクか何かの上質なシーツに手を突いてあたりを見回すと、あまり見たくないものが目に飛び込んできた。

「……夢か、寝なあそう」

「Puttropponon capisco giappone.（残念ながら日本語は分からぬ）」

仏頂面のレオが一人掛けのソファに座つてこちらを見ていた。やっぱり現実逃避は無理か。

「Dove sono?（ここ、どこですか？）」

「La camera mia.（僕の部屋だ）」

ということは、イッポーリトの家。

イタリアでは成人しても実家に残るケースが珍しくない。その理由として一に就職難で一人暮らしする稼げる若者は稀だということ、二にそもそも空いている部屋がないことだ。イタリアの都市の大部分は今より人口が少なかつた中世に造られたもので、景観を維持するために家屋を取り壊したり新しく建てたりは法律でかなり厳しく制限されている。ふきがルームメイトを探さなくてはならなかつた理由もそれで、一人暮らし用の部屋は数も少なければ空きもないため、ファミリータイプをシェアするしかない。

クランキ家なら、道理で既視感があると思った。親のいないと
に何度も連れ込まれたことか。

「Vado via.（帰ります）」

「Aspecta. Stai bene?（待て。大丈夫な
か？）」

「Anche se non stia bene, andre
i via.（大丈夫じゃなくても帰ります）」

「No.（駄目だ）」

ふきは溜息を吐く。感情が振り切れて麻痺したように、ほとんど
何も感じない。レオが相手だというのに、妙に冷静な気分だった。

「Perch? mi hai portata qua?（ど
うしてここに連れてきたんですか）」

「Hai perso i pensi. Ti ricordi
?（君は気絶した。覚えているか？）」

「S? . E perch? non mi hai porta
to a casa mia, non hai chiamat
o un'ambulanza, mammai hai port
ata qua?（はい。で、どうして家に連れて帰つてくれも
せず、救急車も呼ばないで、ここに連れてきたんですか？）」

普通は目の前で人が倒れたら救急車を呼ぶものだと思う。まあ、
今回に限っては呼んでもくれなくて助かつたが。気絶した原因は分か
つていいし、手術が延期になるのも避けたい。

「Devo tornare.（帰らなきや）」

ベッドから降りる。腕を掴まれ　　そうになつて、半ば無意識に
身を捩つてすり抜けた。靴はベッド脇に揃えて置いてあつた。

「Come? Non ci? piu nessun tren
o.（どうやって？　もう電車はない）」

そんなに遅くまで寝ていたか。だが、ヨーロッパの街の中心部は
小さい。電車が動かなくとも帰れないことはない。

「A piedi.（歩きます）」

「？ pericoloso . (危険だ) 」

「 Ciao? ? Non voglio stare qua . (

それで？ 私はここにいたくないんです）」

伸ばされた手を振り払った。感情は麻痺したように遠いが、レオに触れられそうになると脊髄反射のように体が引っ込む。壁にかかっていた自分のジャケットを羽織った。ポケットの財布などはそのままだ。良かった。

レオが大きく息を吐いた。

「 V a b e . Ti porto con la mia ma cchina . (分かった。車で送つていいく) 」

「 No , non ci ? un bisogno . (いえ、必要ありません) 」

「 Alt r imento non ti lascio usci re . (でなければ出て行かせない) 」

「 . . . Ti prego di guidare . (. . . 運転してください) 」

帰りたい。帰つてベッドでぐっすり眠りたかった。疲れることがあり過ぎた、主にレオのせいで。巧も大分引っ搔き回してくれたが。車の助手席に乗り込み、夜のパレルモの街を走った。石畳の上を車で走るのは、日本では中々ない経験だ。

レオは無言だった。言葉を重視するイタリア男にしてはらしくない。ちらりと横顔を窺つてみたが、走り慣れているであろう道なのに顔つきは険しかった。

何度もか分からぬ溜め息を吐く。

ふきは恋愛感情には鈍いほうかもしれない。だが劣情には人一倍敏感だった。場数だけは踏まされてきた。だからレオにされた程度のこと、騒ぎ立てるほどではないのだ。なのに。

イッポーリトと別れて数ヶ月も経っていない現状では、せっかく忘れていたのに、などという理屈も立てられない。

レオ。

ほとんど初めて、心ときめかせた男性だつた。2年以上前に淡い憧れは打ち砕かれたと思っていたのだが、それでも自分はこの男に何か期待するところがあつたらしい。最初から信頼していなければ、拒絶反応を起こすほどショックなど感じる必要はなかつたのに。相変わらず彼は無言だつた。唇をきゅっと引き結んで、何を考えているやらいないやら。

レオはふきに欲望を感じてゐるのだろう。

あんなことをするからには、何がいいのだろうと思つが、イッポーリトもふきに興味を持つたし、似たもの兄弟なのだろう。ふきは首から下はそこそこの形らしく、下半身でお近づきになりたがる人間は結構いた。たくさん相手もさせられた。だから欲望を見抜くのはふきには容易い。

そして、少なくともふきが実際に知る限りにおいて、欲望は決して敬意には繋がらない。世の普通のカップル、いわゆる『恋人』という関係は、相手を欲望の対象にしながら同時に敬意を抱くものらしいが、ふきにはそれが良く分からぬ。劣情とは蔑視だ。ふきは異性にときめきを覚えはしても、その相手と寝たいとは露ほども思わない。レオにだつて、かつこいいな、と女子高生のように浮き立つていた時も、ベッドを共にしたいとは思わなかつた。イッポーリトとも、蔑んでいたからこそ寝られた。

レオもそうだらう。憶測でしかないが、彼はふきに欲望を抱き、蔑んでいる。どちらが先かは鶏と卵だが、蔑んでいるのに欲望があるから距離を置けないで必要以上につつかかる、欲望があるからなおのこと相手をいやらしいと蔑む。この堂々巡りは、ふきはいやと言つほど経験してきた。勝手にやつてくれればいいものを、そのジレンマの輪の中にふきを巻き込むのだからいい迷惑だ。

それでも、レオを憎みきれないのは、こちらにまだ恋情があるからではないと信じたい。単に彼のお育ちがよろしくて、ほかの男達と違つて無体なことはしないというだけだらう。行動が概ね常識の範囲内に留まるようなのは、ふきが相手をしてきた男の中には

いなかつた。

再び、ふきはレオを見る。彼の口は何かもの言ひたげだ。

「Non ci ? bisogno di scusse . (謝罪
はいりません)」

どうせ、謝るのと思つてプライドが邪魔をしているとか、そんな
ところだろう。だからちょっととした意趣返しに、先手を打つてやつ
た。これで見当違ひだったらお笑い種だが。

レオがふきを見る。

「Ciao scordiammo . Non voglio pens
areci . (忘れましよう。考えたくないません)」

「... Se vuoi . (....君が望むなら)」

「Lo voglio . (望みます)」

もへ、厄介事はうんざりだった。

アパートの下で、車が止まる。ふきはドアを開けて降り立ち、ひ
どく無感動に礼を言つた。

「 Grazie mille . (どうもありがとうございます)」

我ながら、これほど感謝の念のこもつていらない感謝の言葉も珍し
かつた。ふきはそのまま踵を返す。

「Ciao , buona notte . (じゃあ、おやすみな
さい)」

「.....ブオナ・ノッテ」

背後でレオがどんな表情をしていたか、ふきは知らない。

ふきが階段を上つても、しばらくエンジンのかかる音は聞こえな
かつた。

ムシャクシャする。

といつても、自分が上機嫌であつたことは殆ど無い。アビガは苛々する内心をそのまま手に移し、ドアを強めにノックした。

「やあ、アビガ」

ドアの向こうから姿を現したのは巧だつた。彼とふき以外にアビガの知己はない。

セミダブルベッドのすぐ脇の、小さなサイドテーブルに向かい合つて座らされる。ミニバーから巧はスライドの缶を取り出し、アビガの前に置いた。

「どうぞ」

「どうも」

巧はダイエットコーラを飲んでいた。そういうことを気にするタイプにも見えないけど、と訝しむアビガの視線に気付くと、巧は笑つて、「うちの奥さん、ダイエットコーラのほうが好きなんだよ。それでいつもこれだから、何か慣れちゃって」と言つた。その笑顔にぞわつと全身が総毛だつた。巧は肩を竦める。

「OK、本題に入る」

「待つて。盗聴器とかは？」

「あつても心配要らないさ。シチリアマフィアの誰が日本語を理解すると思うんだい？」

「エンツォのママ」

「俺の祖母さんはマフィアのごじごじたに関わらせてもらえるほど大物じゃないさ。それに派閥が違つ、ここはスカローネやシーストラリが迂闊に手出し出来ない。マフィア内部のグループ間の紳士協定とやらで、スカローネもシーストラリもこの部屋には手出し無用だ」

信用出来る相手ではなかつたが、かといって実のところアビガに選択肢など無いのだった。

「……で？ 用件は？」

「ああ、そうそう。2年前のエンツォへの銃撃事件、あれは君の差し金だね？」

良い天氣だね、とでも言いつぶつた口調でさりと告げられた言葉に、アビガはスプライトを一口飲み下してから微笑んだ。

「何のこと？」

「説明が要る？ ならお望み通りに。」

エンツォが生家であるスカローネを、ましてそのバックにいるマフィアのシニストラリー族を毛嫌いしていることは周知の事実だ。だから彼はわざわざ妻の姓を名乗り、かなり事業が成功しているのにみかじめ料を払っていない。シニストラリとしては本来無視できない事態だが、シニストラリーとの関係を悪くしたくないエンツォの父親、ルツィアスコ・スカローネはエンツォに代わって息子の分まで金を支払っている。だからお世話をしてるわけだ。

ところが2年前、ある噂が立った。エンツォ・ナンニーニがみかじめ料を納めた。シニストラリではなく、ナポリのカモツラに「

カモツラはナポリのマフィア組織だ。シチリア・マフィアと交流が無いではないが基本的に別の組織で、建前上お互に不干渉が原則ではある。

「カモツラからすれば美味しい話だが、シチリア・マフィアにしてみれば面目丸つぶれだ。特にシニストラリは面子を潰されるわ他のシチリア・マフィアからは避難じうじうだわ、たまたものじやなかつただろうね。

勿論エンツォはそんなことはしていないし、シニストラリだつて情報の真偽を確認しなかつたわけじゃない。だけどエンツォは大学はナポリ東洋大学に通っていたし、そのとき親交のあつた人間の中には今やカモツラの幹部である者もいる。カモツラには確かにベラ・クリスタを名乗る団体から金が届いた。折からベラ・クリスタにシニストラリのボス、カポ・オッターヴィオ・シニストラリの一家が食事の予約を入れようとしてエンツォが言下に断つたりしたことも

あつて、状況証拠だけは揃つてしまつた。

そんなこんなでひと月経つて、カモツラから翌月分のみかじめ料の催促があり、当然何も知らないエンツォはそれを突っぱねる。これでカモツラが乗り込んでくると、シチリア・マフィアとしては迎え撃たないわけにはいかない。事実確認も不十分なまま手の早い連中がエンツォにバン！」

アビガは笑顔を崩さない。崩せない。上げた口角はそのまま固まつた。

「エンツォがカモツラにみかじめ料を支払つたなんてデマを流したのは君だろう？」

「何の証拠があつて？」

「辿るのは難しかつたよ。何せ2年前だ、俺がシチリアに来てもう数ヶ月は経つのに、一昨日になつてやつと分かつたんだからね。君は大したものだよ。

まず、シニストラリのほうから行こうか。俺は君よりずっとシニストラリに近い。多少の仕事もしたから、話を聞く分にはさして苦労しなかつた。その噂は、誰から聞いたのか？ 骨が折れる作業だつたけど虱潰しに訊いて回つた。噂をどうやって知つたかなんて、誰もまともに覚えちやいなかつたね。だけど、誰もが知つていた。実際は匿名のタレコミ電話があつたそうだ、それもオッターヴィオ・シニストラリのごく近しい側近の携帯電話に。それだけで、カポ・オッターヴィオもその側近も特に言いふらしたわけじゃない。当然だ、事実ならとんだ恥さらしだからね。だが、情報はあつさり漏れた。下つ端の構成員どころか、一般人までその噂を知つていた。何故、そこまで広く知れ渡つたのか？ そうしたい人間がいたんだ。作為が無ければ有り得ないスピードで話が広がつた。

「デマはね、アビガ。そこまで広範に行き渡るものじゃない。どれほどスキヤンダラスでも、眞実だつてすぐ立ち消えるのが噂というものだ。それが、事実無根にも拘らず、しかもおよそ有り得そうに無い話だつたのに、瞬く間に広まつた。誰かが意図的に広めたので

なくては出来ない芸当だ。

例えば、チエーンメールのよう回ってきたという話も聞いた。そのチエーンメールを辿つていくと、大体大元が数人に絞り込めたIPを調べてみると、どれもこれも公共のインターネット・ポイント。

ところが、イタリアって本當いい加減だね、Webメールのアカウントのログアウトもしない、履歴も消さないで次の利用者にPCを替わる人間が山のように居るんだから。今回の犯人は、そのイタリア的いい加減さを利用したらしい。

チエーンメールの大元の数人は、そんなメールを出した覚えは無いと言うし、受け取つた側も何だか文章がおかしいと感じていた。いつもの、彼らの知る友人の書き方ではない。それどころか、イタリア語の単語や文法が誤用だらけだつた。まるで外国人が書いたかのように。少なくともシチリア人の筆ではなかつた、とさ。

誰かが勝手に彼らのアカウントを使ってメール送信したんだ。防犯カメラの映像を残しているインターネットポイントは少なかつたけど、ゼロじやなかつた。映つてたよ、帽子を被つてサングラスを掛けた二十歳くらいの女。残念ながら画質も悪いし誰だか分かるもんじやなかつた。ああ、編集して君に見せることは簡単だつたけどね。当然だらう、君なんだから」

巧はそこまで喋つて、ダイエットコーラを口に含んだ。炭酸で喉が潤うとも思わないが、まあ彼の自由だ。それにアビガはそれどころではなかつた。

「カモツラのほうには、エンツオの大学時代の級友だつた幹部に電話があり、その幹部の会社に現金書留とワインが何本か贈られてきた。そのワインは全てベラ・クリスタで取り扱つているものだつたし、一部にはリストランテ・ベラ・クリスタのラベルが貼つてあつた。

その幹部は電話の数週間前にベラ・クリスタを訪れていたらしいね。エンツオは旧友をもてなしたが、話の流れで彼がカモツラの幹

部になつたと知ると早々に追い出したとか。だがその後電話があつた。ワインの銘柄も自分が好きなものばかりだつたし、いい気なつて受け入れたらしいよ。で、その電話を掛けたのは誰だつたか？シチリア訛りの若い男の声だつたそつだ。当時の従業員をざつと洗つてみて、やつと分かつた。ダミアーノ・ダレッシオ

「誰のこと？ そんな男に覚えは無いわ」

「とぼけるならそれでもいいさ。君が否定しようと肯定しようと、最終的にはエンツォが信じるかどうかだ」

アビガは内心舌打ちしたい気分だつた。この男ならたとえでつち上げでも、自分の話を人に信じさせることくらい難しくないのだろう。十分な証拠は無いとはいへ、全くの作り事ではないとなれば、エンツォを丸め込んでしまう可能性は十分に有り得る。

アビガは溜息を吐く。この男がシニストラリに通じていたのは誤算だつた。巧はただの平和ボケした日本人の若い男ではない。汚れ仕事を引き受けて何とも思わないくらいには、この男もアウトローだ。何よりその性根が想定外だった。

「良いわ。貴方が、私を脅迫する十分な材料を持つていると仮定しましよう。それで、何がお望み？」

「君の復讐に、俺も一枚噛ませて欲しい

「……何で」

「他人が苦しむのを見るのは快感だよ、そうじゃないかい？」

「断ると言つたら？」

「『他人』が君になるだけさ」

「……成程」

納得した。分かりたくないが分かつてしまつた。この男は誰でも良いのだ。きっとこの男は、ただ楽しみのためだけに世界中の人に苦しめて回るのだろう。その順番が後でも先でも大した違いはない。

ふき。レオ。イッポーリト。エンツォ。アビガ。

攻撃する相手は誰でも良いのだ。誰が一番楽しませてくれるか、

それしか考えていない。イッポーリトに対しては数時間殴る蹴るの暴行を加えただけで飽きたらしい。以前本人がそう言っていた。頭が空っぽの手合いは暴力でし支配出来ず、知的好奇心が満足しないと。彼の言つところの反吐が出そうな知的好奇心の対象が、今はエンツオなのだろう。それがアビガでも、巧には問題ない。こちらには大有利だが。

「具体的に、私にどうして欲しいわけ？」

「俺は君を手助けするつもりなんだよ、アビガ。誰かの協力があつたほうが事がスムーズにいくと思った時に頼つてくれればそれで良い。

エンツオの手術に関しては傍観を決め込むようだけど、その後のプランは既に考へてあるんだろう？ どうやつて彼を追い詰めるか。俺は金ならある、そして金があれば大抵の不可能は可能になる。

君の力になるよ、アビガ」

「協力の申し入れなら、もう少し友好的にして欲しかつたわね」

アビガは席を立つ。スプライトも飲み干したし、これ以上巧の話を聞くのも耐えられなかつた。

「3日に1回。アビガイッレ・スカローネ、エンツオに関して君からの連絡が欲しい。心配しなくてもメッセージは受け取つたらすぐに削除する。俺を味方につけるか敵に回すかの決断の期限は、まず今この瞬間から72時間後だ。連絡待つてるよ」

視界の端で巧がひらひらと手を振つている。憤懣やるかたない気分でアビガはホテルを後にした。

何て男！

腹が立つ。腹が立つ。腹が立つ。

エンツオ・スカローネへの復讐を諦めるわけにはいかない。そのためアビガは生まれ、そのためだけに生きてきたのだから。

あんな男に邪魔されるわけにはいかない。

見失うな。エンツオ・ナンニー。あの男を破滅させるために何が一番の方法か。

巧はアビガよりずつと悪知恵が働く。味方につければより効果的な復讐が叶うかもしない。

けれど、忌々しいことに、アビガの手に負える相手ではない。御せない。味方につけるにしろ敵に回すにしろ、これは大きな賭けだつた。

巧は何を考えている？ それが全く読めなくて、苛々する。

冷静になれない。どこかでガス抜きが必要だ。アビガは裏路地に入り、周りに人がいないのを確認すると街灯の足を思い切り蹴つた。

レオ・クランキ。

ふと思い出した。エンツォ・スカローネのお気に入りの秘書。エンツォは彼を後継者として育てるつもりなのだろう。

エンツォのお気に入りの、有望な若者。ベラ・クリスタの経営にも深い所まで関わっている。

アビガの口の端が上がった。

エンツォへの復讐は、自分の一生を賭けた壮大なプランだ。それを損なうような大掛かりな事は出来ない。けれども、気晴らし程度のほんのちょっとしたことなら。

レオ・クランキ。若く優秀で、傲慢なほど自信に溢れ、だがそれに相応しい実力はきちんと持ち合わせている。ターゲットには最適だ。

憂さ晴らしに付き合つてもううわ、ハンサムさん。

アビガはもう一度笑つて踵を返し、大通りに足を向けた。

アビガと巧は、じうするつもりなのだね。巧がアビガに会つと宣言してから2日。ふきは気が気がなかつた。ジエラテリアの業務も手に付かない程で、マリーナから小言を食らつた。

ベルナルディーノや他の同僚と、ハグもバー・チも出来るようになつたものの、相手が男性で不意打ちだとやはり体が強張る。ここ数日何故か頻繁にジエラテリアのほうに顔を出すようになつたレオに対しては、未だに体が言う事を聞かなかつた。近寄られるだけで硬直し、僅かでも触れられれば撥ねるように飛び退る。

何故か知らないがエンツォの娘、ファニア・ナンニーもジエラテリアに顔を出すようになった。以前のふきならファニアを見る度に複雑な思いに囚われたものだが、ここ数日はそれどころではなかつた。ファニアよりアビガと巧のほうが余程脅威だ。

結局叱り飛ばされながら殆ど上の空で業務を終え、何かもの言いたげな様子のレオをスルーしてさつさと帰路につき、家に帰るとガニアとのお喋りもそこそこに自室に引っ込んだ。

しばらく逡巡して、ノートパソコンでスカイプを立ち上げる。画面に真っ黒のウインドウと、その左下にふきの顔が映つた小さなウインドウが現れた。

ふきがマウスとキーボードを少し操作すると、真っ黒だったウインドウは入れ替わり、殆ど画面一杯に見知つた顔が現れた。

「……アビガ」

『 チヤオ、ふき。面と向かつて話すのは久しぶりね?』
液晶の向こうで魔女が笑つた。

「……何をするつもりなの?」

『 なあにが?』

「巧さんと。何の用だったの、あの人」

『エンツォ・ナンニーニへの復讐に一枚噛ませる。何を考えてるか
なんて知らないわ』

「あの人と組むの?」

『あんただつて分かつてるくせに。あいつに逆らえると思う?』

ふきは溜め息をつく。巧は人を利用することに慣れている。数ヶ月の付き合いでしかないが、それは良く分かった。そして巧は恐ろしく頭が良い。ふきやアビガなどよりずっと。イッポーリトを病院送りにしたあの腕前から、腕つ節もそこそこ。金もあれば度胸もある。マフィアのコネもある。真っ向から対立して勝てる相手ではなかつた。

「弱みを握られたのなら、もう終わりにしよう。お父さんをどれだけ憎んでいても、復讐は2年前の銃撃戦でもう十分でしょう。お父さんは重傷を負つて、今でも身体の機能に障害がある」

『その障害も、あんたが取り除いてやるんでしょう。それじゃ復讐の意味がないわ。マッチポンプじゃないの』

「……アビガ」

『それにね。私の行動は結局、あんたが望んだことなのよ』

「……」

『移植手術に私が手出し出来ないよう、あんたが本氣で阻止しようとすれば私は何も出来ない。私の行動は、すべてあんたが許したからよ。2年前の銃撃戦だつて』

「違う! 私はお父さんを傷つけたかったわけじゃない!」

『そうでしょうねとも。私だって、まさかエンツォ・ナンニーニ本人が狙われるなんて思つてもみなかつたわ。ただよつと奴の商売が打撃を受ければいいと思ってただけだもの。でもね、それを止めきれなかつたのはあんたよ、ふき』

「……」

その通りだ。アビガが何か良からぬことを企んでいると知つて、止められなかつたのはふきだ。だから、今回の移植手術を了承した。

善意などではない。愛情を期待してのことでもない。罪滅ぼしだ。

感謝される謂れは何もない。だから、名前は絶対に明かさない。

『止められるものなら止めてみなさい。あんたが本気になれば、私は動けない。だって、私はあんたのせいで生まれたんだから。ねえ、オカアサン?』

「……やめて」

『そうね。氣色悪かつたわ。實際はあんた、出産経験もないし。でもね、あんたが望んだから、私は生まれた。阻止することも出来たのに、あんたは私が生を享けることを選んだ。

気に入らないなら、殺してみなさい。あんたが望んで私を生まれさせたように、今度は望んで消せばいい』

「…………」

ぶつりと、液晶がブラックアウトした。

溜め息を数えたら何度目だろう。確かに、アビガの命が芽生えた時、それに気づいた周りは皆中絶を勧めた。ふきだけがノーと言つた。まだ幼い心から出た意思は、善惡にも損得にも囚われておらず、ただ純粹にそう欲したからだつた。

望まれないで生まれた彼女は、あらゆる意味で公的な存在ではなかつた。戸籍もない。友人もいない。ただ他人の目から隠されて、いるのかいないのか分からぬような状況で生きてきた。

育てたのはふきだつた。ぎりぎりでも栄養を与え続け、彼女を成長させた。積極的に守ろうとしたわけではない。アビガの扶養義務はふきにはない。何度も見捨てようとして、土壇場でそれが出来ず、結局いつも最後の一線を越える前に引き返して彼女の命を繫いだ。自分の洗礼名をもじつて名前を与えたのは、彼女が生まれてから大分経つてからの事だ。

アビガ。

たつた三音節の名前をつけてから、彼女は一人歩きし始めた。最初から、彼女の興味はイタリアにあった。

生まれながらにして表の世界に出る事が叶わない闇つ子。ふきよ

りもずっと早くイタリアに渡った彼女は、シチリアの暗黒街とは相性が良かつたのかもしれない。その彼女がどうしてスカラーネを名乗るようになったのかは覚えていない。だがアビガは、彼女の人格が完成された時から、エンツオ・ナンニーニへの憎悪で凝り固まっていた。

理由は訊いても要領を得ない。酷く個人的な事で、しかもそんなことでと首を傾げざるを得ないほど些細なことだ。少なくとも命を狙うまでのことではない、とふきは思う。けれどもアビガは、生まれも育ちも所属も何もかもが不安定だったからか、エンツオへの憎しみをアイデンティティの中に取り込んでしまい、それに強くしがみついた。今更それは変えられない。あとはもう、坂道を転がるよう加速していく。

手術まではエンツオに手を出さない。アビガはそう言った。結局のところ、力関係ではまだぎりぎりふきのほうが上であるらしい。けれども、彼女は何か企んでいる。銃撃戦のような大々的なことではなく、ほんのちょっとした余興のようなものではあるのだろう。だが、それでもエンツオへの悪意であれば、ふきはもう見過ごすわけにはいかなかつた。どんな些細なことであつても。

「レオに、何をするつもりなの？ アビガ……」

眩きは窓ガラスを通り抜けてパレルモの夜に消えた。

ふきがエンツオ・ナンニーニから呼び出しを受けたのは、それから1週間後のことだつた。

手術まで10日を切ったある日、ベラ・クリスタ社内にちょっとしたトラブルが持ち上がり、無視出来ないレベルまで広がった。エンツォは今静養中の身だし、通常であれば代理人に任せることだが、渦中にいるのがエンツォの秘蔵つ子の秘書とあれば話は別だ。入院は1日2日で終わるようなものではないだろうから、手術の前に力タを付けておきたかった。

事務所に呼び出しをかけた相手は、2人ともエンツォが来る前にドアの前で待っていた。レオのほうは良く知っているが、もう1人のほうはちゃんと正面から向き合ったのは初めてだ。日本人の、若い女。湧き上がる嫌悪感を理性でどうにか押さえ込む。四半世紀近く前の、東の島国で起こったことは彼女には関係ない。たとえ顔立ちや背格好や年齢があの時のどんでもなく最悪な女と似通っていても、あんな女と一緒にして良い筈が無い。デートの度に一銭も出さず、礼のひとつも無く、距離を置こうとしたら切れ、暴言を吐き、暴力を振るい、逆恨みのあげくストーキング行為に及び、果てはエンツオの兄にまで多大なる迷惑をかけてくれた女と、目の前の女性は違う。

感情に理性の蓋をする。2人を部屋に通し、椅子を勧め、自分もデスクに腰掛けた。

「Signorina Fukie Tono? (トオノ・フキさん?)」

「S? (はい)」

トラブルの渦中にいる女性だった。書類を読んだが、3年前からベラ・クリスタで働いているらしい。何度か見たことはあるし、日本人的なスタッフがいるということくらい知っていたが、フルネームまで知ったのは今回の騒ぎがあつてからだった。通常アルバイトスタッフは入れ替わりが激しいのであまり顔も名前も覚えない。現場

の細かい人事はエンツォの手を離れていく。

緊張しているような彼女をリラックスさせるための他愛無い話題を振る。はにかむような笑顔が出るのを待つて、エンツォは本題に入った。

「Conosci che sul conto di Leo
e te corrono dicerie un po... sc
andaloso? (レオと君に関して、少々スキヤンダラスな
噂が流れているのは知っているだろうか?)」

レオは眉間に皺を寄せて頷いたが、フキは頭の周りに疑問符を飛ばした。台風の日というが、『当人ほど知らない』というのは現実にまあることらしい。

「Dicerie? (噂?)」

「S?... (そうだ)」

「Quale? (どんな?)」

言い難い内容なのだが、仕方ない。エンツォはひとつ深呼吸してから、感情を乗せずじく簡潔に言った。

「Si dice che Leo ha abusato di
te. (レオが君に乱暴したと)」

「.....アブザート?」

どうやらイタリア語の単語が分からなかつたらしい。エンツォは溜め息を喉の奥で押し殺して、日本語に切り替えた。

「つまり、だ。レオが君をレイプしたという噂がベラ・クリスタ内で流れているんだ」

「レレレレ.....!」

歌つているのではない、と思つ。レレレレといつよりはソラシラ
といつような音階だつた。

「念の為に君にも確認するが、そんな事実は」

「ありません! あるわけないです! とんでもないです!」

内心でほつとする。エンツォは勿論レオを信頼しているが、ビジネスの世界でトラブルがあると人情だけでは太刀打ち出来ない。

「そうか、良かった。しかし完全なるテーマとはい、かなり広まっていて、このままでは業務に支障をきたしかねない。君も何か気づかなかつたか？」

「えーと……」

「そういえば皆の態度が何かおかしかつたようなそういうものでないような、と噂の当事者は何とも頼りない返答だつた。

「噂を一刻も早く解消して業務に差し障りが無いようにしたいのだが、ここまで広まつたのには何か原因があるのではないかと思つてね。君からも話を聞きたくて、今日ここに来てもらつた。何か心当たりはあるだろうか？」

フキがちらりと不安げにレオを見る。

「レオからも一応の話は聞いている。だが、一方だけの話を鵜呑みにするわけにもいかないだろ。レオに聞かれたくないなら、このまま日本語で話せばいい」

「……はい」

フキはもう一度窺うようにレオを見て、それからとつとつと語り始めた。

「あの……そもそも私、イタリアの人人がやるようなスキンシップが苦手……というか、慣れてなくて、いきなりだとどうしていいかわからなくなるんです。ハグとかバー・チとか、今はだいぶ慣れましたけど、それでも自分から積極的にやるのは何か抵抗があつて」

成程、と思う。日本人の母を持ち、日本で暮らしていたこともあるエンツォには、納得は出来なくとも理解は出来た。肌を触れ合わせることが滅多に無い日本の文化で育つた身としては気恥ずかしいのだろう。イタリア人の理解を得るのは難しい感覚だ。

「あの、慣れてきたつて言つても、やっぱり個人差があつて。大丈夫な人と、そうでない人と。レ……クランキさんはもちろんいい人なんですが、なんていうかその、目の前にすると緊張しちゃって……それで、その、クランキさんに対するは特に、スキンシップす

るのが苦手で。なので挨拶していくさつてもとつさに、つ、突き飛ばしてしまったりとか、過剰な反応をしてしまうことが多かつたんじゃないかと……思い、ます。今まではクランキさんと接する機会もあんまりなかつたんですねけど、ここ何週間かは毎日のように顔を会わせてます。それで、クランキさんが挨拶していくさつたときに、ええと……スマートな対応が出来なくて、ひょっとしたらその態度が……みんなの誤解を招いてしまつたかと……

「 そうか」

「す、すみません！」

フキは恐縮したよつに縮こまつた。それを横目で見ながら、エンツオは考える。

要はカルチャー・ショックだ。多少オーバーな反応をしてしまつた彼女の様子を見て、他の従業員達が早合点したと、そういうふうだらう。

彼女の話が真実であれば、だが。

?を言つてゐる、という感じではない。だが、真実をそのまま話してゐるのではなく、考えながら喋つてゐるよつに聞こえた。都合の悪いところは伏せ、言つてもいい内容だけを選び、さらに当たり障りの無い表現を選んで言葉にする。まるでレオを庇つてゐるかのようだつた。

だが、たとえこちらにとつて都合が悪い内容でも、虚言よりは眞実のほうが良い。欺瞞は潤滑油にはならない。むしろ歯車をひとつふたつと錆びさせていくだけだ。

レオを信じたい。何といつても可愛い愛弟子だ。有能な後継者候補を失いたくはない。だからこそ、聞きたいことだけを信じるのでなく、眞実をはつきりさせておく必要がある。

「 本当に？」

「え？」

「私の前だからと言葉を選ばなくとも良い。レオは何か君に失礼をしなかつたか？」

「い、いえ。そんなまさか。失礼をしたのは私のほうで
「レオは君にキスをしたと言つていたが」
完熟トマト。

日本語では瞬間湯沸かし器とか言つたか？ 少し違つよつた気もするが、まあそれは脇に置いておく。大した事ではない。フキは見事に真っ赤になつた。日本語が分からぬレオは訝しげに彼女を見遣る。

「あ、あの、ああああああああ」

「事実か？」

「あの、その、……、…………はい」

「それが君にはショックだつた？」

「…………驚きました」

今でさえこの様子なら、実際事が起つた時の反応たるや、どんなものだつたか。誤解を招いてもおかしくはなさそうだつた。しかし、多少腑に落ちない点もある。

「しかし、君は男性との付き合ひがこれまで無かつたわけではないのだろう？ 失礼ながら、多少の話は聞かせてもらつた。そうすると、レオに対する反応はあまりに……何と言つたか……初心過ぎると思つたが。不躾な言い方になつて申し訳ない」

「いえ。…………その…………申し訳ないのですが、私は、クランキさんが苦手なんです」

「差し支えなければ、理由を聞いても？」

「基本的には性格的なことで……ただ、じつて挙げるなら、クランキさんの「家族と少しトラブルがありまして」

「家族？」

「弟さんです。それで、正直申し上げるとあまり……関わりたくないくて」

「ああ、成程。彼か」

レオの弟、イッポーリトは、前々からクランキ家の悩みの種だつた。エンツォもレオが弟のことで頭を悩ませているのを見たことが

あり、何度か相談にも乗った。

レオには気の毒だが、イッポーリトは碌な人間ではない。縁を切るなりしたほうが良いと思うのだが、流石に他人の家族事情に首を突っ込むほどエンツォは遠慮知らずでは無かった。

イッポーリトとフキは同年代。何かしら関わりがあつて、それでフキは彼を嫌がるようになつたのだろう。納得するのは容易だつた。「だけど、私情を仕事に持ち込む気はなかつたんです。まさかトラブルを起こしてしまって、本当に申しわけありません」

「いや　君に落ち度は無い、気にしないでくれ」

さて、どうするか。事情は分かつたが問題は何ひとつ解決されていない。

「しかし、噂をそのままにもしておけない。人の噂も七十五日と言うが、正直そんな悠長に構えていられる余裕は無いんだ。とりわけ今月は私が私用で抜けて采配を揮えない。君も再来週は休暇を取っているようだが」

「はい」

「それまでに問題を解決しておかないと、どんな混乱を招くか分からぬ」

「そこでだ。明日からしばらく、レオと意図的に仲良くしてもらえないだろうか」

「え……？」

「にこやかに挨拶したり、業務を離れた会話をしたり、スキンシップをしたり。友人としての範囲内で構わない。だが、レオが君に犯罪まがいのことをして、君はレオを拒絶し怯えているというイメージを払拭する程度には親しい振りをして欲しい」

「……！」

「無理だろうか？」

「無理っていうか……あの、ただでさえ私、クランキさんへの接し方がわからないんです。共通の話題もないし、何話していいかさっぱりで……あたりさわりのない態度が精一杯で、親しく、なんてど

うやつたらいいのか……」

「勿論、性格的に合ひ合わないもあるだらうから、無理強いは出来ない。だが、君の協力が得られれば事はスムーズに運ぶ。どう違う、私情を仕事に持ち込む気はないと言つてくれたその気持ちに甘えさせてくれないだらうか。無論レオのほうからも歩み寄らせるし、君を不快にさせるような言動は慎ませる。

お願い出来ないだらうか？　いや、これは業務命令ではないし、無理にとは言わないが」

「……」

フキが黙り込んで考へてゐる間に、同じ内容をレオにイタリア語で話す。レオは目を剥き、「エンツォ！」と叫んだ。だがそれに続けて何かを言つ前に、フキが口を開いた。

「……わかりました。努力はしてみます」

エンツォは笑つた。

「ありがとう」

立ち上がり、フキを抱き締める。彼女は一瞬身を強張らせたが、すぐに控えめなハグを返してきた。

フキの焦げ茶の瞳が潤んでいたのは、窓から射し込むパレルモの陽光の悪戯だつたのか、それとも

用事があるからとエンツォ・ナシーニのオフィスをレオと仲良く追い出され、ふきが色々と混乱していると、レオから茶、ならぬコーヒーに誘われた。余談ではあるがカッフェの国イタリアでは日本語で「お茶する」と云つようなところを「コーヒーする」のよつな言い回しをする。

「M a d e v o t o r n a r e a l m i o l a v o r o .

（でも、業務に戻らなくちゃ）」

「L o c o n t o p e r u n l a v o r o . V o g l i o p a r l a r e c o n t e . （仕事のうちに入れる。君と話がしたい）」

仕事だと言わると下つ端のふきは断れない。割と大きなバールに入つて、テラス席の一番端っこに陣取る。他に客も余りいなかつたし、車通りの激しい大通りに面した場所だったので、確かに聞き耳を立てられる心配はなさそうだった。

レオはエスプレッソ、ふきはマックィアートを注文する。レオは眉間に皺を寄せたまま、何やら言おうとしては口を開じるのを何度も繰り返した。どうでもいいが、美形というのは仮頂面でも格好良い。羨ましい。ふきも若い娘であるから化粧して笑顔のひとつも作れば自己評価でもそこそこ可愛いが、スッピンでむすつとしているはつきりブスである。何もせずに険しい表情でも美しいというのは、相当地がよろしいということだ。実に羨ましい。これだから憎みきれないんだよなあ、内面だつてまともな部類だし。

「M i p a r e c h e a t e n o n p i a c q u a i o . （君は僕が好きではないだろう）」

「ゲホツ、ゴホツ！」

砂糖をたっぷり入れたマックィアートに口をつけた瞬間に言われて、ふきはむせた。喉に砂糖の粒々が引っかかる。レオはウェイターに

水を持つて来させてくれた。

「何ですか、いきなり」

「？」

「あ

いけないいけない。エンツォと話した影響か、日本語モードに戻ってしまった。頭を切り替える。水を一口飲み、レオに礼を言つてから、居住まいを正す。

「A me non sei molto simpatico, ma non ti odio.（あまり感じはよくありませんよ）」

そう言えばレオは軽く目を見張る。実際ふきはレオを毛嫌いはしていない。レオを憎悪するようだつたら、ふきには憎まなければならぬ人間が多すぎる。そんな疲れるような真似はとうの昔に諦めた。母や義父に比べればイッポーリトのことだつてどうでもいい。

レオはスーツのポケットから携帯を取り出し、ふきに差し出した。見ていいらしいので、SMSをいくつか読む。

酷かつた。

まあ誹謗中傷の嵐である。どうやら徳志と一緒にリストランテ・ベラ・クリスタで食事した夜、レオがふきに乱暴したことになつているようで、店で何をやつているんだとか何だとか。しかもその翌日ジエラテリアで倒れたふきをレオが連れ去つてまたもや無体なことをしてことになつており、ジエラテリアのメンバーからのバッシングが酷かつた。

「あー……あらら」

ふきの泣き腫らした顔とレオに対しての異様な怯えようを目にした人間からは、そう取られかねない状況であったことを今更理解した。それが前夜の追いかけつこの目撃証言とも合わされば尚更。

こう言つては何だが、支配人レベルならともかく、ふきも含めて従業員はそこまで教養高い人間は多くない。ましてイタリアの国民性なのか自分の感情に正直な人間が多い。根拠もない噂を頭から信

じ込んでしまうようなタイプが、やや多い職場ではあった。

しかしそれにしても内容が酷い。SMSを読む限り、ふきのほうが名誉毀損で訴えてもいいようなことになっているのだが。あんなことやらそんなことやらエロいを通り越してグロいようなことやら、実際させていたら一も二もなく警察に駆け込んでいるようなショックングでスキャンダラスな内容。しかも上手く事実と組み合わされているので信憑性があるのがまた手の込んだいる。

誰かが作り込んだ嘘だ。ただの伝言ゲームでこれほどの悪意ある内容にはならないだろうし、なったとしてもここまで信憑性が保たれているわけがない。しかし誰がこんな噂を作つて流した？ 実際に何が起こったかよく知つている人間でなくては出来ない。その時点で大分容疑者は絞られるし、それに加えて動機のある人間はアビガ。これか……

ふきはテーブルに突っ伏した。何というレベルの低い嫌がらせを。エンツォに手は出せないと言つていたが、成程レオにトラブルを引き起こせば多少はエンツォを煩わせることが出来る。憂さ晴らしかと言つっていたのはこれのことか。

巧さんの影響受けてない？ アビガ、何かどんどん陰険になつてるような気が……。

「Veramente mi sento depresso.
(実のところ、参つている)」

「Mi dispiace . . . (お気の毒です……)」

というか、アビガが原因なら他人事ではない。ふきは一気に申し訳ない気分になつた。

「フキ」

「はい？」

「Potresti diventare la mia ragazza? (僕と付き合つてくれないか)」

「…………はあああああ！？」

周りの視線が集中することも構わずふきは大声を上げた。

今、何が、どうやって、どうなって、こうなった？

「P r e c i s a m e n t e , t i v o g l i o f i n g e
r e d i e s s e r e l a m i a f i d a n z a t a .
(正確には、僕の恋人の振りをしてもらいたいんだ)」

つまり、レオの言い分をまとめるところだつた。エンツォの言うとおり店で友人のように振る舞うにしても、噂が立つた後だけにセクシャルな関係を想像されてしまうのは避けられない。何もなかつたと表面上は取り繕えても、心から納得させるのは難しいだろう。実際、何もなかつたわけでもない。噂のような過激なことはなかつたが。もやもやを抱えさせたままにしておくと、やはり業務に支障が出るし、レオのイメージも回復できない。

なかつたことを証明するのは難しい。であれば、いつそ平和裏にあつたことにしたほうがいい。なので、まあ少しばかりスキンシップが激しいカッブルのちょっととした行き違いということにして取り繕つたほうがいいだろう、ということだった。
まじですか？

筋書きはこうだ。レオとふきは騒ぎの前から付き合つていた。お互い愛情も激しいので、業務に支障をきたさないよう仕事場には持ち込まないようにしていた。ところがちょっととした喧嘩があつて冷戦状態になり、仕事以外では顔も合わせなくなり、溽れを切らしてレオがそれまでの不文律を破つて仕事場で話し合いをしようとした（そこ以外では捕まえられなかつたので、場所を選んでいる余裕はなかつた）。が、交渉は決裂して翌日まで持ち越され、次の晩にやつと仲直りがかなつて元通り仕事では関係ない風を装おうとしたが、ふきは加減が分からず拒絶するような態度になつてしまつた、と。

私、そんな直情的な人間に見えるんだろうか。

本題から微妙にずれたところが気になつた。キャラ的にその設定はどうなの。というか、ジョラテリア・ベラ・クリスタにはふきが

イッポーリトと付き合っていたことを知らない人間がいないでもないのに、その話は。兄弟そろつて、これでは本当に何兄弟下世話な方向に行つてしまつた思考を、ふきはぱたぱたと頭を振つて追い出す。

「Ma Leo, non hai la ragazza?」（
でもレオ、恋人はいなんですか？）

「Nessun problema. Tu?」（問題ない。君は
?）

「冗談じゃない。男はもうじりじりだ、一生いらない。

思考がそのまま顔に出でいたらしく、レオはふきが何も言わないうちから分かつたと言つた。

「Prendi una settimana di vacanza.」（君は1週間休暇を取るだらう）

確かに再来週、手術のために仕事を休む。勿論理由は会社には言つていなかつたが、休暇申請は早めに出しておいた。それまでに出来るだけベタベタして、噂を打ち消したいとのことだつた。筋書きを触れ回る必要はないし、聞かれたら匂わす程度でいい。ほとぼりが冷めたら別れたことにすればいい。

気が進まない。そもそもレオのことが苦手なのは変わらないのだ。しかし、アビガのやつたことならふきが他人事だと切り捨てるわけにもいかない。

「OK……」

不承不承、ふきは頷いた。

ただし、そちらもちゃんとそれらしく振る舞えと、レオに釘をさすことは忘れなかつた。

今日の分は出勤扱いにしておくからとレオに言われ、アパートメントに帰ったふきは、そのまま浴室のベッドに倒れ込んだ。

厄介なことになつたものだ。どうして承知してしまつたのだろう。ここ数日のレオの態度を考へても、ふきが協力してやる筋合はずなかつた。事実無根の噂を流されたことには同情するが、その火消しまでふきが引き受けたやる義理はないはずだつた。むしろ、ザマーミロ少しさはいわれもなく非難される身になつてみやがれ、くらいのことは言つてもいいはずなのだが

溜め息を吐かない日がないよつた気がする。それもこれも全部レオと巧とアビガと母と義父と世界と自分のせいだと考えて顔を枕に沈める。結局、逃げ場はどこにもない。

レオを憎みきれないのも、アビガを止めきれないのも、すべてふきの弱さだ。引き受けたと決めてしまつたことは仕方がない。

レオはすごい。恵まれすぎている。見た目もよく、稼ぎもよく、人望もある。邪険にしていたふきのよつた相手からさえ、いざとなれば協力を得られる。ふきは、どれほど尽くしても尽くしても、信頼のひとつも得ることが出来なかつたのに。

身を切られるほど苦しくて、けれどもその切つ先をレオのほうに向けることが出来ないのもふきだつた。結局いつも、自分が傷つくほうばかりを選んでいる気がする。気がつけば選択肢はそれ以外になくなつていて、泣きたくなる。

お父さん。

それでも、今回のこととはエンツォのためだ。誠心誠意頭を下げてまで頼まれて、引き受ければ笑顔で抱きしめてくれたりして、それでふきがどうやって断れる？

レオに対する感情など、好悪まとめて封じ込めてしまえばいい。真っ白に塗りつぶして、その上に偽りを描くのだ。難しいことでは

ない。

お父さん、やるから。私、ちゃんとやりますから。

エンツォのためだ。そうでなくてどうして出来るものか。

ふきは起き上がり、サイドテーブルから日記帳を取り出した。気持ちを落ち着けるために今日の出来事を書くつもりだったが、手に取ったのは去年の日記帳だった。戾そうとしてふと気まぐれに思い留まり、ぱりぱらとめぐり出す。

去年の初めといえば、エンツォがリハビリを経て仕事に復帰したもの、腎損傷を負つたために透析が必要であるということを、スタッフに広く通知された時だった。それまでは一般的の従業員はエンツォの容態について詳しくは知らされていなかつたが、復帰したのに勤務時間は短くいつまでも病院に通っていることを不思議に思う声が強くなつたため、ミーティングで伝えられたのだつた。

クリスマス休暇明けの1月のことだった。

venerdì? 7 gennaio

やつと通常運転。私の負担も減つた。さすがカトリックの国イタリア、クリスマスシーズンには誰も働かないこと働くないこと。おかげでほとんど私ひとりで店を回していくときもあって大変！

でも、一番長く休暇を取つていた人ももう仕事に出てきて、今日はすごく楽だつた。ふつう冬のジェラテリアなんてヒマなもんよね。

それで、お父さんのことについて発表があつた。めでたく回復したけど、内臓がひどく痛めつけられてて、週に何回か病院通いをしなきやいけないらしい。それでも歩き回れるほどになつたのを喜ぶべきなんだろうナビ、つらい。

そんな調子で以前みたいにフルタイムでは働けないことが確定したから、人事を改めて組みなおすつて。少し混乱があるかもしけないけど、って話だった。でもまあ、私みたいな下っ端は関係ないよね。

どうかお父さんが無理しないで、元気です♪せますように。

lunedì 10 gennaio

たしかに少し上があわただしい。

ジエラテリア・ベラ・クリスターの総支配人だつたフランカは、結局経営のほうをやることになつたらしくて、ジエラテリアにはもうあんまり顔を出せないだろうつてことだつた。

代理で切り盛りしてたレオ（名前で呼べつていわれた）も、いつまでもジエラテリアばっかりやるわけにいかないからつて新しい店長に引継ぎしてた。

スタッフもけつこう変わつたし、仕事を教える側になつちゃつて私もいろいろ大変。

lunedì 17 gennaio

久しぶりにレオを見かけた。ジエラテリアの業務をやめてからあんまり見かけなかつたけど。

街中で、ファニアさん　お父さんの娘さんと腕組んで歩いてた。ファニアさんは確か16歳、高校生。レオは今23歳。いいのかな……？

martedì 1 febbraio

2月。ファニアさんが友達連れてジョラテリアに来た。寒いのにみんなグランデサイズを頼んで、女子高生って元気。

なんだけどお支払いでもめちゃって。オーナーの娘なんだから払わなくていいでしょって言られて、どうしていいかわからなかつた。お父さんの家の教育方針なんて知らないし。個人的には、けじめとしてお金払つたほうがいいと思うけど。家で多めにお小遣い渡しどくなり何なりとしてさ。

店長に応対代わつてもらつたけど、どうしたらいいんだろう。

lunedì 14 febbraio

バレンタイン。

去年から何つつづつも進歩してない……

チョコとバラの花一本と無記名のカード送りつけたのは私です。かえすがえすも迷惑なことしてごめんなさい、お父さん。これだからレオにストーカーなんて呼ばれるんだろうなあ……

今日は早上がりだつたんでも夕方街をぶらついてたら、バーでレオとファニアさんが一緒にカフェ飲んでるのを見かけた。

今日は特別にハートのラテアートをやるとか何とか外の看板に書いてあって、ずいぶん繁盛してた。

ちょうど花売りの子が居合わせて、レオがバラの花買つてファニアさんにプレゼントするところに通りかかつてしまつた。イタリア男つてやっぱリロマンチック。しかも様になる。通りかかつた花売り呼び止めて買つてそのままプレゼントとか。しかもキザつたらしくないのは何でだろう。ぱっちり決まってた。ファニアさんも目をハートにしてたような。

あの2人、つきあつてるのかな？ フニアさんはけつこうレオ

のことが好きみたいだけど、年上のからこいい男性にあこがれてるだけのような気もするし。レオにいたっては気持ちがあるのかお父さんの娘だからなのか、いまいち不明。日本的な感覚では手を出したら犯罪だし。

ま、他人の詮索してもいいことないからやめよ。さすがにバレンタインくらいは私も恋バナしてみたくなるのかな？ ガイアは付き合つてると相手とデートらしいし、今夜は寂しい。

mercoledì 16 febbraio

二十歳！ ハ・タ・チ！

自由！

これでやつと、日本でも成人。ほっとした。もう保護者なんていらない。

お母さんが派出所するまであと半年もない。だけど、もう関係ないんだ。もう、本当に、解放されたんだ。

お母さんを必要とする歳じゃなくなつた。正式に。

それが何よりうれしい。ケーキもプレゼントもないけど、今夜は祝う！

loved? 17 febbraio

今日オフでよかつた。

一日酔いで何もできなかつた……

あー、気持ち悪い……

夕方、街でファニアさんとレオを見かけた。

道端でファニアさんがわんわん泣いてて、レオがそれを慰めてたんだけ。ずいぶん人目を引いてたなあ。

何があつたんだろ？あの2人の間に何かあつたとかじやなく、ファニアさんに何か落ち込むことがあつてレオに泣きついたって感じだったけど。

mercoledì 9 marzo

お父さんの誕生日。やっぱり事件の後遺症のせいか、今年はパーティーもやらないらしい。去年はベラ・クリスタ貸しきつて盛大にお祝いしてたのに。

いちおづ、またカードだけは送った。名前は書けなかつたけど……

venerdì 18 marzo

このところ、よくレオとファニアさんのコンビを見かける。街でもお店でも。

お店にレオをたずねてぐることが増えた。別にもうレオはジエラテリアにいつでもいるつてわけじゃなくて、というかあんまり顔を出さないんだけど。でもリストランテや菓子店のほうにも行つてるらしいし、しらみつぶしにいそうな所回つてるみたい。

彼女、このじろ表情が暗い。ほんと、何があつたんだろ。レオは彼女の相談に乗つてあげてるみたいだった。

ふきはそこから先のページを読み飛ばす。

去年の初夏にはイッポーリトがふきの人生に登場して、どこからか手に入れた映像をネタにふきに関係を強要した。その時の絶望が鬱々と書き込まれていて、とても読み返したいものではなかつた。高校生の頃におさまつたはずのリストカットへの欲求が再発したのもこの頃のことだ、日記帳にはところどころ黒い染みが残つている。すっぱりとカッターで左手首を切つてから、叫ぶに叫べない悲鳴を日記に書き殴る日々が続いていた。感覚のすべてを麻痺させ、諦めとともに平静を取り戻したのは秋になつてからだつた。

lunedì 3 ottobre

終わりが見えない。

毎週、イッポーリトの氣まぐれで呼び出されて、相手をさせられて、レオには冷たい目で見られる。私が弟をたぶらかしたとしても思つていいみたい。

レオのかん違いにはもう慣れただけど、今日は別人の誤解を招いたみたいだ。

ファニアさん。

半年前に比べるとだいぶ落ち着きを取り戻したみたいだけど、あいかわらずレオにつきまとつてゐるといつうか、彼のまわりによく出没する。

レオに呼び出されて、イッポーリトとのことで話をしていたところより一方的に文句を言わせてたら、ファニアさんが現れてレ

才に抱きついて、一瞬こっちをすごい形相でにらんだ。そのまま強引にレオを引きずつていってくれた。

助かった。ありがとうファニアさん。

mercoledì 5 ottobre

ファニアさんが夕方ジエラテリアに来て、私に話があるって。おとといレオと何を話してたのかと聞かれた。イッポーリトのこじだよ。

私とイッポーリトが彼氏彼女（本当は違う、ぜったいちがう）だと知つたらほっとしたみたいだった。

わざわざ何でそんなこと聞きに来たんだろう。

あれ？ これもしかして、まずいんじやない？

鈍感なことに、今日記を読み返してまるまで気づかなかつた。どうか、去年は自分のことで手一杯で他人の色恋沙汰までとても気にしていられなかつた。

しかし今思えば、明らかに、ファニアはレオに好意を持っている。レオもファニアには常に優しく接していた。振り返つてみれば思い当たる節はいくつもあるし、男女の関係にあるとしても全く驚かない。

うわーうわー。どうすんの、恋人役とか引き受けちゃつて。

これ、またトラブルになるんじゃ……？

嫌な予感がする。そして、ふきの嫌な予感というのは大概外れる、予想よりさらに悪い方向へ。

どひしょく。

あまり考えたくなかった。それでなくとも今日は色々と感情的に振り回される日だった。

ファニアの「」とはどりあえず棚上げして、今日の日記帳をつけたらシャワーを浴びて寝る。そう決心するとふきは去年の日記帳をサイドテーブルに突っ込み、今年の日記帳を引っ張り出してペンを走らせた。

lunedì 14 ottobre

まつたく知らなかつたけど、レオと私のことであらぬ噂が立つてたらしく、お父さんに呼ばれた。

はじめて、お父さんに名前呼んでもらえた。はじめて。

お父さんは私なんかよりずっと遙かにレオのことのほうが可愛いはずなのに、あくまで公平でいようとしてくれて、すばらしい人なんだなって今さら思った。

私相手に頼みごとするのに頭下げてくれて。

ハグまでしてくれて。生まれて初めて、抱きしめてもらえた。

いろいろあつたけど、たぶん今日が人生で一番いい日なんだろう。神様、お父さん、ありがとう。

予感的中。

というか、ダーツの的を用意していたのに、大砲を持つてこられて丸ごと打ち抜かれた気分である。

まず翌朝、フラットの前にレオのアルファ・ロメオが停まっているのを見て頭が痛くなつた。ジョラテリア・ベラ・クリスタまで送つてもらい、肩を抱かれて店に入つた。強張る身体に無理矢理理性で命令し、引き攣る顔をひしゃびしゃ叩いてやつと笑顔を作る。

スタッフの驚きようは凄かつた。例によつて「付き合つてたの！？」のような質問攻めに遭い、黙つてごめん、ちょっとケンカしてたんだけど皆に心配させたみたいで「めんなさい」と微笑みながら（実際は苦笑い）言い訳する。何だよ大騒ぎしちゃつたじやんよーと背中をバシバシやられたり、仕事場に私情を持ち込むなど苦言を呈されたり、ストレスが溜まるところ上なかつた。

昼休みにもレオは来てランチに連れ出され、リストランテ・ベラ・クリスタで食事した。こちらのスタッフの誤解も解いておかなければならぬのだった。レオの役者振りには頭が下がる。終始にこやかに笑み、穏やかな声音で（いつも冷たい声しか聞いてこなかつたふきは、こんな声してたんだと驚いたくらいである）、料理は取り分けてくれるし食べる速さも合わせてくれるし、非常に紳士的だつた。眩暈がして、鳥肌が立つた。

並んで歩くときは腰に手を回される。車道側は歩かせてもらえない。支払いも全部持つてもらえる。ついでにレオは見た目もファッショングセンスもいい。何やら羨望の眼差しを向けられて、ふきは胃が痛かつた。そこを歩いているお姉さん、替われるものなら喜んで替わります、だからそんな形相で私を見ないで。

午後の業務も視線がちくちくを通り越してぶすぶすと突き刺さり、休憩時間の度に根掘り葉掘り訊かれ、やつと一日の業務が終了した

と思つたらレオが店の前で待ち構えているという寸法。そのまま夕方の街を軽く、デートして、フラットまで送られる。今日は頬とはいえ何度キスされたことやら。バーチではなく、頬に唇をつけるキスである。心臓が持たない、色々な意味で。

そんな事を続けていたら3日と経たずに乗り込んできた。ファニア・ナンニー、確か18歳、ふきより3つ年下の、エンツォ・ナンニーの娘。赤茶けた金髪の美少女で、化粧もきっちりしているが、その表情が明らかに厄介事を運んできているようで、ふきはげんなりした。

丁度早上がりの日で、逃げられそうもない。ふきは仕事が終わるまで待つてもらい、2人で近くのマクドナルドに入った。何となくファーストフードの気分だつた。

「Da quando state insieme?」（いつから付き合つてゐるの?）

「Non mi ricordo precisamente. . . qualche mese f? . . 」（正確には覚えてないけど……何ヶ月か前）

レオとの打ち合わせで決めたことだった。何となく、氣づけば付き合つていたということにしよう。大体ふきがイッポーリトと別れたあたりを想定していた。

「Lo amo?」（彼を愛してるの?）

ファニアはハシバミ色の瞳を潤ませていた。ふきは内心で慌てる。父の大好きな娘だ、泣かせたいわけはない。

「. . .」

「Io amo!」（彼が好きなの!）

突然、ファニアは叫んで泣き出した。店の視線が嫌でも集まる。どうしよう、これ。

ファニアはしゃくり上げながら、切々と訴えた。

好きなの、レオが好きなの、ずっとずっと好きだったの。誰にも渡したくないの、どうしてあなたなの、どうして私じゃないの、私

のほうが絶対、絶対あの人のことを見たまに好きなのに。あなた、イッポーリトとも、その友達とも関係があつたていうじゃない、なにレオにまで近づくなんて。私、真剣なの、あなたみたいに遊びでとかえひつかえする男のひとりなんかじやないの！ 遊びなら他をあたつてよ、レオに手を出さないで！ 私はレオを愛してるの！ それを涙ながらに訴える相手は、私じゃなくてご本人のほうがいいと思うんだけどな。

可愛い女子高生が切々と愛を告白している様は、同性のふきでも中々ぐつとくるものがあった。「当人にやればあつさり落ちてくれるのでなかろうか。加えてファニアはレオが尊敬するオーナーの娘であることだし。

しかし、嫌なことを思い出させられた。ふきがイッポーリトの不健全なお遊びに付き合わされたことを、ファニアまでが知っている。人の口に戸は立てられない。

「Era il tuo ragazzo? （あなたの彼氏だったの？）」

レオめ。彼女はいらないのかと訊いた時、問題ないと呟くせに。いや、確かにいるともいないと呟くてはいなかつたが。

「？ il mio ragazzo! Sono la sua ragazza!（今だつて彼氏よ！ 私は彼の恋人！）」

何が問題ないだ、嘘つき。若い女の子を よりによつてファニアを 泣かせるとは。

ふきはボテトをつまみ、ファンタを一口飲む。イタリアではファンタはほぼ必ずオレンジ味である。グレープが恋しい。

ファニアのように一生懸命な恋をした経験は、ふきにはない。高校時代の同級生で眩しいくらいに青春していたクラスメート達もいたが、ふきがその輪の中に入ることはなかつた。ただ一種の憧れと羨望を持つて、彼らを見ていただけだ。恋など知らないで少女時代を終えてしまったふきには、ファニアのような女の子はとても輝いて見える。本当に、羨ましい。

恋人なんだから、キスだつてしたんだから、なのに酷い、どうしてあなたなの　と感情のままに動けるような素直さは、ふきが失くしてしまったものだ。それを惜しむのは、ふきとしては自然な感情だった。

「Non piangerne, non? come pensi.（泣かないで、あなたが考へているようなことじやないの）」
ふきは、これはお芝居だと説明した。レオに不名誉な噂が立ち、それを解消するための期間限定の仮初のお付き合いだと。だから人がいるところではそのように見せかけているだけで、実際男女の関係は何もない。

誤解させて「めんなさい」とふきはファニアにハンカチを差し出す。思いつきり涙を拭かれたのは、まあ気にしないことにしよう。どうせ一枚1ユーロの安物だ。

ぐすぐすとまだ泣いていたファニアは、ふきの話をにわかには信じられないようで、「Veramente?（本当に？）」と疑わしげだった。ふきは微笑を作つて頷く。レオに確認してもいいよ、と。

「Scusa, non sapevo che sei la sua fidanzata. Non voglio renderti triste.（「めんなさい、あなたがレオの恋人なんて知らなかつたの。悲しませるつもりじゃなかつた）」
どうせ芝居は遠からず解消することを伝えると、ファニアは一瞬目を瞬いた後携帯を取り出して電話を掛けた。相手は十中八九レオだろう。

「Non rispondere! Sai dove? Leo?（出ないわ！　レオがどこにいるか知ってる？）」

多分オフィスにいるはずだと言うと、彼女はそのまま飛び出していく。ふきに礼も謝罪もないま、ふきのハンカチを握り締めたまま。あれはいつ気づくのだろう。

ファンタのストローをくわえる。あの猪突猛進っぷりが、青春と

か若さとかそういうもののなのだろうか。しかしふきは18歳だったころの自分を思い出して、別に年齢ではないな、と思い直した。太陽のように眩しい光り輝くような恋はファニアにこそふさわしく、ふきには縁のないものだつた。どこまでも素直で純真で、裏表がない。ファニアはいい娘だと思つ。レオも彼女を大切にしてやればいいのに。

ファンタを飲み干すと、フタを開けてふきは氷を齧つた。口の中の冷たい感覚が心地よかつた。

その夜、レオから電話がかかってきた。

『 Hai parlato tutto a Fania? （ファニアに全部話したのか？）』

「 S? . Non fare la tua ragazzina p
reoccuparsi . （はい。彼女さん心配させちゃダメでしょ）」

『 La mia ragazza . . . （僕の彼女って……）』
「 Fania? . La tua fidanzata . Ha
detto . （ファニアさん、あなたの恋人でしょ？ そう言つてましたよ）」

人を、ましてファニアを悲しませるような嘘はつきたくない。そう言つう言つうと、レオは電話の向こうで沈黙した。

「 レオ？」

『 . . . Perch? ti importa di Fani
a così? （……どうしてファニアをそこまで気に掛ける？）』

『 Perch? no? ? sua figlia . （当たり前でしょ？ あの方の娘さんですよ）』

『 . . . ? Enzo . （……エンツォか）』

声が低くなつた。数日ぶりに聞く、慣れ親しんだトーンだつた。

何でそこで不機嫌になるの？

もともとレオはふきがエントオに近寄るのを良く思つていなかつた。エントオへの好意のあまりクリスタベラやファニアに危害を加えることを懸念していた。ならばそれと逆にちゃんとファニアを気遣うのは、歓迎こそされても嫌がられる筋合いはないと思つただが。お節介が過ぎるほどのことはしていないつもりだし。

『M a d e s s o s e i l a m i a f i d a n z a t a . F i n g i t i . （だが今は君が僕の恋人だ。ちゃんとそれらしく振舞つてもらおう）』

「L o c a p i s c o , c a p i s c o . （わかつてます、わかつてますつて）」

レオは何やら言ひよどんでいたが、結局それ以上は何も言わず電話を切つた。

ふきは溜め息を吐く。間髪入れずまた電話がなつた。今度は巧からだつた。

『やあ、こんばんは、ふきちゃん。レオとラブランだつて？』

『そう見えました？』

『いやぜーんぜん。レオは後ろに花背負つてたけど、ふきちゃんガチガチだつたよー。芝居なら芝居でちゃんとやらないと』

いつ見に来たのだらう。出歯龜とは巧らしくない真似を。

『まあどうでもいいや。いよいよ来週手術だね、体調にだけは気をつけで』

『ありがとう』『まーす』

『手術が終わつたら俺はいつたん日本に帰るから。流石に3ヶ月も奥さんほつぽつてると限界でね』

『急ですね。そうですか、わかりました』

声が浮き立つたのは氣のせいだと思つてほしい。

『レオと君の関係とか、面白いネタも新しくできてきたから物凄く後ろ髪引かれるんだけどね。でも、まあ彼女が連絡はくれるって言うし』

アビガ。

結局、彼女は巧と協力体制を築くことにしたらしい。憂鬱の種がまたひとつ増えた。

『ファニア・ナンニーは恋に恋する乙女だよね。ふきちゃん、恋の鞄当も堂々とできるのは独身のうちだけだ。せいぜい楽しみなよ。それじゃ、おやすみ』

ふつと電話が切れた。

恋の鞄当？

むしろ鞄ごと刀を差し上げて戦線離脱したい。

ガイアやベラ・クリスタには旅行だと告げて、ふきは入院した。退屈だった。念のため早めに入院したので手術日まで日がある。ふきは健康体なのでベッドの上で口がな一日過ごすのはとてつもなく退屈だった。

とはいえたたらと動き回つて知つた顔と鉢合わせてはすべてが水泡に帰す。プライバシーを振りかざして名札すら出していないので、今更無用心な真似は出来なかつた。

日記帳だけは持つてきたので、とつとめもないことを書きつけていたが、ページを埋めてしまつと本当にやることがなくなつた。入院一日田でふきは既に鬱々とした気分になつていて。テレビをつけても面白くない。イタリア語のバラエティ番組で飛ばされる早口の冗談はふきには半分も理解できなかつたし、映画もあつたがハリウッドものをわざわざイタリア語吹き替えで観る氣にもなれなかつたといくつ、と声に出して咳くようになつたところで、巧が現れた。「やあ、元氣かい？」

「元氣ですよ。病氣だつたらまずいでしょ」

健康体というものははじつとしてこりよつては出来ていない。辛いつたらなかつた。

「まあまあ、お土産持つてきたから。はいこれ」

「……何ですか、これ？」

「見ての通り iPod」

「……中身は？」

空っぽのものを渡されても意味がないのだが、そういう嫌がらせを巧は平氣でやりそつである。

「んー、ふつうに音楽と、ちょっとボイスドラマ入つてるかな。女の子が好きそつなやつ」「ドリマ？」「ドリマ？」

「ああ、トラック3とかーーとか、ちゅーじゅー」

「何の話ですか？」

「聴いてみれば？」

イヤフォンを耳にはめて言われたトラックを再生してみると
いきなり喘ぎ声が聞こえた。

そんなこ……したら……こわれちゃうよつ……あつ……

イヤフォンを耳から引き抜く。

「……巧さん。な・ん・で・す・か、これ？」

「B」ゲームのサンドライスク。あ、サンドライスクのはサウンド
トラックとドリマシDあわせたもので、音楽の合間にキャラの掛け

合いが

「いりません！」

「えー。好きかと思ったのに」

「何ですか！ 何で男同士の濡れ場聞いて喜ぶんですか！」

「そういう女の子は多いよ？」

「私を勘定に入れないのでください！」

「えー。せっかくうちの奥さんがこいつそり買つてたやつを拝借して
きたのに。攻めのほうが俺と同じタクミつて名前でし、字は違うん
だけど

「聞きたくありません！」

「残念」

くつくつと笑う巧に、本気で殺意を覚えないでもなかつた。絶対
にわざとに決まつてゐる。しかもタチの悪いことに「Pod」の中の
ファイルはどれもこれもそういう、ボーアイズラブ的なタイトルが並
んでいた。嫌がらせだ。

「それで、エンツォのことだけど

がらりと雰囲気をえて眞面目な顔になつた巧の変化に、ふきは
すぐには反応できなかつた。

「何でしょうか？」

「ファニアとエンツォは血が繋がつてないって、ふきちゃん知つて

た？」

「…………え？」

発せられた言葉の意味を理解するのに数秒かかり、それでも信じられなくて訊き返した。

「繋がつてないんだつてさ。養子や連れ子じゃなくて、結婚してから出来たクリスタベラの浮氣の子。

エンシオはずつと知らなかつたらしによ。今回の件で腎臓移植が必要だつてなつて、検査して初めて分かつたらしい。親子なら半分はDNA一致するからね、腎移植の話が出た時に真っ先に検査したらしいんだけど、半分どころか全部ハズレ、完璧に赤の他人。適合度この話じやなかつたつてさ。それから家族にひと悶着あつたらしいよ」

「……」

「そんなんわけで、君は今のところエンシオの唯一の実子だ、おめでとう！」

「おめでとうって……何がめでたいんですか」

「あれ、嬉しくない？」

自分の醜い、見たくない、嫌なところを巧は的確に突いてくる。だから、ふきは巧が苦手なのだ。

巧がふきに親愛の情など抱いていないことは分かつてゐる。肉親の情などという甘つちろいものも巧は持ち合わせてはいないだろう。それでも巧がふきにかまうのは、単に彼自身の興味を満たすためだ。ふきは、体のいいおもちゃにされているようなもの。それくらいの読みはつけられる。人の悪意にそう鈍感ではいられない。

「……何で、そんなこと」

「何でつて？」

「それが事実でも、何で私に言つんですか。巧さん、タダで情報くれるほどお人好しじやないでしょ。といふか、それだけですか？」

「まあそんなんだが。そういう言い方は可愛くないなあ

かわいくなどなくて結構だ。巧は両手を挙げてみせる。

「『』明察。話には続きがある。

まあそんなわけでエンツォの家族はここ2年間、くしゃくとして、夫婦仲は冷え切った。ただでさえ多感な時期のファニアはすっかり参っちゃって、レオに依存したらしい。もとから恋心があつて、レオがまたスマートに優しく包み込むような大人の対応したもんだから、勘違いしちゃってどんどんのめり込んだみたいなんだよなあ。今じゃもうものすごい執着っぷり。

だけど

そら来た。めでたしめでたし、で終わる話は虚構の中にしかないのだ。エンディングの前には必ずネバーがつく。ハッピーエンドはあり得ない。大団円ははじけて霧消し、登りきった山は下らねばならない。

「だけど？」

「昨日の晩、入院前夜のエンツォの部屋をファニアが訪れて、ふたりは泣いて抱き合つて和解したらしいよ。クリスタベラとはどうか知らないけどね、娘には罪はないってさ。お前は何も悪くないのに思い悩ませてすまなかつた、血が繋がつてなくともたつた一人の大切な娘だ。みたいな感じ。いいねえ、麗しの親子の愛情。ホームドラマにできそうだつたよ、あれ

「……っ」

どこで出歯龜してたんですか、というような嫌味も、喉に張り付いて出てこなかつた。巧は満面の笑みを浮かべる。

「そう、それ。その顔が見たかつたんだよ。いい顔だよ、ふきちゃん。

本当はファニアとエンツォの関係について知つて、浅ましく喜んだところを突き落としてみたかったんだけどまあいいさ。十分魅力的だよ

じゃあね、手術頑張つて　と手を振りながら巧は出て行つた。何も考えられない。何も。

イヤフォンから、ピリリリリリリ、と電話の音がする。

『僕』

何かで気を紛らわしていないと、巧の言葉に囚われてしまつ。

『ああ、どうした?』

ファニア。だめだ、考えるな。

『うん、どうつてこともないんだけど……声、聞きたいなつて思つて』

しかし甘々なドラマだ。男女でも結構なバカツプルなのに、男と男では何と言うかもう。

『ははつ、何だよ、それ。昼間さんざん聞いてるだろつか』

ふきは実際にゲイのカツプルを知らないでもないから、男同士だからつて必ずしも甘くなるわけではないことを知つてている。というかむしろならない。全然ならない。

『そりだけどさ。プライベートで聞く声は、別腹』

これはホモセクシャル版ハーレクインみたいなものではないだろうか。一種ファンタジックな、実際にはそんなの有り得ないと突つ込みどころ満載の感じが、かの出版社を髪髪とさせる。

『何言つてんだか』

ほんとだよ、とふきも思つ。

ちなみにハーレクイン出版社はイタリアではハーモニーと名前を変えている。ハーレクインとはイタリアの伝統芸能、コンメディア・デッラルテの主要登場人物の名前だから、そのへんで色々あつたのかもしれない。

『どいうのは』

でもこのギャルソン役の声優は割といいかもしれない。初々しくてふきの好みだ。いかにも純粹な青少年という感じの声で実際そういう役どころだが、意外にニヒルな悪役なぞやらせたら合つのではないだろうか。口調は乱暴ではないが、嫌味を繰り出す感じのそこまで考えて巧を思い出し、ふきは再生をストップした。

だめだ。

結局どれだけ逃避を試みても、巧の言葉に振り回されている。

寝てしまおう。

眠れば何も考えなくてすむ。

Mercoledì 23 ottobre

いよいよ明日は手術。

うまくこきますよつ。

ちゃんと私の腎臓が、お父さんに適合しますよつ。お父さんが、元気になりますよつ。おやすみなれ。

レオのアルファ・ロメオで病院に乗りつけたエンツォは、見知った顔を受付の前で見つけて思わず眉を顰めた。

外は良い天気で、気持ちの良い朝だった。加えて昨晩、数年来冷戦状態だった娘と和解を果たし、朝は家の前でお互いに混じり気なしのキスとハグを交わした後で浮き立つような気分だつただけに、エンツォは少々気を害した。

緒貝巧。

どうも好きになれないこの若者は、しかし確かにエンツォの甥であつた。母や兄にも確認を取つてみたが、間違いはない。

20年以上前、エンツォが日本で暮らしていた頃何度か顔を合わせたことはあるはずだが、エンツォの記憶にある利発で大人に好かれていた幼児の面影はどこにもなかつた。いや、思い返せば顔立ちなどは確かにあの甥っ子なのだが、人を食つたようなふてぶてしい態度には、あの頃の可愛げを思い出せるものが何ひとつ残つていなかつた。

だが彼は母や兄には気に入られているようで、何と物腰柔らかな好青年で通つてゐるらしい。「自慢の息子だ」と兄は言うし、「優しい子で嬉しいわ」などと母はすつかり入れ込んでゐる。母や兄の話を聞けば聞くほど、別人を相手にしている気がした。

その巧はエンツォと目を合わせて口の端だけで笑つたが、すつと視線を外して踵を返した。挨拶するでもなく、完全に無視した格好である。

エンツォは訝しんだが、紳士用トイレに入つていつた巧をまさか追う氣にもなれず、受付で用件を告げると看護師に案内されて病室へ向かつた。

個室に入り持つてきた荷物を整理すると、エンツォはレオを返した。仕事がある。一から十まで手助けが必要な子供ではなかつた。

看護師がざつとスケジュールを告げる。まずは手術前の最終検査だが、それまでには数時間の余裕があった。着替えを済ませ、看護師が採血を終えて出て行くとエンツォはたちまち暇になつた。

やあつて、病室のドアをノックする音がした。「Avanti!」（アバント）と言つとドアが開く。そこに立っていたのは巧だつた。

「チャオ、ズイーオ」

晴れやかな笑み。だがなぜか、好きになれない。

「何しに來た？」

「何つて、見舞いだよ。甥が叔父を見舞つちゃいけないか？」

「……なぜさつき声を掛けなかつた？」

「俺、レオが嫌いなんだよ」

思つてもみなかつた言葉に、エンツォは軽く目を見開いた。確かにあの場にはレオもいた。

だが、そもそもレオと巧にどんな接点があるというのか。「知り合いだつたのか？」

「というほどのものでもない。ほとんど俺が一方的に知つていて嫌つてゐるだけさ。向こうは俺の名前も知らないしね。何でレオが来るんだよ？ 入院なんてプライベートなものじゃないか、クリスタベラやファニアはどうしたんだよ」

「……関係ないだろ」「俺の叔母と従妹なのに？」

「関係ない」

「冷たいね。ま、いいさ。離婚すればクリスタベラは他人だし、ファンニアとも血の繋がりはないしね。確かに、関係はない」

「……」

そもそも初対面から、エンツォは巧を好きになれなかつた。いきなり現れて、エンツォの家族の最もプライベートなことを毎日中のレストランでぶちまけるような人間だ。幸いにして日本語でとは

「お人好しだよね。浮氣した妻とはいえた女にまだ情があるといたやら巧は知つていた。

「お人好しだよね。浮氣した妻とはいえた女にまだ情があるといつのなら分かるけど、他人の娘と知つてもファニアを育てるのかい？」

「ファニアは私の娘だ」

血の繋がりなどなくとも、エンツオとファニアは親子だ。その関係は死ぬまで変わらない。

2年前、血の繋がりがないと知った時。妻の裏切りを知った時。いつ終わりとも知れぬ長い透析生活を思つて暗澹となつた。その上にどんな悪いニュースもいらなかつた。考えたくなかつた。

だから心を閉ざし、拒絶し、煩わしいことから逃げた。もともとファニアは思春期でコミュニケーションが取り辛くなつており、クリスマスを介してしか会話が成り立つていなかつた。そのクリスマスとの間にあつた信頼が崩壊してからは、家族間の意思の疎通など消えた。

その影で、娘がどんなに傷ついていたか、考える余裕もなかつた。鈍感なことに、父親から干渉されずに喜んでいるだろうといふくらいに考えていた。ファニアが何か問題を起こせば親として責任を取るつもりではいたが、普段は丸つきり放任だつた。そして仕事に逃げた。

ファニアがどれだけ心を痛めていたかを知つたのは、昨晩のことだ。目に涙を湛えてエンツオの部屋をノックした娘に、何事かと驚くしかなかつた自分を殴りつけたい。ファニアがどれだけ自分を心配しているか、自分を愛しているか、涙ながらに訴えられて、この娘が一番寂しかつたのだと遅まきながら気づいた。

Ti voglio bene. Non morire.

愛している。死なないで。

たつた一晩で、何度その言葉を聞いただろう。ファニアはエンツオに嫌われていると思っていたらしい。実の娘じゃないって分かつ

たから、汚くて嫌われていると思つていた、と呞びながらエンツォに抱きついてきた。強く抱き締め返してやりながら、己の不甲斐なさに思い切り頭を打ちくなつた。自分と妻の間に何があろうとも、ファニアに罪のあらうはずがないのに。何も知らなかつた彼女が一番苦しんでいたのだと、どうして早く気づけなかつたか。

情けない父親を許してくれと、どれほど謝つたか。嫌うわけがない。ファニアを追い出そつなどと考えたこともなかつた。しかしどアニアは2年間、ずっとそれを恐れて怯えてきたのだ。

思いやつてもやれなかつた自分の不明を恥じ、ファニアに愛していると伝えた。大事な娘だと。

結局ふたりしてほとんど眠る時間も取れなかつたが、それで良かつた。手術が終わつて退院したら、遠出して旅行に出かけようと約束した。思えばエンツオが腎臓を悪くしてから家族はパレルモを離れられず、遊びたい盛りの娘には不憫な思いをさせた。

「へえ、そう。じゃあ離婚してもファニアを引き取るんだ？」

「……離婚は具体的には考えていらない」

「何でさ。浮気した女だろ」

巧は親指と小指だけを立てて中三本の指を掌側に折り込み、その手を頭の後ろに持つていつた。浮気された夫には角が生える、トイタリアでは言う。頭に親指と小指で角を生やすこの仕草は、寝取られ男を揶揄するものだつた。

「プライベートだ」

確かに、クリスタベラに対しては胸中複雑だ。以前抱いていたような愛情を再び感じることはおそらく不可能だつう。であるならば、これからずっと一つ屋根の下で暮らすのは精神的には良くないかもしない。

かといつて離婚するのが本当に良い選択肢とも思い切れない。どうするのが一番良いのか、エンツオの中まだ答えが出ないのだ。ファニアと和解したのはつい昨晩のことである。

だがひとつ確かなことは、離婚しようとするまいとそれはエンツ

オの問題で、巧が口を挟む筋合いはないということだった。

「ふうん。まあ、いいけど。

イタリアでも離婚率は増えてるのに、さすがにマフィアと関わりがあると離婚は嫌か」

カトリックの教義では離婚は認められていないが、カトリックの総本山であるイタリアにおいてさえ離婚率は近年上昇の一途である。だがそんなご時勢でも、頑なに離婚を忌避する社会は存在する。その代表格がシチリアマフィアだつた。シチリアマフィアの血の淀では妻は敬わねばならず、他人の妻に手を出したりすれば処罰は免れないし、愛人を抱えることまでは目をつぶつてもらえても離婚経験者は決して幹部にはなれない。

だが、それはマフィアの話だ。

エンツォはマフィアを憎んでいた。そもそもこの腎臓だつてマフィアの下らない抗争に巻き込まれたがためだ。そのエンツォを、マフィアの類型で語るとは。

怒りを抑えるのは一苦労だつた。

「 出て行け」

「 はいはい」

巧は一礼すると飄々とした態度でするりと病室のドアを抜けていった。それを見送つてエンツォは熱い溜め息を吐く。やはり、好きになれない。

手術は恙無く終わった。

全身麻酔のおかげで、大した実感もなく、時間の経過の感覚すらはつきりしないまま、すべては終わった。

下腹部には真新しい縫合の痕があり、心なしか何かが欠けた気もするが、それは前々からの認識によるものかもしれない。

感染の危険を考えて術後48時間は病院に留まることになつていた。手術とはいえ、適切に切つて縫い合わせたとはいえ、内臓に到達する深い傷を負つたことは間違いない。感染症の危険は十分にあることだった。

とはいえたのんびりもしていられない。ベラ・クリスタに申請した休暇はわずか1週間。何事もなくてもぎりぎり間に合うかどうかなのに、入院を伸ばすわけにはいかない。感染症になどかかるはいられなかつた。

退屈に耐えてひたすら病室で時が過ぎるのを待ち、念のためもう少し入院したほうが本当は良いのだが、と言つ医師を押し切つて退院の許可をもぎ取つた。

抜糸もまだなのにと渉られたが、毎日通院することを条件に何か折れてもらつた。巧の弁舌のおかげだつた。通常は手術後4、5日は歩けず、スマーズについて抜糸は1週間後、さらに1、2週間術後検査を行つてから退院だが、その日暮らしのアルバイトにひと月も休んでいる余裕はない。それに、受醫者であるエンツォはさらに長い期間の入院を余儀なくされる。数週間に渡つて同じタイミングで業務に出てこなければレオに何かしら勘付かれる。1週間が限界だつた。

歩けるようになつて即座に退院した。付き添いには巧が来てくれた。

「や、元氣？」

「まあ何とか……」

術後は熱を出したりもしたが、もともと平熱が低いので何とか誤魔化せた。今も全身がだるい。心なしか左下腹部の手術創がじくじくする気もするよくなしなによくな。

「荷物持つよ。あと、はい、これ

「……？ 何ですかこれ」

巧はキャリーケースをふきから奪い、代わりに何かの包みをふきに差し出した。

「ヴェネツィア土産。マスク型のチョコ詰め合せわせ」

「ヴェネツィア行ってきたんですか？」

「君がね

「？」

「セリーニ」としておかなきやまざいんだろ？ 君は旅行に出でいた。なら土産のひとつも買ってこなことおかしいじゃないか

「ああ……」

そこまでは気が回らなかつた。本当に、巧は頭がよく回る。

「あと、レオにはこっちね

そう言つて巧が差し出したのは、イタリアには珍しへ一寧に梱包された小さな箱だつた。パッケージの文字を読み取る。

「……ヴェネツィアングラスですか

「ちゃんとムラーノ島のものだよ」

「でも何で

「『恋人』なんだろ？ 順と回じものじゃまざいだり、レオが拗ねるよ

「まさか

それはお宅居だと言つて居るのに、巧はふきをからかうつもりなのかいつまでたつてもその設定を引きずる。

「まあ、でも……ありがとうござります」

お宅居ならまわりに分かるようにあからさまにやらなくては意味がない。それくらいがちょうどいいのかもしれなかつた。一度やる

とHンツォに約束してしまつた以上中途半端は出来ない。

「で、これ中身何なんですか？ カップとかにしては小さいし」

「指輪」

「……！ ゲホッ、ゴホッ！」

むせた。お芝居にも限度がある！

「た、巧さん！」

「心配しなくともちゃんとしたやつじゃなくて、幅の広いガラス細工のオモチャだつて。宝口もついてない。ちなみにふきちゃんのはコレ。おそろいだからね」

「おそろ……」

絶句するふきの前で巧が取り出したのは、確かに何の飾りもついていないシンプルな幅広のガラスの指輪だつた。ピンク色のグラデーションが綺麗に出ている。

可愛い。あまり洒落心のないふきには「これくらいのシンプルさがちょうどいい。だが。

「レオのはちょっとどうつめて青バージョンだよ」

「いくら何でも……」

「イタリアでの愛情表現なんてやりすぎがちょうどいいわ」

「……」

それは事実であつたのでふきは何も言えず黙り込む。ファーストフード店などでも人目憚らずキスをする男女の多いこと。

それに、どのみちふきが何と言おうと、巧は自分が提示した選択肢以外を許しはしないだろ？

溜め息が出そうになつた。

「お土産代しめて60ゴーロね」

「……」

もはや溜め息も出なかつた。

巧の指示でレオにSMSを送り、パレルモ中央駅に迎えに来ても

らうことになつた。つまつこちもわざわざ中央駅に向かわねばならないということだ。

ダイヤまで調べて、遅延も計算に入れた上で待ち合わせ時間を指定するのだから巧も手の込んでいる。意外にマメな性格なのかもしない。バックの音でばれるといけないから電話ではなくSMSにしろと言わた時には、何のアリバイ工作だと思つたものだつた。駅までタクシーで乗りつけると、巧はホームを指示してあつさり手を振つた。

「じゃ、ふきちゃん、俺はこれで」

「どちらへ?」

「空港。帰るよ」

「こまま?」

ふきが驚いたのは巧が手ぶらだったからであつて、決して別れを惜しんだわけではない。ないと言つたらない。

「荷物は先に送つてあるから。レオと鉢合わせてもまずいしね。それじゃ元氣で」

「はい……巧さんも、お気をつけて」

少しきこちなくなつてしまつたが何とかそう言つと、巧は笑つてふきをハグし、頬にキスを落とした。ぞわつとしないでもなかつた。巧は踵を返すと、そのまま振り返りもせずに行つてしまつ。何かとふきを振り回してくれた従兄弟にしてはあつけないほどの去り際だつた。

そのまま巧の姿を見送るともなしにぼうっと見ていると、携帯が震えた。レオだ。

「P r o n t o . (もしもし)」

『Se i arr i vata? (着いたか?)』

「S ? . (はい)』

『A s p e t t a m i l ? . A rr i v o i n 5 min

uti . (そこで待つて。5分で着く)』

レオも不思議だ。巧に流されて迎えに来てもらひことになつてしまつた。

まつたが、よく考えてみれば店以外の場所でまでお芝居をする必要はなかつたのではないか。巧に言いくるめられてしまつた自分はともかく、レオまでがその気になつたのはなぜなのか、ふきには分からなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8772s/>

深き沈黙の娘

2011年8月11日03時40分発行